
欲望の王と無限の空

間上 通

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

欲望の王と無限の空

【Nコード】

N3977V

【作者名】

間上 通

【あらすじ】

グリードとの戦いを終えた少年、火野英治。彼はある日異世界に飛ばされる。その世界は女尊男卑の女性にしか使えない兵器、ISが存在する。英治はその世界で何を見るのだろうか。

（この小説はISと平成ライダーのクロス物でオリ主ものです）

異世界と学園とIS（前書き）

頑張つてこの小説こそ完結させたい。

異世界と学園とIS

「ん……ここはどこだ？」

いきなりだけど、俺、火野英治は気が付けば知らない場所にいた。全てのグリードを倒し、オーズの力も封印して旅に出たんだ。でも、旅の途中に謎の光に飲まれるとここにいたんだ。

「うーん、ここはどこなんだ？ ん、どうしてこれが！！ それにこっちは何だろう？」

ポケットに入っていたのは3枚のメダル。もう目にすることはなと思っていたものの、コアメダル。タカとトラとバッタがあった。だが、オーズドライバーはなくて、代わりに見たことのないプレスレットをつけていた。全然心当たりがないんだよな、これに。

「その男、ここで何をしている」

不意に後ろから声がした。声の主は黒いスーツを着た美人で、緑色の髪をした中学生くらいと思う人を連れていた。

「えっと、何をしているってゆーか、気がついたらここにいたんです。それよりここはどこなんですか？」

「ここはIS学園だ」

怪訝な顔をして答えられた。IS学園？ 何だろう、それは？

「IS学園って何ですか？」

「何？ どうやら面倒なことになっているようだ。詳しく話を聞かせてもうおう」

「織斑先生！！ 彼が腕につけているのはISでは！？」

ISって何？ そのことを聞くと、何を言っているんだって顔をされた。それでも世界を旅しているから色々と知っているつもりなだけだなあ。

『IS』、正式名称『インフィニット・ストラトス』。宇宙空間での活動を目的として開発されたマルチフォーム・スーツ。

しかし、本来の目的である宇宙進出は全く進展がなく、ISはその高いスペックを持て余していたそうだ。そのスペックにより、ISは兵器として使われることとなったんだけど、各国の思惑から、ISはスポーツとして使われるようになった。結局の所、ISは飛べるパワードスーツに落ち着いたみたい。

しかし、ISは大きな欠点を抱えていたんだ、『ISは女にしか使えない』ということ。そうになると、世界はISを使える女性が偉いという風潮になる。いわゆる、女尊男卑ということになる。

「これがISだ。まさか、異世界の人間と会うことになるとはな」

ISの説明を聞いた後、俺は何度も何度も自分ですら分かっていない現状を説明した。取り調べをした織斑千冬さんはいいい人で、俺の目を見て「嘘をついている目ではないな」と言ってくれた。まあ、1番の決めたになったのは俺の免許だった。俺は16歳だけど、すぐにバイクの免許を取ったんだ。そこに書かれている日付とこの日付は違う。この免許が偽物ではないことが照明されたからかな、話を信じてもらえたのは。

「織斑先生！！ やっぱり彼が持っていたのはISです。それも登録されていないコアの」

部屋に飛び込んできたのは最初に織斑さんと一緒にいた山田真耶さん。中学生じゃなくて、この教師だったんですね。ごめんなさい。山田さんは俺が持っていたブレスレットの解析をしていたみたいで…… って、それISだったの！？

「火野。どうしてお前はISを持っていたんだ？」

「わかりません。気が付いたらそれを持っていたんで……」

「あと、このISの名前は『ライドオーズ』で、操縦者には火野君が登録されています」

「えっと、ISって女性しか使えないはずなんじゃ？」

そう聞くと、織斑さんはため息をついて一言。

「あいにくだが、私の弟もISを起動させてしまった。例外がないわけではないようだ」

結局、俺はこのISを起動させてみる事となってしまった。どうなるんだろ、俺？

アリーナに連れてこられた俺は、ISの展開のイメージの説明を受けていた。俺がこれを起動させれるか、どうかで俺の扱いが変わってしまうみたい。どっちになっても怖いなあ。

「さて、やってみますか。ライドオーズ、起動」

俺の体に粒子が集まっていくようで、それが体を包むアーマーを形成していく。何秒かかったけど、俺は濃いグレーの装甲を身に纏っていた。装甲が展開されたのは肩、胸、腕、腰、脚に頭。名前にオーズってあったからカラフルかと思ったけど、そうでもないようだ。

「起動したか。火野、武装を確認してみろ」

武装は…ここか、一覧にあっただのは剣が1本。名前は『オーズカリバー』で、斬撃も飛ばせるみたい。

「武装の展開はできるか？ 最初だから声にだして呼んでみたほうがいいかもしれないな」

「そうですか。来い、オーズカリバー！」

ISが展開されるように光の粒子が集まり、剣の形となる。これがオーズカリバーって、メダジャリバーじゃん。

「ふむ、次は飛んでみる。ああ、こっちのイメージは…」

「大丈夫です。そっちはなんとなくイメージできますから」

イメージするのは赤い翼。炎を纏い、空を舞う不死鳥を。次の瞬間、俺は宙に浮かんでいた。そして自由に飛ぶ。

「火野君は凄いですね。初めてなのにあんなに自由に空を飛べるなんて」

「ああ、だが妙でもあるな。あるで火野は何かで飛んだことがあるようだな」

織斑さん達が話している間も俺は飛ぶのを続けていた。オーズとは違い、直接、肌で風を感じるのは心地よかったから。

「火野、最後だ。お前のISの適正を見る。山田先生、お願いします」

「えー！ 私ですか…はあ、わかりました。準備してきます」

しばらく待つと、山田さんが緑の装甲を纏って現れた。データによると、山田先生が使っているのは『ラファール・リヴァイヴ』というものらしい。それがどんな機体なのかわからないけど。

「火野君、よろしくお願いしますね」

山田さんは微笑みをこちらに向けてくる。こちらも「お手柔らかにお願いします」と返しておいた。

「それでは、始める」

「いきます」

織斑さんの掛け声とともに、山田さんは真剣な目付きになって、アサルトライフルをこちらに向けてくる。それをかわして切りかかるが、よけられる。正直、ズレを感じるっていうか、思考と反応にタイムラグがあるっていうのかな。

だが、そんなものを気にしている余裕はなく、山田先生は攻撃を続けてくる。投擲されたグレネードをよけると、そこにはアサルトライフルを構えた山田さんが。

「しまっ——」

ドンッドンッ！

アサルトライフルの直撃を貰い、バランスを崩して地面に激突する。

こっちのシールドエネルギー、ようするにHPみたいなものは残り少ない。いちかばちか、オースカリバーの斬撃にかけてみるか。

「はあああああああ」

構えるこちらを警戒しながら、一定の距離を保つ山田さん。彼女は銃口を向けてくる。

「セイヤーーーー!!」

俺が剣を振ると、引き金が引かれたのは同時だった。

鳴り響くブザー。結論から言うと、俺の負けだった。俺の最後の
一撃は当たって、大ダメージを与えることに成功したがシールドエ
ネルギーを0にするには至らなかったということだった。

「火野、お前はIS学園に入学することになった。お前が何であれ、
上は男でISを使える者のデータが欲しいようだ」

IS学園は寮のため、寝る場所はあるし、入学するとある程度の
資金援助はあるそうだ。行き場がない俺にとっては断る理由もない
ため、受け入れることにしたんだ。

ただ、問題は織斑さん改め織斑先生の弟以外は女子だ、というこ
と。色んな意味で大丈夫かな。不安になってきた。ちなみに入学式
は1週間後で、それまでにISの基礎知識を叩き込まれることにな
って、泣きそうになったのは別の話だ。

入学式当日。俺はイレギュラーであるため、クラスへの合流は自
己紹介の時間からになった。まあ、下手に混ざれば大変なことにな
るんだろうな。で、俺は織斑先生と一緒に教室に向かっていた。俺

のクラスは織斑先生が担任で、山田先生が副担任の1年1組。織斑先生の弟、織斑一夏も同じクラスなので正直、ホッとしている。男子1人っていうのは絶対辛いよな。

「私が呼んだら入ってこい」

教室に着くなり、織斑先生はそう言い残して入っていった。織斑先生が入っていくと、「げえっ、関羽!？」と何かを叩いた音が聞こえてきた。関羽って言ったのは織斑先生の弟だろうけど、その後の叩いた音は何だろう？ 知りたいけど、何か怖いな。

今度は「キャーーーーー」だの、「お姉さまに憧れて来たんです」とか、「お姉さまのためなら死ねます」とか聞こえてきたから、さらに不安になってきた。大丈夫…だよな？

「都合上、入学式にこれなかったやつが1人いる。火野、入ってこい」

閻魔大王のお呼びがかかった。怖いよ、マジで。こういう時は、あれを言えば良いんだったかな。

「逃げちゃダメだ、逃げちゃダメだ、逃げちゃダメだ、逃げなきゃダメだ…って違う!!」

こうして教室の扉開ける。一斉に注目される俺。そして一言。

「……間違えました」

扉を閉じる。ふう、危なかった、俺は学校に来んだ。動物園に来たんじゃないからね……

ガシッ、スパーン！！

ああああああああ、頭が割れる。そして引きずられた俺はもう1度、大量の視線にさらされた。

「いい加減にしろ。お前は普通に自己紹介ができないのか」

「さ、サ―イエツサ―」

有無を言わさない口調、そして、視線。とどめとばかりに手にする凶器（出席簿）。ダメだ、勝てる気がしない……

「えーと、火野英治です。一応、ISが使えるということで入学することになってしまいました。えっと、よろしくお願いします」

自己紹介が終わると同時に響きわたる黄色い悲鳴。耳が痛い……

「静かにしろ！ 全くはしゃぐのは勝手だが、時と場所を考えると火野の席は織斑の隣だ」

俺が席に着くと同時に始まる授業。この学校生活に不安を感じながら、どこか楽しみにしている俺がいるのも事実だった。

異世界と学園とIS（後書き）

誤字・脱字、設定上のミス、疑問点、感想お待ちしております。

ポニテと金ドリと推薦（前書き）

COUNT THE MEDALS

英治が持っているメダルは……

タカ

トラ

バッタ

ポニテと金ドリと推薦

「んゝ。終わったあ」

1時間目が終わって背伸びをしている俺は隣を見て固まった。

「あー……」

隣の席の織斑一夏がとても深刻な顔をして悩んでいたからだ。これって話しかけていいのかな？ あ、でも早いうちに仲良くなっておきたいからね。

「えっと、大丈夫？」

「ん、ああ、悪い。えっと火野だったな。知ってると思うけど織斑一夏だ。よろしくな」

「英治でいいよ。よろしく一夏」

「それにしても英治がいてくれて良かったよ。男1人っていうのはキツイしな」

早速仲良くなれた一夏と話している最中、周囲の女子は「男の友情：ハアハア」、「織斑君×火野君ね」とか聞こえてきた。色んな意味で大丈夫なのかな、クラスメイトは？

「……ちょっといいか」

「……第？」

俺達を珍獣のように見ている女子の中、1人話しかけてくる人がいた。ポニーテールの人だけど、一夏と知り合いみたいだな。あの感じから、久しぶりに会ったって感じだな。

「悪い、俺ちよつと行ってくる」

ポニーテールの人に連れられてどっかに行った一夏。感動の再開を邪魔するつもりはないけど、俺を1人にしないで。

キンコンカンコン

2時間目の始まりを知らせるチャイムが鳴った。授業が始まるから、と言って自分の席、教室に戻っていく女子。勉強は好きじゃないのに、それに助けられたってのは微妙だ。

パンツッ！！

何かが叩かれた音がした。この音は織斑先生が出席簿を振り下ろした音だな。

「とつとと席に付け、織斑」

「……ご指導ありがとうございます、織斑先生」

案の定、誰か、それも一夏が叩かれていた。さつさと座らないからだよ。

「——であるからにして、ISの基本的な運用は——」

」

教壇に立つのは山田先生。周りを見ると1人を除いて、皆はスラ
スラと板書していく。俺は1週間で叩き込まれたものがあるから、
何とかついていける状態だ。

「英治、これわかるか？」

「うん、まあ、何とかってとこかな」

「……マジかよ」

「織斑君、何かわからないところがありますか？」

ソワソワしている一夏に気づいたんだろう。山田先生が一夏に尋
ねる。一夏の様子からだ、全くわからないんじゃないかな。

「全くわかりません」

「……え！？」

自信満々に答える一夏に、固まる山田先生。一夏、そこは自信満
々に答えるところじゃないでしょ。ほら、山田先生が戸惑っているし。

「え、えっと、織斑君以外にここまでわからないところがある人
はいますか？」

シーン……。

誰も手を手を挙げないから、顔が青くなっていく一夏。あの参考

書を読めば何とかなると思うんだけど。

「……織斑、入学前の参考書は読んだか？」

「電話帳と間違えて捨てました」

パンツ！！

また降り下ろされる出席簿。というか、あれは必読じゃなかったの？ 俺はISの知識を身につけさせるためのものかなあ、と思っていたんだけど。

「再発行してやるから1週間で覚えろ」

「い、1週間であの厚さはちょっと……」

「やれと言っている。それに火野は1週間である程度だが覚えたぞ」

そう言っただけを指す織斑先生。まあ事実だけど。

話が進んでいくと、山田先生が放課後、一夏の補修をすることになった。

「あ、でも織斑先生がお義姉さんっていうのは……」

えっと、どうしたら補修からそんな話になるのかな。えーと、頑張ってください。

「あー、んんっ！ 山田先生、授業を」

妄想が暴走していそうな山田先生は正気に戻ったようで、授業が

再開された。山田先生、ISに乗ってるときはしっかりしているのに……

「ちょっとよろしくて?」

「ん? 何か用?」

「へ?」

2時間目終了後、いきなり話しかけてくる人がいた。金髪ロールで、俺達を見下しているような視線だった。これがこの世界の「いまどきの女子」なのかな?

「まあ! なんていう反応ですの。わたくしに話しかけられるんですの、それ相應の態度があるのではないかしら?」

本当に偉そうにしている人だな。こういうのはあまり熱しないように軽く対応するのがいいのかな。

「えっと、オルコットさんだよな? さっきも聞いたけど何の用かな?」

一夏は何故かわからないけど、余計なことを言いそうだから、俺が対処しないと。

「ふん、まあいいですね。イギリスの代表候補生にして、入試主席のわたくしですもの。その位の態度で許してあげますわ」

答えになってないよ。俺は何の用か聞いたんだけど。

「なあ、質問いいか。代表候補生って何？ それに俺は君が誰だか知らないし」

「あ、あ、貴方、本気でおっしゃってますの？」

一夏！！ 何で余計なことを言ってるの？ というか、代表候補生なんか文字通りだよ。オルコットさんはショックで何かブツブツ言い始めたし。

「えっと、代表候補生は国のISの操縦者の候補生のことだよ。文字通りの意味だよ」

「なるほど、エリートみたいなものか」

「そう。エリートなのですわ」

あ、何か復活した。でもあくまで候補だからね。絶対的に偉いつてわけじゃないと思うな。

「あ、貴方もわたくしを侮辱しますの？」

何か不機嫌な顔でこっちを見るオルコットさん。まさか、俺の心を読んだ？

「いや、普通に声にでていたけど」

あ、そうなの。

「ふん。本来ならわたくしのような人間とクラスを共にできるのはとても幸運なことですよ。その現実を理解していただける？」

「そうか。それはラッキーだ」

うん、さすがに俺も一夏の反応をとるかもな。人を見下しすぎだ。

「……馬鹿にしていますの？」

いや、君が幸運だと言っただけだ。

「大体、よくISの知識がないのに入学できましたわね。唯一の、いえ、今は2人の男のIS操縦者だからもう少し知的な人物かと思っっていましたけど、期待はずれですね」

「オルコットさん。1ついいかな。男はISに関わりをもたない人が大多数なんだ。それなのにISの知識がないからってああだ、こうだ言うのはどうかと思うよ。貴族の振る舞いはそういうものじゃないと思うけど」

キンコーンカーンコーン。

言い切る同時になるチャイム。

「っ……！　また後で来ますわ！　逃げないことね、よくって!？」

捨て台詞を残してオルコットさんは席に戻っていった。ああ、完全に敵視されたな……

「3時限目を始める前に、クラス代表を決めないとな」

教壇に立った織斑先生が告げる。クラス代表とは要するにクラス長のようなものらしい。クラス対抗戦に出るとかすることもあるけど。何か嫌な予感がするなあ。

「はいっ。織斑君を推薦します」

「私もそれがいいと思います」

「俺もそれがいいと思います」

次々とあがる一夏がiiiって声。俺に来ないように一夏に誘導しない。

「え、お、俺？ って何で英治も推薦してんだよ！ だったら俺は英治を推薦します」

え？

「確かに火野君でもいいかもね」

「私は火野君の方がいいな」

一夏の一言をきっかけに俺の名前も言われ始める。なんてことをするんだ。

「では候補者は織斑に火野。他にはいないか？ 自薦他薦は問わないぞ。言っておくが2人共、他薦された者に拒否権はないぞ」

うん、この世界に神なんていない。

「待ってください！ 納得がいきませんわ！」

音をたてて立ち上がったのはオルコットさん。「男なんかが——」とか「屈辱的」とか言っているけど、まあ、やってくれるのなら言わせておくかな。

「大体、文化としても後進的な国で暮らさなければいけないこと自体、わたくしにとっては耐え難い苦痛で——」

「イギリスだって大してお国自慢ないだろ。世界一まずい料理で何年覇者だよ」

日本の侮辱まではじめたオルコットさんに一夏は怒った。俺もさすがに不愉快だな違う世界とはいえ、自分の生まれた国を馬鹿にされて。

「なっ……私の国を侮辱しますの？ 極東の猿のくせに」

もう我慢できないや。自分のことなら我慢できるけど、友達を馬

鹿にされて黙っていられるほどできた人間じゃないから。

「何でオルコットさんはこっちに来たの？ わざわざ苦痛な日本に。それに国にはその国のいいところがあるんだ。一夏がイギリスを馬鹿にしたようなことを言ったのは謝るよ。でも、君だって日本を侮辱している。それで自分が被害者面するのがイギリスの礼儀なの？」

「も、もういいですわ。決闘ですわ」

「おう、いいぜ。四の五の言うよりわかりやすい」

「言っておきますけど、わざと負けましたらわたくしの奴隷にしますわよ」

「真剣勝負で手をぬくほど腐っちゃいない」

気が付けば一夏とオルコットさんで白熱した状況になってる。忘れられているんじゃないかな、俺？

「ハンデはどれくらいつける？」

一夏のその発言にオルコットさんは嘲笑を浮かべ、クラスの皆は笑い出す。この世界の常識は女子より男子が強いだもん。強いのはISだろうに。

「一夏、君は初心者なんだからハンデとかは考えなくていいよ。大体、真剣勝負だからね」

「えゝ火野君も何言ってるの？ 男が強かったのはずっと前の話だよ」

「それはISが強いからじゃないかな。ISが使える男子が女子より弱いつてことは決まってると思うよ」

そう言つと黙り込むクラス。多分、皆の中では女子「IS>男子」つてなつていたんじゃないかな？

「さて、話は纏まつたな。それでは勝負は1週間後の月曜。放課後、第3アリーナで行う。織斑、オルコット、それに火野は用意をしておくように。それでは授業を始める」

結局、俺も戦うことになったのか。どうせやるんだつたら頑張ろうかな。クラス代表はやりたくないけど、オルコットさんには負けたくないから。

ポニテと金ドリと推薦（後書き）

意見、感想。その他お待ちしております。

とても私事な疑問ですけど、オーズで一番好きなコンボは皆さん何なのでしょう。自分はタジャドルですけど、フィギュアーツの影響でガトラバも気に入ったんですけどね。あ、ガトラバはコンボじゃないか（笑）

放課後と管理者と説明（前書き）

C o u n t t h e m e d a l s

英治が持つてるメダルは……

タカ

トラ

バッタ

放課後と管理者と説明

放課後、部活とかに入るわけでもなく、補修もない俺は寮の自室へ戻ることにした。1026号室、それが俺の部屋だ。2人部屋だから一夏が来るのかな。

あれこれ考えているうちに自室へとたどりついた。とりあえずI Sの参考書を読んでおくかな。一夏より先に覚えないと織斑先生にボコボコにされそうだしね。

「えっと、今日はPICについて…」と

「……ズ、…あなたに……伝……こと……」

参考書を読んで数分。頭に声が響いてきた気がした瞬間、俺の意識はブラックアウトした。

「ん、俺、寝ちゃったのか…って、ここどこ？」

目が覚めた俺に見えた光景はビルが見える夜の公園みたいな場所

で、マフラーを巻いた人が立っていた。

「気がつきましたか。火野英治、いや、異世界の仮面ライダーオーズ」

「っ！！ どうしてそれを？ それに仮面ライダーって…」

俺は目の前の人が出たことに絶句した。俺がオーズであることを知っている、それを知っているのはごく一部のはずなのに。

「警戒しないでいいですよ。僕の名前は紅渡。貴方に伝えることがあつて来ました。貴方ならわかると思いますが数多くの世界があります。いわゆるパラレルワールドですね」

紅さんが何かをしたのだろうか。辺りには沢山の地球が浮かんでいた。

「それぞれの世界には戦士が生まれました。それを仮面ライダーといいます。人類の進化である存在や時を護る存在、一言に言っても仮面ライダーは沢山います。そして貴方のオーズも仮面ライダーの1つです」

「そうなんですか。でも、俺はもうオーズの力は……」

そうオーズの力はもうない。俺の世界のグリードを倒したときに同時に封印した。この世界に来たときに何故か3枚のメダルは持っていたけど。

「そのことに関しても聞いてください。貴方がこの世界に来たのは異世界、つまり貴方とは違うオーズが関係しています」

「俺とは違うオーズ……?」

「実際に見てもらった方が早いですから」

紅さんが見せたものは異世界のオーズがイマジンと呼ばれる怪人と戦うところから始まった。異世界のオーズはアंकと組んでいたんだ。

オーズの戦いの途中に現れた紺色の仮面ライダー、電王。イマジンは近くにいた少年を使って過去に飛んだ。イマジンと戦う役目を持つ電王は時を超える能力を持っていた。強欲なアंकは過去に飛んで、その時代のコアメダルを手に入れようと電王の時を超えるための力、デンライナーに乗り込んだ。それを止めるためにオーズもデンライナーに乗り込んだ。

でも、オーズやアंकが勝手なことをすると過去が変わってしまう。デンライナーのオーナーにデンライナーから出るな、と厳重な注意を受けていた。

結論からいくと、アंकは勝手な行動をして、セルメダルを過去に落としてしまった。それに気づかず現代に戻ってきたオーズ。しかし、現代は変わっていた。過去にいた組織、ショッカーがセルメダルと独自に作ったコアメダルで新たなグリードを生み出した。そのグリードはその時代の仮面ライダーを倒し、自分達、ショッカーの駒とした。ショッカーを倒せる者が居なくなつたため、それ以降の仮面ライダーは誕生しなくなる。そして人類はショッカーの手に征服された。

「で、これのどこが俺がこの世界に来た理由に?」

「話はまだ続きます」

現代に帰ってきたオーズ。過去を修正しようとしたが、失敗してデンライナーと相棒を失った電王はシヨッカーに敗北し、捉えられた。

誰もが絶望したとき、とある科学者によって洗脳を解かれた仮面ライダー1号、2号。助けられたオーズ、電王。人々の思いにより復活したそれ以降の仮面ライダー達。彼らの総力戦により、シヨッカーは倒された。

役目を終え、去っていくライダー達。別れを告げ、去っていく電王。めでたしめでたし、という感じで終わったのだ。

「異世界でこんなことがあったのはわかりましたけど、一体これのどこに問題が？」

「まず、最初のイメージと契約した少年です。なぜ彼は40年前の時間に関わりを持っているのか。そして彼はデンライナーについて行き、40年前に置き去りにされました。彼は洗脳された仮面ライダーを救い、現代では彼の親友の父親となっていました」

「????」

何が問題なのか全くわからない……

「つまりです。同じ世界なのに違う時間軸が生まれている。これだけならいいのですがオーズは電王といたために時間の影響を受けません。2つの時間軸があるにも関わらずオーズは1人だけ。簡単に修復できなくなった時間を修復した弊害として当時オーズが使えたメダルが別の世界、つまり貴方がいるISの世界に流れたんです」

コアメダルの扱いはオーズが一番いい。だから戦いが終わっている俺が呼ばれたってことなのかな。

「僕が貴方に頼みたいのはコアメダルの回収及び管理です。封印する手段、場所がない以上、誰か信用に値する人物に頼みたかったです。後はこれを」

渡されたのはオーズドライバーと、カマキリ、チーター、ゴリラのコアメダル。

「これが必要とされるってことは怪人がいるんですね」

「ええ。まず風都という街がその世界にあります。そこにはドーパントと呼ばれる怪人と仮面ライダーWがいます。それにコアメダルから作られたグリードのようなものも誕生してしまいました。クワガタのメダルからならクワガタの怪人が生まれ、クジャクならクジャクの」

どうやらコアメダルで生み出されたヤミーと考えればいい感じみたい。コンボはタトバしかねないけど、使いやすいメダルがあるから充分戦えるだろう。

「僕達の役目は世界の管理であるためにむやみに世界に干渉はできません。ですから」

サポートしかできない、と続ける紅さん。

「そういえば、俺のIS、ライドオーズって？」

「あれは貴方がこの世界で行動をしやすいように僕が与えたISで

す。それでは頼みましたよ、仮面ライダーオーズ」

紅さんがそう言うと同時に俺は元いた場所、寮の自室に帰った。たき

やらなければいけないことがあるけど、俺しかできないし、後悔はしたくない。だから俺の手が届く場所でやってみよう。

決意を新たにしたところで、ご飯を食べようと思った。隣の1025室の扉がボロボロだったけど何かあったのかな。

翌朝。

結局、一夏が来なかったので男子は1人部屋だと思って食堂に来ると、不機嫌そうなポニーテールの人と一緒にいる一夏がいた。

「おはよう、一夏。一夏も1人部屋？」

「いや、何故か筈と同室だった。てつきり英治とかと思ってたんだけど」

「そういや一夏はその子、えっと、篠ノ之さんと親しそうだけど、どんな関係なの？」

「俺と筈は幼馴染だけど」

幼馴染か。俺にはそういう人がいないな。親に連れ回されて色んな国に行ったからね。

「知ってると思うけど、俺は火野英治。よろしく、篠ノ之さん」

「ああ」

「あ、隣いいよね」

「おう、いいぜ」

それにしてもここの学食はメニューが多いなあ。やっぱり色んな国から人が来るのが理由かな。ちなみに俺の朝ごはんはパンにスープ、サラダにスクランブルエッグの洋食セット。和食セットが迷ったけど、気分でこっちに決めた。

「ところでさ、一夏って何号室なの？」

「1025号室だけど。それがどうかしたか？」

「……一体、昨日は何してたの？俺は1026で、何かの音がよく聞こえたんだけど？」

「それは……」

言いよどむ一夏。何かやましいことでもあったのかな？

「いやいや、そんなことあるわけないだろ」

そう聞くと、必死で否定された。何かあったんじゃないかな。ま

あ、人の恋路にを邪魔する奴はなんたらかんたらって言うから、あまり突っ込まない方がいいか。俺は恋愛は苦手だから。

「いつまで食べている！ 食事は迅速に効率よく取れ！ 遅刻したらグラウンド十周させるぞ」

一夏達と雑談を交わしながら食べているけど現れた1年生寮の寮長こと織斑先生。食事はゆっくり食べたいけど、グラウンドを走らせられるのも嫌だからなあ。

放課後と管理者と説明（後書き）

今回からライダー色はかなり強くなってきます。

次回はクラス代表決定戦の話と英治とライドオーズの設定を載せたいと考えています。

感想、意見、誤字脱字報告、お待ちしております。

Regret nothing Tighten Up (前書き)

Count the medals
オーズが使えるメダルは……

タカ

カマキリ

バッタ

トラ

チーター

ゴリラ

Regret nothing Tighten Up

早くもあれから1週間。代表決定戦当日。ISそのものについて詳しくなかった俺は何とか勉強して、何回かアリーナで練習しておいた。元々は一夏と一緒に練習しようと思ったんだけど、何故か剣道の練習ばかりしていたからやめておいた。ISの勝負をするんじゃないかったのかな。

話を戻そう。今回の決定戦はくじ引きの末、1回戦が一夏とオルコットさん。それで勝った方が俺と戦うことになった。

一夏のIS『白式』はさっき届いたばかりのもので、結局一夏はずっと剣道の練習をしていたらしい。大丈夫なのかな？

「じゃあ、箒、英治。行ってくる」

「あ……ああ。行つてこい」

「頑張れ」

首を縦に振った一夏は、ゲートから発進して行つた。そしてオルコットさんのIS『ブルー・ティアーズ』と対峙する。

「あら、逃げずに来ましたのね。いいですね。まずは貴方から倒して差し上げますわ」

「そうかよ」

「さあ、踊りなさい。わたくし、セシリア・オルコットとブルー・

ティアーズの奏でる円舞曲で」

そう言うやいな、オルコットさんは大型のライフル スターライ
トmk? のトリガーを引いた。放たれるレーザーが開戦の合図と
なった。

オルコットさんの連射を何とかよけ続けている一夏。中にはかす
っているのが多く、さらに白式の武器は近接ブレードしかない。経
験、射程とどれをとっても一夏が不利なのは一目瞭然だった。

そこから畳み掛けるようにオルコットさんのESからは青いフィ
ン状のパーツを飛ばしてくる。あの武装の名前が ブルー・ティ
アーズらしいんだけど、どう見てもファンネルにしか見えない。さ
らに細かく言うと、自由の名前をもつやつの後継機が、翼から飛ば
すやつだな。

最初はオールレンジ攻撃に苦戦していた一夏だけど、攻略のきつ
かけをつかめたのか、少しずつだけど、かわせるようになっていた。

「27分。もった方ですわね褒めて差し上げますわ」

「そりやどうも……」

オルコットさんが言ったように試合開始から27分が経過した。
一夏の動きは段々良くなっていくなんだけど、追い詰められているこ
とをシールドエネルギーが語っていた。俺ならどうやってあのビッ
トに対応しようか? ライドオースも斬撃が飛ばせる位しか白式と
違わないし。いや、機動性で負けているか。

「うおおおおおおおお」

雄叫びをあげた一夏はビットを1つ破壊した。そこから次々とビ

ットを破壊してく。一夏なりの攻略方を見つけたんだね。

そして4つのビットを壊した一夏はそのままオルコットさんに突進していった。これで決めれるのかな？

だが、その瞬間、オルコットさんの口が上がった気がした。

「かかりましたわ」

その言葉とともに放たれたのはビットではなくてミサイル。接近していた一夏にはかわす余裕もなく、黒煙に包まれた。

「一夏っ……！」

隣で見ていた篠ノ之さんは心配そうに声をあげた。でも織斑先生はそれとは反対に鼻を鳴らしていた。

「ふん、機体に救われたな、馬鹿者め」

煙が晴れると、そこには先ほどまで纏っていたISの形が変わっている一夏がいた。百式の名にふさわしく、より白い装甲に。そして手にしたブレードも形を変えていた。日本刀のような 雪片式型へと。

「俺は世界で最高の姉さんを持ったよ。とりあえず今は千冬姉の名前を守るさ」

「貴方はさっきから何を？」

オルコットさんの疑問も構わずに、加速する一夏。そしてその剣が振り降ろされるとき、ブザーは鳴った。

『勝者、セシリア・オルコット』

「「「え?」「」」

誰もが思った、どうしてこうなった、と。もちろん、俺も。どう見ても一夏が攻撃を当てようとしたところで終わった。オルコットさんがその隙に攻撃したわけでもなさそうだし。

「さて、次は火野とオルコットの試合だ。オルコットの休憩と補給が完了次第始める」

一夏の決着の理由は後で聞こう。今は前を見ていなければ。

「火野、準備はいいか」

「大丈夫です」

今度は俺が出撃する番だ。

「一夏。仇はとるよ」

「頼んだぜ、セシリアに一泡ふかせてやるっぜ」

さて、行きますか。一夏に頷いて俺は出撃した。

「今度こそ、圧倒的な差で勝ってみせますわ」

一夏との決着のつき方に納得がいていないのか、オルコットさんは俺を睨んできた。

『それでは試合を始めろ』

試合開始の合図とともにオーズカリバーを展開し、構える。下手に突っ込むのは危険だと思ったからだ。

「貴方も近接用の武器しかないですの。わたくしを馬鹿にしていますの」

「そうは言われても!」

同時に剣を振り、斬撃を飛ばす。これはシールドエネルギーを多少消費するが、ないよりはマシだから。

「なっ!」

そんな攻撃が来るとは思わなかったのか、驚いた声をあげていたがよけられた。

「まあ、いいですね。わたくしが勝ちますので」

そう言ってビットを展開するオルコットさん。俺にも一夏と同じようにじわじわとダメージを与えていく。頭でこうしなきゃ、とかはわかるのに、思うようにかわせない。直撃はもらってないけど。

「くっ！ 先程の方よりはやれる様ですわね」

上手く隙をつけて何回かは攻撃できたが、こちらが不利なのは変わらなかった。やっぱり差は射程と経験だなあ。こっちはISを動かして2週間くらい。でも、オルコットさんはその何十倍もあるはずだ。

どうやらオルコットさんはビットを制御しながらライフルを撃つことはできないようだ、一夏のときより嫌な場所を狙ってくる。俺が動く場所を読んで、そこに一撃というスタンスを取っている。自分の欠点を一夏の戦いで直そうと思ったんだらう。俺にとっては困ることだけだ。

「これで墜ちなさい」

ビットに囲まれて逃げ場を失った。しまった！！ そう思ったころには遅く、俺はミサイルの餌食となってしまった。負けたくないなあ。煙に包まれながら、俺はそう思った。

単一仕様能力 オースキャン発動

これは何だ？ そう思っている俺の頭に流れ込んでくる使い方の成程、だからコイツもオーズなのか。迷わずに3枚のメダルを取出し、スキャンする。

『タカ！ トラ！ バッタ！ タ・ト・バ タトバ タ・ト・バ！』

「なんですの今の歌は……ッ！！」

「歌は気にしないで」

赤いヘッドギアにトラのような爪を装備したアーム。そして緑色の脚。オーズタバコンボをISにしたようなものを俺はまもっていた。

「何かパワーが体の中に溜まってくる」

使い慣れたものだからか、今なら勝てる気がしてきた。さて、反撃開始だ。

「くっ！！ 貴方が何をしようとわたくしは勝たなければいけないですよ！」

やっぱりビットは厄介だな。だったら。

『タカ！ カマキリ！ チーター！』

「はあ！！！」

チーターのスピードを生かし、ビットに近づく。次はカマキリの腕についたカマキリソードでビットを切る。やっぱりカマキリは使いやすいなあ。

縦横無尽に飛び、ビットを切り裂いていく。当たりそうなレーザーは弾きながら。

そのまま全てのビットを壊した俺はミサイルを警戒しながら、タカキリターで攻めていた。すれ違いざまに一閃。反転して連続キック。

「くっ！ 『インターセプター』！！」

ショートブレードを展開したオルコットさん。接近戦には慣れていないんだろう。こっちのカマキリでの連撃にはついてこれないようだ。

「そろそろ決めるか」

『タカ！ トラ！ バッタ！ タ・ト・バ タトバ タ・ト・バ！』

決着をつけるチャンスを見つけた俺はもう1度、タトバコンボになり、メダルをスキャンする。

『スキヤニングチャージ！！』

「はああああああああ、セイヤーー」

赤、黄、緑の輪を通りぬけて放つキック、タトバキックはオルコットさんに直撃してシールドエネルギーをゼロにした。初めてタトバキックが成功した気が……

『勝者、火野英治』

よし、勝てた……って、このままじゃ俺がクラス代表？ それは嫌だな。よし、敗者に権利はないってことで一夏にやってもらおうかな。

『火野、勝利の余韻に浸っているのはいいが、聞きたいことがある。』

戻ってきたら話を聞かせてもらっぞ』

有無を言わさないような口調の織斑先生。え〜と、俺何かしたかな？ う〜ん、何だろう？

R e g r e t n o t h i n g T i g h t e n U p (後書き)

次回はクラス代表決定戦の後日談 + α なので、明日に投降したいと思っています。そろそろ変身させたいなあ。

オリキャラ・オリIS設定？（前書き）

軽いネタバレを含むので、それが嫌な人は見ないことをオススメします。あと、先に4話を見ておくことも推奨します。

オリキャラ・オリIS設定？

キャラ設定

・火野英治

主人公で16歳の少年（今年で17のため、実は一夏達より1つ上）。

海外旅行した先で、家族を失う。その後、旅人である伊藤明郎に拾われ、共に世界をまわる。明郎から勉強をそれなりに教えて貰ったが、中学は行っていない↑オイ！

1年前に帰国、その後オーズとして戦うことに。火野映司とは違い、自分の欲望を持ち、それを制御した。紫のメダルも取り込んでおらず、無理矢理従えたが、全く影響がないわけでもない。性格としては火野映司より多少クールというかドライな感じ。

IS設定

・ライドオーズ

英治がこの世界で活動しやすいように与えられたIS。コアは紅渡達と関わりがある異世界の篠ノ之束が作ったコアが使用されている。基本装備はメダジャリバー似の剣『オーズカリバー』だけ。

<オーズカリバー>

メダジャリバー似の剣。能力としてはシールドエネルギー消費で斬撃を飛ばせること。時空は切れない。

『ディアクティブモード』

メダルをスキャンしていない状態で、グレーの装甲をしている。モチーフとしては「ガンダムSEED」等のガンダムのディアクティブモード。スペックはISの第2世代くらい。

『スキヤニングモード』

単一使用能力「オースキャン」発動時にメダルをスキャンすることによってそれに対応した力を得る。タカならリーダーの強化、カマキリならカマキリソードの装備などなど。単一使用能力自体はそれほど凄いものではないが、コンボを成立させると恐ろしい程のスベツクを出すことが可能。

<タトバコンボ>

タカ、トラ、バッタのスキャンにより展開される。この姿が一番、オーズカリバーの性能を引き出せる（斬撃を飛ばすのの燃費がいい）。スベツクとしては第3世代ぐらい。必殺技は3色の輪をくぐりながら放つタトバキック。余談だが、オーズとして戦っていた時、英治はグリードはおるかヤミーにすら当てることはできなかった。

メダル設定

・タカ…上述の通り、視力に関する能力が上がる。元々ハイパーセンサーを積むISのため、能力を本気で使うと……。

・カマキリ…カマキリソードの装備。

・トラ…トラクローの装備。テレビ本編と違って優遇されるのだろうか。

・ゴリラ…ゴリバゴーンを使えるようになるパワー系のアーム。正直、スピードバトルのISバトルでは使いにくいところが……。

・バッタ…跳躍力、キック力を上げる。普段飛んでるため、跳躍力は意味あるのだろうか。

・チーター…いわゆる加速装置。飛んでるのにどうしてチーターで速くなるのか、と野暮なことは聞いてはいけない。

オリキャラ・オリIS設定？（後書き）

？ってやったけど？とか？は作るのだろうか、俺？

尋問とクラス代表とミルク缶（前書き）

C o u n t t h e m e d a l s

オーズが使えるメダルは……

タカ

カマキリ

バッタ

トラ

チーター

ゴリラ

尋問とクラス代表とミルク缶

「さて、火野。お前に聞きたいのはお前のISの色が変わったときに使ったメダルのようなものだ。あれは一体何だ？」

試合後、織斑先生に呼び出された俺は、コアメダルについて聞かれていた。いくら異世界から来た、と言ってもなあ。変身して怪人と戦っていましたって言っても、信じてもらえないだろうし。何かいい言い訳はないかな。

『この世界にも怪人はいます』

不意に思い出した紅さんの言葉。あの人がそう言ってたことが本当なら……

「織斑先生。俺がこのメダルを使って怪人と戦っていた、と言ったら信じますか」

「怪人だと。どうやらお前がいた世界にも怪人がいるようだな。で、そのメダルがどうした？」

「信じてくれるんですか？」

「目を見ればわかるさ。それに火野は嘘をつきたい訳ではないのだろっ」

信じてもらえると確信した俺はオーズについて話した。コアメダルのこと、コンボのこと、何故かライドオーズでもメダルが使える

ということ。そして手元にあるオーズドライバーも見せた。

「ふむ、どうやらこの世界にいる怪人とは違うようだな。ここにいる怪人はガイメモリと呼ばれる物を使って人間が変化するドーパントだ。風都という街によく出回るものだ」

「火野君が仮面ライダーだったなんて、私、思いもしませんでしたよ。そういえば風都って街にも仮面ライダーがいますよね」

「ああ、そうだな」

山田先生の問いかけに織斑先生は何かを懐かしむようだった。その風都の仮面ライダーと関わりがあったのかな？ 俺もその仮面ライダーに会ってみたいなあ。

「あ。織斑先生。ちょっと相談が……」

聞きたいことは2つ。1つはその風都の仮面ライダー。そしてもう1つは……

「では、1年1組代表は織斑一夏君に決定です。あ、1繋がりでない感じですね」

翌日のHR。山田先生が告げた結果に、ある1人を除いてクラスは盛り上がっていた。結局、一夏になったんだ。俺は降りただけ

ど、まさかオルコットさんまで降りるとは思わなかったな。

「先生、質問があります」

ある1人こと、織斑一夏は納得のいかない表情だった。勝ったのは俺で、その次はオルコットさん。最下位であった自分になるなんて、夢にも思わなかっただろうなあ。

「俺は最下位であつたのに、何でクラス代表になつてるんでしょうか？」

「それは……」

「それはわたくしが辞退したからですわ！」

音を立てて立ち上がったオルコットさんは今までとは違う目で一夏を見ていた。きつと見直したんだろうな。その後も理由を喋っていくオルコットさん。大人げなく怒ったことを反省しているようだけど、プライドが高いのは変わってないみたい。「わたくしが勝つのは当然のこと」って。前よりは憎めない感じだけだね。

「それで“一夏さん”にクラス代表を譲ることにしましたわ」

あ、一夏のことを名前で呼んだ。やっぱり一夏に対しての印象がプラスの方向に変わったみたい。まあ、学校生活は楽しい方がいいから、仲良くなるのはいいことだね。

周りの女子は「セシリアわかってるね〜」とか「情報が売れる」って情報は駄目でしょ。ISが使える男子が珍しくて担ぎあげたい気持ちはわからない訳ではないけど。

そんな周りが浮かれている中、一夏は浮かない顔だった。

「セシリアが降りた理由はわかったんですけど、英治が降りた理由がわかりません」

あらら、結局俺が降りた理由を聞いてくるんだ。

「それは、俺のISはISではない物も使うからISで戦うクラス代表にはふさわしくないとって辞退したんだ。一応、このメダルがその力ね」

3枚のコアメダルを見せる。多くの人は頭に「？」を浮かべているけど、いいか。一夏もそれは何だよって顔してる。

「……俺はメダルのせいで代表になるのかよ」

クラスの皆は男子が代表をやれば良かったみたいで、メダルにも大した興味を示さずに、一夏についての話に戻った。本人はなんかブツブツ言ってるけど。

バシン！！

「今はHR中だ。ブツブツ言ってるで周りの話を聞け」

「痛！！ 何すんだよ千冬n」

バシン！！

再び叩かれる一夏。かわいそうに思えてきた。

「織斑先生だ。何度言ったらわかるのか」

「す、すみませんでした。織斑先生」

「そ、それでですね」

そわそわした様子のオルコットさん。何か大事な発表でもあるのかな。

「わたくしのように優秀でエレガント、華麗にしてパーフェクトな人間がISの操縦を教えてあげますわ。そうすれば……」

バン！ 机を叩いて立ち上がった篠ノ之さん。何か異様に殺気だっているけど、どうかしたのかな？

「あいにくだが、一夏の教官は足りている。“私が”直接頼まれたからな」

「私が」をやけに強調した篠ノ之さんはオルコットさんを睨んでいた。2人って仲が悪かったみたいじゃなかったし、どうしたんだろ。

「あら、貴方はランクCの篠ノ之さん。Aランクのわたくしに何か？」

2人の間に散る火花。よくわからないけど、この対立の中心にいるのは一夏みたいだから俺は大丈夫かな。

バシン！ バシン！

「座れ、馬鹿共」

オルコットさんと篠ノ之さん頭を叩いた千冬さんは続けた。

「お前達のランクなどゴミだ。私からしたらどれもひよっこだ。その段階で優劣をつけようとするな。それにだオルコット。完璧な人間などどこにもいない。簡単にパーフェクトなど使うな」

簡単にパーフェクトなど使うな、か。完璧な人間はどこにもいない。当たり前のことなのに織斑先生が言ったことは重かったっていうか、心に残った。まるで本人がそのことを身を持って知ったかのように。

「代表候補生でも一から勉強してもらうと前に言っただろう。くだらん揉め事は十代の特権だが、あいにく今は私の管轄時間だ。自重しろ」

バシン！

不意に一夏が頭を叩かれた。特に何もやってないはずだけど。

「今、失礼なことを考えただろう」

「そんなことは全くありません」

「ほう」

バシンバシン！！

「すみませんでした」

「わかればいい」

ああ、姉弟って凄いんだな。心を読むなんて。でも、ちょっと横暴じゃないかな。そんなことを考えたら絶対叩かれるだろうから表情にださないように気をつけないと。

「クラス代表は織斑一夏。依存はないな」

『はい』

クラスの意味は再度1つとなった。けど、やっぱり一夏には嬉しくない結果だろう。え〜と、頑張つて。俺にはそれしか言えないんだ。

放課後、一夏が篠ノ之さんとオルコットさんに連れられてどっかに行っちゃったから暇になった俺は部屋に戻ってきていた。

「あー、昼(?)寝でもしようかな」

ボタンッ!!

ベットにダイブしたはずの俺はアスファルトにダイブしていた。

「イタタタ。一体今度は何？」

「タイミングが悪かったようですね」

気が付けば夜の公園みたいな場所にいて、紅さんがいた。

「えっと、今度はなんです？ コアメダルを狙うやつが現れたんですか？」

「いえ、貴方に届ける物があつたので」

紅さんが出したのはミルク缶と細長い箱。缶には大量のセルメダル、箱にはメダジャリバーが入っていた。

「これはどうしたんですか？」

「貴方が戦うのに必要となるものなので渡します。あと、ライドベンドーもIS学園の敷地内に置いておきますので」

ライドベンドーがあるのは便利だけど、IS学園の中に勝手に置いておいていいのかな？

「えっと、ありがとうございます」

「いえ、僕達も色々あってこれ以上の直接接触は難しいようです。その内貴方の味方となる人物を送りますので世界をお願いしますね」

それを最後に俺は元の部屋に戻ってきた。オーズの力はすぐに必要になる。そんな気が俺にはしているんだ。

尋問とクラス代表とミルク缶（後書き）

次回、変身！！

ところでアンケートを取りたいのですがバースをどうしましょうか？

？英治がいた世界から来る。この場合、伊達さんのようなキャラか後藤さんのような性格のどちらがいいかも

？バースのツールだけだしてISキャラが変身

？全く別のところからバースが来る。例、オーズ本編から伊達さんが来る、とか。

？バースは出なくていい。

訓練と敵襲と変身（前書き）

C o u n t t h e m e d a l s
オーズが使えるメダルは……

タカ

カマキリ

バッタ

トラ

チーター

ゴリラ

訓練と敵襲と変身

4月も下旬となった今、俺達1年1組は織斑先生の指導のもと、ISの訓練をしていた。それにしてもいい天気だなあ。

現在は飛行訓練で、実践するのは俺、一夏、オルコットさん改めセシリアの専用機持ち組。クラス代表決定戦から俺のこともを見直したみたいで名前呼び合う仲くらいには慣れた。誰とでも仲良くやれる方がいいしね。あ、でもオルコットさんは一夏が好きなのか。素振りからはそんな気がするんだけど、恋愛は苦手だからよくわからないし。

「では、これよりISの基本的操縦をしてもらおう。織斑、火野、オルコット。試しに飛んでみせる」

織斑先生に言われてISを展開する。特訓の成果だろうか、セシリア程とまではいかないけど、中々早く展開できるようになった。隣を見ると、一夏もワントンポ遅れて展開できていた。一夏の篠ノ之さんやセシリアとの特訓の成果かな。

メダル無しのライドオーズ、ディアクティブモードを展開した俺はメダルもスキャンするかどうか考えていた。ISだけの訓練なら必要ないのだが、こいつはメダルをスキャンしてこそ完成するものだからなあ。

「よし、飛べ」

織斑先生の合図で飛び上がるセシリア。少し遅れて、遅いスピードで上昇する一夏。気になったこともあるしタトバになるか。

「タカ！　トラ！　バッタ！　タ・ト・バ　タトバ　タ・ト・バ！
！」

クラスの皆は「変な歌」とか聞こえてくるけど、もう慣れたしね。さてと、PICを使わずに跳んでみるか。

脚部に力を貯める。さすがに脚がバッタのようにはならないけど、力がみなぎるのはわかる。そして俺はそのまま大地を蹴った。

「「「え？」「」」

みるみるうちに一夏、セシリアまでも追い越し、IS学園も小さく見える高さに。この高さなら人がゴミのように見えるなあ……なんだろうな、この落ちていく感覚は……あ、ただジャンプしただけだったからか。

墜落する気は全くないので、PICを起動させその場で静止。気付かなかったら大変なことになってたろうな。ISには絶対防御があるけど、この高さから落下したら無事とは思えないし。

一夏とセシリアが話している所まで、下降する。2人ともライドオーズの跳躍力に驚いているけど、びっくりしたのは俺も同じだから。

「いつも思っただけどさ、英治のISって動きやそうだな」

「確かにそうですね。英治さんのISは大抵のISよりも体にフィットしている感じですし、非固定浮遊部位もないですし、おまけに謎のメダルで形を変えますし……本当に謎のISですわ」

「いやー、謎って言われても俺もコイツについてはよくわからないし」

本当はこれが高んなのかは分かっているけど不用意に人に教えるわけにはいかないからね。それにしてもさっきから嫌な予感がする。何だろう？　そう思うけど集中してなければ織斑先生に叩かれるだろうからあんまり気にしない方がいいかな。

「そっぴや、英治。英治は飛ぶイメージはどうしてるんだ？　セシリアとも話したんだけど、どうもイメージがつかめなくて」

「俺のイメージは、なんていうかなあ、こっ、俺に翼ができたイメージかな」

「いや、よくわからないんだけど、それ」

「うん、そっだよね。俺は別な方法で飛んだことがあるからイメージしやすいだけだからなあ。」

「でも一夏さんイメージは所詮イメージ。自分がやりやすい方法を見つけた方がいいですわ」

「そっ言っても空を飛ぶ感覚自体があやふやなんだよな。何で浮いているんだ、コレ？」

「気になるのは分かるけどあまり気にしない方がいいよ。正直俺も何となく理解している感じだしね。理論が気になるんだったらセシリアに聞いた方がいいよ」

「そっですわね。反重力力翼と流動波干渉の話になりますもの。それでよければ説明しますわ」

「わかった。説明はいい」

うん、俺も聞きたいとは思わないから。聞いてもチンプンカンプンだろうから。

「ふふっ、残念ですわ」

本当にセシリアは変わったなあ。彼女の屈託のない笑みを見てそう思った。先日までのいざこざが嘘だと思っほに。

そういえばあの試合以降、俺と一夏、セシリアは篠ノ之さんと一緒にISの練習をしている。大抵は一夏が教えてもらっている形だけだね。

「一夏っ！　いつまでそんなところにいる！　早く降りてこい！」

いきなり通信回線から響く声。声の主を見ると、篠ノ之さんが山田先生からインカムを奪っていた。オタオタする山田先生。しっかりしてください。

俺が山田先生に同情している間、隣ではISのハイパーセンサーについて話していた。視力とか聴力が優れるのは変身ではよくあることなのであんまり俺は驚くことはないけど。それにしてもセシリアの説明は役立つなあ。言っちゃ悪いんだろうけど、篠ノ之さんの指導は一夏曰く全くわからないものらしいし。確か擬音だらけなんだっけ。

「織斑、オルコット、火野。急降下と完全停止をやってみせる。目標は地表から十センチだ」

「了解です。では一夏さん、英治さん、お先に」

セシリアはすぐに行動を起こし難なくクリアしていた。次は、と。

「英治、どっちから行く？」

「一夏が先でいいよ」

一夏は軽く返事をし、地面に向かって加速していった……え、加速？ 確かに急降下も課題だけどそれは加速しすぎじゃ。

ズドオオオン！！

やっぱり。一夏は墜落し、クレーターを作っていた。俺の目に映るのは2つのクレーター。あれ、2つ？

「メダルウーーーーー」

煙が晴れるとそこにいたのは前に戦ったことのあるクワガタのヤミーそっくりの怪人だった。

それを見た俺はとにかくクワガタに向かって加速していた。ISがあれば戦えるのかどうかしらないけど、俺が戦わなければいけない相手だから。きっとコイツが嫌な予感の正体だろう。

「なんだよ、アレは」

一夏は突然現れた怪人を見て呟いた。彼が小さい頃にお世話になった探偵が戦ったのとは違うのを直感的に感じていた。

「来い、白式」

悲鳴をあげ、パニックになるクラスメイトを見た彼が出した結論は力がある自分が皆を守ることだった。自身のISを纏い、剣を構える。今にも飛び出しそうな彼の耳には届く言葉があった。

「馬鹿者。お前に何ができる。大人しく全員下がっている」

「じゃあ千冬姉はどうするんだよ。相手はドーパントとは違う気がするけど怪人なんだ！！」

「安心しろ、アレの相手をするのは私でも山田先生でもない」

瞬間、3色のISが怪人を蹴り飛ばしていた。

クワガタの怪人、ヤミーもどき？ コアメダルを使っているからグリードもどきか。とりあえずIG（Imitation Greed）と呼ぶことにしよう。

それを蹴り飛ばして俺はISを解除した。

「英治！！ 何やってるんだよ！！ お前も逃げろ！！」

「そうですね。ISをを解除するなんて無謀すぎますわ！！」

一夏やセシリアの他にもクラスの皆から心配や説得の声が聞こえる。こう思ってもらえるほど、馴染めていたんだな。だからこそ皆は俺が守る。

「大丈夫だから。まあ、見ていてよ」

オーズドライバーを装着する。まずは赤いメダルと緑のを入れる。最後に黄色のいれ、右腰のオースキヤナーでスキヤンする。そしてスキヤンとともにあの言葉を叫ぶ。

「変身！！」

「タカ！ トラ！ バッタ！ タ・ト・バ タトバ タ・ト・バ！
！！」

歌が流れている最中、俺の周りは色とりどりのメダルが回っていて、俺の前には赤、黄色、緑のメダルが浮かぶ。

そして俺はもう1つの姿になる。欲望の王とも言われる存在、オーズに。

皆が息を呑むのが聞こえる。誰もこうなるとは思っていないはずだから当然かな。

「英治、お前、仮面ライダーだったのか」

「そうなるね。オーズ、仮面ライダーオーズだ」

「……オーズ（もしかして千冬姉は英治が仮面ライダーだって知っていたのか）」

「さてと…皆は俺が守る！」

構えをとった俺はクワガタIGへと駆け出した。相手も俺に対して走ってくる。

突き出された拳をよけて、ボディブロー。そのままトラクローを展開し、2、3回切る。飛び散るメダル。

「こいつもセルメダルを落とすんだ。でもどうやって作るんだ？ グリッドだって復活したにはセルメダルは必要なのに……おっと」

考えているうちに敵は攻撃をしてきた。クワガタのアゴのような武器を振り回してくる……って、危ない危ない。バッタの跳躍力をいかし、後ろに跳ぶ。

「メダル、メダルヲヨコセ！！」

セルかコアかわからないけど俺のメダルを狙ってくる相手。どっちにしろ取り込んで強くなるつもりなんだろうな。させないけど。

「ハアア！！」

今度は脚に力をこめ、跳び上がる。バタ足のように蹴るたびにこぼれ落ちるセルメダル。ヤミーやグリッドと比べると少ない量だけだ。

「ガアアアアアア！！」

怒りに身を任せるかのように敵の攻撃が激しくなる。腕を掴まれて、武器で切られる。結構痛い。

「くっ…うわっ」

火花をあげながら後ろに転がる俺。リーチが問題ならこの前貰ったこれで。そう思った俺はメダジャリバーを構えた。周りから「どこから出したんだ、それ？」って聞こえたけど気にしないでおう。

「ハアアアア」

反撃の隙を与えないようにメダジャリバーを振るう。相手がダメージをくらっている証拠か、そのたびにセルメダルが落ちていく。

「そろそろ決めるよ」

敵がダウンしたのを確認し、セルメダルを3枚メダジャリバーに入れる。

『トリプル スキャニングチャージ!!』

「ハアアアアア… セイヤー…」

「おいおい、何だよアレ？」

「なんですの。あの技は!!」

「信じられん、空間を切るとは……」

俺が剣を振った方に空間はズレていた。そして元に戻る。皆が驚くのもうなずけるものだしね。

「グアアアアア」

空間が元に戻ると爆散するIG。セルメダル十数枚とクワガタのコアメダルが落ちていた。

これで緑のコンボができるのか……使う機会は無い方がいいけど、でも、予感はある。力を使わなきゃいけない日が来るような気が。

訓練と敵襲と変身（後書き）

実家に帰省したため、パソコンが使えないorz
ストックが多少、携帯で作製しますが、遅くなる可能性が……
感想、意見、誤字脱字報告等、お待ちしております。

逃走と整備室とインタビュー（前書き）

C o u n t t h e m e d a l s

オーズが使えるメダルは……

タカ

クワガタ

カマキリ

バッタ

トラ

チーター

ゴリラ

逃走と整備室とインタビュー

女子の情報網は恐ろしい。たったの数時間たっただけで俺がオースであることは学園中に広まっていた。繰り返される質問の応酬から逃げ出した俺は安心できる場所を探していた。どこに行っても女子がいるから、そのたびに逃げる。コンボを使ったときより疲れたよ。

「疲れた〜。ホントにあの勢いだけはついていけないや……ッ!!」

「こつちに火野君が行ったって情報があったのに」

「おかしいね。どこに行ったのかな？」

「じゃああつちに行こうよ。それにしても火野君、人間離れた逃げ足だよね」

女子の声、しかも明らかに俺を探しているのが聞こえてきたため、物陰に隠れる。先程の集団はいなくなっただけ、次の集団が近づいてくるのが聞こえた。見つかつて質問攻めが嫌だったから近くの部屋に逃げ込むことにした。人の気配はしないようだしね。

女子達が近づく前に俺はドアを開けてその部屋に飛び込んだ。ここが更衣室とかじゃないことを願って。

「ここは……整備室かな？」

目の前に広がる光景は、パソコン数台にISのパーツや武器だらうものがあつた。いかにも整備室って感じの場所だった。

「ふう。しばらくはここに隠れているかな」

「だ、誰かいるの？」

声がした方を向くと水色の髪にメガネをかけた子がいた。

「ゴメン！ 追われているからここに匿ってくれないかな」

「え、……別にいいけど……」

「ありがとう」

隠れる場所が見つかったという安堵から座り込む。はあ、疲れた。

「ね、ねえ……あなたが仮面ライダー……？」

「あ、うん。そうだけど」

俺がオーズであることにこの子も興味があるようだけど、匿ってくれるお礼にと、周りの皆のようなしっこさが無かったから聞かれたことに答えることにした。

饒舌ではない彼女と話している途中、俺は大事なことに気がついた。

「そういえばさ、君、名前は何て言うの？」

そう、文だと大した長さではないがって何だこの電波？ まあ、とにかく名前を聞いていなかったんだ。いつまでも「君」とか「あなた」じゃ失礼だしね。

「更識簪」

「更識さんね。今更だけど俺は火野英治。よろしくね」

「名字で、呼ばないで。その…好きじゃないから」

「え〜と、簪でいいかな」

静かに首を縦に振る簪。どうやら本人の許可は得たようだ。

「簪はここで何してたの？」

「私のIS、完成してないから……」

「そうなんだ。って言っても俺はISが作れるほどわかっていないけどね」

私のISってことは専用機持ちってことだね。そういえば「更識」ってこの学園のどこかで聞いた気がするんだよね。

「まあ、何もできないかもしれないけど手伝えることがあったら言っつてよ」

「別に、いい」

「そんなことは言わないで、ね。何かあったら手伝うからさ」

「どうしてそういうことをする気になるの……？」

どうして、か。うゝん。

「人は助け合いだからね。「人」って字はさ、支え合って出来ているから。それに手が届くのに手を伸ばさなかったら、後悔する。それは嫌だし」

「そう……なんだ……ロー……たい」

「何か言った？ 最後の方、聞こえなかったけど」

「べ、別に何でも、ない……」

そうか。本人が違うって言うてるから俺は追求しないことにしよう。ふと外を見ると、日が沈み始めていた。そろそろ帰ることにしますか。

「俺はそろそろ行くよ。匿ってくれてアリガトね。また来てもいいかな？」

コク、と簪が頷いたのを見てからこの部屋を出た。この部屋は第二整備室か。

英治が帰ったあと、整備室に残っていた簪は彼のことを考えていた。自分が憧れるヒーロー。元々、都市伝説である仮面ライダーで

あったことから彼に多少は興味があったのだが、実際に話してみると、彼女が好きなヒーローのようだった。

英治には聞こえなかった「そう……なんだ……ロー……たい」。これは「そう……なんだ……ヒーローみたい」と言っていた。

（初対面なのに結構話した……）

ここでは語る理由ではないが、彼女の家系の問題で簪は心を閉ざしていった。そんな中、自分に笑顔を向けながら手をさし伸ばしてくれた英治は彼女にとって新鮮な存在だった。

（火野……英治……）

よくわからない気持ちだが、彼女は英治ともっと話してみたいと感じた。

「……いけない。早く完成させなきゃ」

気持ちを切り替えて彼女はディスプレイと向き合った。

「ふうん。ここがそうなんだ……」

英治が簪と別れた頃、IS学園のゲートにはボストンバックを持った少女がいた。風になびく彼女のツインテール。

「総合事務受付ってどこにあんのよ」

案内が書いてある紙をくしゃくしゃにしてポケットに突っ込む。目的地がわからない彼女のイライラは少しずつたまっていった。

ISで飛んで探すか、とも考えたが自分が属する国、中国の政府高官の情けない顔を思い出した。それと同時にその高官が言っていた問題を起こさないでくれってことも。

（ふっふーん。あたしは重要人物だからねー。自重しないとねー）

そんな彼女はとある目的のためにこの学園に来た。元々、彼女はIS学園に興味は無かった。だが、ある日見た二ユースは彼女の興味をIS学園に向けた。

（そつえば、アイツ元気かな）

とある少年を思い浮かべる。彼こそが彼女をIS学園に入学させる原因であった。

「だから、そのイメージがわからないんだよ」

不意に聞こえた懐かしい声。その声の主、織斑一夏こそがその理由の張本人である。

少女はすぐに駆け寄ろうとする。だが、一夏の隣には見知らぬ女子がいた。しかも一夏と親しそうである。

（誰、あの女？）

冷たい感情を浮かべた彼女はそのままその場を去った。その後す

ぐに受付は見つかった。だが、彼女の気持ちは晴れることがなかった。

「――説明は以上です。IS学園によつこそ、ファン・リンイン 鳳鈴音さん」

彼女は怒りの感情を持ちながら晴れてIS学園の生徒となった。

「待つてなさいよ、一夏」

さらに場所を変えること、ここは例の夜の公園。マフラーを巻いた青年、紅渡の前にスーツを着た長身の男が現れた。

「渡、調べた結果だが、やはりあの世界は変化を始めている。新たにいくつかの仮面ライダーがあの世界に誕生する。それに門矢士とは違うディケイドもあの世界を訪れるだろう」

男、剣崎一真は自分が調べたことを伝える。

「そうですか。あの世界が消滅することは？」

「それはない。ディケイドはもう破壊者としての役目を終えている。それは他のディケイドも同じだ。ただ、ライダーが新たに誕生した場合の混沌は確実だな」

「それは彼に任せましょう。ところで生まれるであろうライダーは？」

「それは……だ」

「それならオーズでも充分戦えますね」

「ああ。俺はまだやることがあるから行くぞ」

「ええ。お願いします」

剣崎はオーロラをこえ、どこかに去っていった。それを見送る渡。

「事態は予想以上に厄介なことになっているようです。オーズへの助っ人は誰がいいのでしょうか」

「ふう。帰ってくるのは遅くなったな」

簪と別れた後、女子に遭遇。獲物を見つけたような顔してたから逃げたのはいいんだけど、寮とは逆の方向へ。

その後はどこかの蛇のようにダンボールに隠れたりしながら寮に向かった。夕方に出たはずなのに寮に着いたころには既に夜であった。もう、ヤダ。

さすがにこの時間にはもう俺を狙ってくる人はいないようで、さ

つさと部屋に戻ることにした。トボトボと自室に戻る途中、食堂の近くを通ったら、

「あー！！ 火野君発見！！」

クラスメイトに見つかった。とゆうかクラスメイトがほとんどいて、「織斑一夏クラス代表就任パーティー」なるものをやっていた。パーティーが嫌いな訳じゃないけど、俺のライフはボドボドだから参加はやめておくよ。しかし、世の中は無情である。すぐさま捕獲されて会場に拉致された俺は乾いた笑みさえも浮かべる気力はないんだ。

「英治、今までどこにいたんだよ…… って大丈夫か、おい、しつかりしろ」

「一夏、何を大げさなことを言ってるのだ…… 火野、大丈夫か？」

「あら、英治さんがどうかしたのですか…… って大丈夫ですか？」

3人とも大丈夫じゃないから。この疲労感に比べたら、一度に全コンボやれって方が楽な気がする……よ……

「はいはい、新聞部です。もう1つの話題である仮面ライダーこと火野英治君にもインタビューを…… ってこれじゃ無理そうね。仕方ない捏造するからやめとくか」

捏造はしないでください。ああ、声を出す気力すらない。

「だから俺の分も含めて捏造しないでくださいー！！」

「じゃあ織斑君。なにか皆に受けるコメントを」

そんな会話をよそに俺は眠りにおちた。ああ、明日辺りに織斑先生に助けを求めよう。先生の力ならこの鬼ごっこもなくなるはずだから…… z z z

逃走と整備室とインタビュー（後書き）

早くも簪登場。原作でヒーローとか言ってた彼女なら絡ませやすいかなと思って。でも彼女のISを早く完成させるかどうかは考え中。

前回のバースのアンケートが全くないにも関わらず、次のアンケート（笑）。

クウガ、ディケイドで出演してほしいライダーを募集します。サブでも悪役でもOK。できれば変身者の立ち位置も。

それでは感想、意見等お待ちしております。

宣戦布告とライメンとライオン（前書き）

C o u n t t h e m e d a l s

オースが使えるメダルは……

タカ

クワガタ

カマキリ

バッタ

トラ

チーター

ゴリラ

宣戦布告とラーメンとライオン

「火野君、おはよー。ねえねえ、転校生の噂聞いた？」

早めに教室に着いた俺は女子から話しかけられた。転校生？ どんな人が来るのかな。

「それってうちのクラスに来るの？」

「なんだか2組に来るんだって。で、その人は中国の代表候補生らしいの」

「へえ。そうなんだ。教えてくれてありがとね」

中国の代表候補生か。どんな人なのかな。

「あ、織斑君だ。織斑君にも教えてあげよう」と

そう言っただけでクラスメイトは一夏の方へ言った。

一夏達が話しているけど、俺は眠いから先生が来るまで寝てよう。それじゃ、おやす「その情報、古いよ」……ん、誰だ？ 声がした方にはツインテールの女の子がいた。

「2組も専用機持ちがクラス代表になったの。そう簡単には優勝できないから」

「鈴……？ お前、鈴か？」

「そうよ。中国代表候補生、鳳鈴音。今日は宣戦布告に来たってわ

け」

え〜と、一夏の知り合いかな。仲良さそうだし。あ、篠ノ之さんとセシリアが機嫌悪そうになった。うん、確実にあの2人は一夏が好きなんだ。恋愛が苦手な俺でもわかるんだから一夏も気づいているはず。

そう思っていたが、一夏がかなりの鈍感で、全く誰からの好意に気づかないと知るのは後のことだった。

「何格好付けてるんだ？　すげえ似合わないぞ」

鈴と呼ばれた女の子は腕を組み、片膝を立ててドアにもたれていた。確かに彼女の雰囲気からだと思合わない気がしなくてもないなあ。

「な！？　なんてこと言うのよ、アンタは！」

やっぱり今の喋り方が素みたいだ。こういう性格の人には確かにさっきのポーズは似合わないと気が……。

「おい」

「なによ！？」

後ろから声がしたので強気な態度で振り向く、え〜と、鳳さん。……ってその人にその反応は……。

バシンッ！！

聞きなれた音が響く、愛刀（？）『狩吊世鬼墓』を振り下ろした

我らが担任、織斑先生がいた。

「火野、今、変なことを考えただろ」

「……違います」

「2度目はないぞ」

「わかりました」

織斑先生は読心術を使えるから心を無に。

——ドクン——

今、何か違和感が……。ま、いいか。

この違和感がアレを引き起こすことになるとは誰も思わなかった。
ってモノローグを入れるとどうなるんだろう？

「よし、SHRを始める」

気が付けば鳳さんは自分の教室に戻ったみたいで、織斑先生が教卓に立っていた。

パシーン！！

本日何度目の音だろうか。叩けているのは俺でも一夏でもない

篠ノ之さんとセシリアである。篠ノ之さんは授業を聞いていなくて叩かれ、セシリアは独り言をブツブツ言って叩かれる。

織斑先生の授業でそんなことをしてるなんて自殺行為みたいなものだけど、どうしたんだろ？ 昨日は何も変わりがなかったから、原因は今日のはず。

となると鳳さんが原因かな？ 嫉妬？ 何か違うな？ このことも後で考えよ。

「「あなた（お前）のせいですわ（だ）！！」」

午前の授業が終わり、いきなり2人は一夏に告げた。それは理不尽だと思っただけ。

それは自分の好きな男が取られるって思っただけですよ。嫉妬みたいなものです」

へえ、そうなんだ。嫉妬ねえ。女心がわからないからとかどうか以前に、一夏のせいにするのは理不尽だと思うけど。

「英治、飯食いに行こうぜ」

「ああ、わかった」

一夏に誘われて食堂へ。今日は何食べようかな。

「待ってたわよ、一夏！」

食堂に着くなり鳳さんが現れて、そう言った。鳳さん、そこにいと皆の邪魔になるよ。

「鈴、通行の邪魔になってるぞ」

「な、いきなり何言うのよ!! それにアンタを待ってたのよ」

一夏も同じことを思ってたようで、指摘されると怒る鳳さん。ラーメンを持ちながら。

「それにラーメン伸びるぞ」

「ぐっ……」

なんだか一触即発の雰囲気。俺が止めないといけないみたい……

「まあまあ、2人とも落ち着いて」

「アンタは黙ってなさい……ってアンタが噂の火野英治？」

「一応聞くけど、噂って？」

「それはアンタが仮面ライダーだっていう」

「まあ、そうだけど……」

隠す理由も必要もなくなつたので素直に頷く。ああ、早くご飯にしたい。

「ふーん、そうなんだ」

このまま雑談を交わしてる訳にもいかないので、注文をとり、席に着く。

「一夏、そろそろどういう関係なのか説明して欲しいのだが」

「そうですね！ 一夏さん、まさかこの方と付き合ってたっしやるの！？」

一夏と鳳さんが話してる途中に、2人は無理矢理割って入った。俺も気になってたんだよね。

周りの皆も気になっていたのか頷いて、こちらに視線を向けてくる。正直に言つと居心地がよくない。

「べ、べべ、別にあたしは付き合ってるわけじゃ……」

「そうだぞ。なんでそんな話になるんだ。ただの幼馴染だよ」

あ、鳳さんが一夏を睨んでいる。というか、鳳さんとも幼馴染って言うてるけど、篠ノ之さんとは面識がないみたいだけど？

「幼馴染……？」

怪訝そうな声で答える篠ノ之さん。まるで幼馴染は自分だらって顔で。

一夏いわく、篠ノ之さんは小4までのファースト幼馴染で、鳳さんは小5から中2までのセカンド幼馴染。幼馴染ってファーストとかセカンドってつけるものだったっけ？

「初めまして。これからよろしくね」

「ああ。こちらこそ」

文だけ見ると友好的に見えるが、実際は声は相手を威圧するものだし、2人の間には火花が散っている。どう考えても初対面の人にする対応じゃないよね。

「ンンンッ！ わたくしを忘れてもらっては困りますわ。中国代表候補生、鳳鈴音さん？」

そうか、代表候補生同士なら知り合っている可能性も……。

「……誰？」

あれ？

「わ、わたくしをご存知ない。イギリス代表候補生、セシリア・オルコットを？」

「うん。あたし他の国とか興味ないし」

絶句して固まるセシリア。あ、顔が赤くなってきた。

話が進み、現在は誰が一夏にISの操縦を教えるかになっていた。「幼馴染」だの「同じクラス」だの言ってるけど、一夏のことを完璧に無視してる。なんか険悪な雰囲気になってきたから止めた方がいいよね。

「さ、3人ともいくら一夏がすくムグッ」

結果、口を抑えられました。呼吸が段々苦しくなってきた。あ、死んだじいちゃんが見える。

パシーン！

誰かが叩かれた音で目を覚ました。場所は食堂、時間はさっきからあまりたつてないみたいだ。目の前には正座の3人、篠ノ之さん、セシリア、鳳さん。そしてそれを叱る織斑先生。
そういえば、俺、あの3人に口をふさがれたせいで呼吸が苦しくなつて倒れたんだっけ。

「死ぬかと思つた」

「もうすぐ授業だ。遅れるなよ。ああ、火野は気分がすぐれなかったら保健室で休んでいていいぞ。どこぞの馬鹿共のせいだからな」

「「「う……」」」

まあ、俺は大丈夫だけど。

「大丈夫か、英治？ 全く篤達もやめろよな。息を止められてポツクリいきましたなんて笑えないからな」

一夏の説得には素直に応じる3人娘。一夏に言われなくてもやめてよ。

「さてと、教室に戻ろうか」

そろそろ昼休みが終わる時間だ。織斑先生に叩かれたくないから早めに戻らないと。3人娘も立ち上がろうとしたが、ふらつくセシリア。日本に住んでた2人とは違って正座に慣れていないからかな。

結局、セシリアは一夏に支えられて教室に戻ることができた。篠ノ之さんと鳳さんがずっと羨ましそうな顔だったけど。

あ、あと、鳳さんを鈴と呼ぶようになりました。

放課後、一夏達はアリーナに特訓に、翼は山田先生に呼ばれて職員室へ。結果、暇となった俺はさっさと寮に戻ることにした。いつまでも教室にいるとこの前みたいに質問攻めにあうからね。

ん、グランドの方から何か違和感がするな……言ってみるかな。

p r r r r r

「はい、火野です」

『火野か。今、グランドの方で怪人が出てきた。行ってくるか』

「わかりました」

電話を切る。偶然にもそこにいた生徒はいなくて、被害者は0らしい。暴れたす前に倒さなくちゃ。とりあえずIGの足止めとしてタカカンをつ開ける。

「俺が着くまでよろしくね」

タカカン達は頷いて（？）飛んでいった。さて、俺も急ぎますか。

現場に着くと、ライオンみたいなやつがタカカン達に翻弄されていた。じゃあ、俺も戦いますか。

オーズドライバーにいつものメダルを入れて、スキャン。

「変身!!」

『タカ! トラ! バッタ! タ・ト・バ タトバ タ・ト・バ!』

走りながら変身した俺はそのままライオンIGに飛びかかる。パUNCHがあたり、転がるIG、もちろんセルメダルを落としながら。

「オーズウ」

恨みがましく立ち上がったIGはクローを展開して、切りかかってくる。

「うわあ!」

予想外の攻撃に対応が遅れ、回避できずに転がる。イタタタ。だ

つたらこつちもリーチを、と。

『タカ！ カマキリ！ バッタ！』

ガキン！！

相手のクローを両腕のカマキリソードで抑え、相手の腹に思いっきり蹴り込む。相手がよろめいてるうちに右、左と、カマキリソードを振るう。

「ガアアアアア」

ピカツ！！

「くっ、目が……うわああああ」

相手がライオンのコアの力を持っていることを忘れていたため、ライオディアスのような光に目をやられる。そして、相手はお返しとばかりにクローで攻撃してくる。目がちゃんと見えない俺はかわすこともできずにマトモに直撃してしまう。

「う……がつ……くっ……」

転がってる俺に容赦なく蹴りこんでくるIG。そのまま、容赦なく俺を踏みけてきた。かなり痛い。

目が少しづつ慣れてきたから、目を開けると、IGは俺の首めがけてクローを振り下ろそうとしていた。やられてたまるか！！

「うおおおおおお」

脚に力をこめて、敵を蹴り飛ばす。バツタレッグは脚の中で一番のキック力を誇るため、直撃したIGはかなり吹っ飛んでいった。

「ふう、危なかった。じゃあ反撃させてもらおうよ」

『クワガタ！ カマキリ！ チーター！』

頭部をこの前手に入れたクワガタに変え、亜種コンボ、ガタキリターとなる。クワガタヘッドとはあるリスクと引き換えに電撃を放つことができる。ホントはあんまり使いたくないけど、ああだこうだ言ってる場合じゃないからね。

駆け出してくるIGに電撃を浴びせ、怯んだところをチーターの加速に乗せたカマキリソードで切る。

火花をあげ、よろめくIG。今がチャンスだ。

「これで決める」

『スキヤニングチャージ！！』

クワガタの電撃を放ちながら、チーターで加速、そしてカマキリで一閃。

「ガアアアアアア！！」

断末魔をあげ、爆散するIS。ライオンのコアメダルを回収した俺は変身を解いて一息つく。IGは何が目的なんだ？俺が持つてるコアメダル？

考えても答えは出そうにないな。でも、とにかく誰かが傷つく前には回収しなきゃ。

宣戦布告とラーメンとライオン（後書き）

アンケートや感想等お待ちしております。

次回は英治VS一夏の予定です。

ああ、簪を早く出してもISのストーリーに絡めるいい方法が思いつかないorz

奪い合いと禁句と特訓（前書き）

C o u n t t h e m e d a l s
オーズが使えるメダルは……

タカ
クワガタ
カマキリ
バッタ
ライオン
トラ
チーター
ゴリラ

奪い合いと禁句と特訓

5月。特に変わったこともなく、毎日を過ごしていた。授業を受けて、放課後にISの訓練をすることがあったり、と。ああ、そういえば、鈴と一夏の仲がよくなかったなあ。何があったんだろ？

で、来週クラス対抗戦を控えた今日から俺と翼も一夏の特訓につきあうことになった。というか1ヶ月あったのに一夏と訓練するのは初めてな気が……。べ、別に篠ノ之さんとかセシリアが怖かったからじゃないから。

そんなことはさてより、さっさとアリーナに行こうと、俺は思っている。なぜかって？

「中距離射撃型の戦闘法が役に立つものか。一夏のISには射撃武器がないからな」

「それをいうなら篠ノ之さんの剣術訓練も同じでしょう。ISを使用しない訓練なんて時間の無駄ですわ」

「な、何を言うか！ 剣の道はすなわち見という言葉を知らぬのか。見とはすなわち——」

「一夏さん、今日は無反動旋回のおさらいから始めましょう」

「ええい、このっ！ 聞け、一夏！」

「俺は聞いてるって！」

これって訓練になるのかな？ 教官がまず仲悪いし、言ってることもバラバラだし。一夏が強くなってるのか不思議だなあ。

「待ってたわよ、一夏！」

かなりの時間がかかり、アリーナにたどり着くと、鈴がいた。

「貴様、どうやってここに」

いや、普通に入口からだと思えますよ、篠ノ之さん。

「ここは関係者以外立ち入り禁止ですわ」

セシリア、そんなことは決まってるから。

「あたしは関係者よ。一夏関係者。だから問題なしね」

鈴、その理屈はなんかおかしい気が……。

あ、一夏の反応に食ってかかる篠ノ之さんとセシリア。一夏が軽く怯えているのは気のせいじゃないはず。

いつになったら一夏の訓練が始まるんだろ。

ドガアアンツ

「言ってたわね……。言ってはならないことを、言ってたわね！」

一夏が何を言ったのか知らないけど、ISを展開させて怒りに震える鈴。

危険に巻き込まれなくなかったから、俺はあのグループから距離を取る。だが、予想外にも鈴はすぐに帰っていった。なんかもう呆れに呆れてどうでもよくなってきたよ。

「ンンッ！ 気を取り直して、訓練を始めろぞ、一夏」

「そうですね。わたくし達の貴重な時間を使用してるんですもの。しっかりとやってもらいますわ」

「セシリア（篠ノ之さん）は引っ込んでいろ（いてください）」

ホントにいつになったらはじまるのかなあ。

はあ、仕方ないけど俺がどうにかしなくちゃ。

「ねえ、箒とセシリアは何がしたいの？ 一夏の特訓？ それとも一夏の独占？」

「な、何を言っている。私はただ同門が弱いのが我慢ならないだけだ」

「わ、わたくしはクラス代表にはしっかりとしてもらわなくてはいけないと思ひまして」

「つまり、一夏が強くなればいいんだよね？」

「勿論だ／そうすわ」

「だったら俺みたいに近接戦ができるISを使う人が特訓した方がいいんじゃない？」

俺がそう言つと、一夏は期待をこめた視線を俺に送ってきた。まあ、これもデザート……一夏のためだからね。

「い、いや、私は一夏がどうしても、と言つから相手をしているの

だ」

「そうですね。本人の意思を無視するのは良くなくて」

「いや、俺は訓練してくれるのはありがたいけどさ、どうしてもって言っただけ」

何この意見の食い違い？　そして固まる2人。まあ、2人は大丈夫だろうし、始めるかな。

「じゃあ一夏、始めるよ」

「おう」

さてと、まずはこれかな。

『タカ！　トラ！　バッタ！　タ・ト・バ　タトバ　タ・ト・バ！』

「こっちからいくよ」

オーズカリバーを構え、一夏に向かって加速する。すかさず一夏も雪片で対抗してきて鏝ぜり合いになる。

「くっ……」

「一夏、まだまだだよ！」

一夏を押し、よろめいたところで距離をとる。一夏は接近戦用のブレードしかないなら、これを使ってみるかな。

『タカ！ ゴリラ！ バッタ！』

トラをゴリラに変える。スピードは遅くなるが、パワーは上がる。一夏は突っ込まなきゃ攻撃はできない。だったらカウンター狙いでやってみるかな。

「腕を変えた……見るからにパワーがありそうだな。でも鈴もパワータイプらしいんだ。いい練習になるな」

そう言って一夏は加速してくる。雪片の一激を肩で耐え、右腕を振るう。

「うわあああああ」

ドガンッ！

ゴリラアームの一撃を食らった一夏は地面に叩きつけられ、土煙があがる。でも、一夏のシールドエネルギーがなくなっただけで情報が流れないため、油断はできないな。そう思っただけでタカは能力である視力の強化をする。…一夏はあそこだな。だっただけで土煙が晴れたら勝負だね。じゃあメダルはこれに。

『ライオン！ カマキリ！ チーター！』

ラキリーターとなり、土煙が晴れるのを待つ。一夏は突っ込んでくるところから視力を潰す。そこから攻める、それが今回の作戦だ。

土煙が晴れる。俺の予想とは別に一夏は俺と距離をとった。それもジグザグの軌道で。多分、オースカリバーを警戒したんだ。予想外の冷静な対応に篠ノ之さんとセシリアとの特訓は無駄じゃなかった。

たんだと思い、ちょっと安心した。

だったらこっちから攻めるかな。チーターの加速からカマキリソードを振るう。だが、一夏は避けずに、上手い体勢でこちらの攻撃を最低限のダメージに押さえた。

「え、これを止めるのはちよつと予想外」

「英治、さっきのお返しだぜ」

一夏の攻撃が直撃し、シールドエネルギーが減る。ほぼ不意打ちであるため、かなりのシールドエネルギーを持ってかれた。今度はこっちが地面に落ちた。

「ふん、特訓の成果がでているようだな」

「そうですわね。何もできずにやられていたら困りますわね」

え、いつの間に復活したの2人とも？ さっきまで固まっていたよね？

ドガアアンツ

すぐに気を取り直して一夏の追撃をかわす。

こうなったら切り札を使うか。

《ライオディアス発動》

俺に黒いバイザーが装着され、その後に輝く。

「くそつ、目が……」

「今だ！」

『スキヤニングチャージ！』

一夏が止まってる隙に加速。そのままカマキリソードでX字に斬る。

そして一夏は落下。シールドエネルギーはゼロに。

下を見ると、白式が解除された一夏が大の字になっていた。

「思ったより強いよ。鈴の実力がわからないけど、まあまあ戦えるんじゃない。まあ俺もISはそんなに強いわけじゃないけどね」

「そ、そうか？」

一夏が確認をしてる途中、篠ノ之さんとセシリアは物凄い形相で俺を睨んでいた。はあ、俺が悪いの。

「サンキューな英治。やっぱり接近戦型の相手の方が練習した気になるぜ。次も頼む」

「ははは、まあ、いいけど」

自分達が呼ばれないことに不満を感じてる2人から視線が刺さる中、俺は一夏に答えた。

クラス対抗戦組み合わせ、1回戦、1組代表織斑一夏VS2組代

表鳳鈴音

この戦いがあなるとは今の俺は思いもしなかった。

奪い合いと禁句と特訓（後書き）

突然ですが、アンケートの締め切りを原作1巻終了予定の8月30日までとします。そうしないとキャラを出すタイミングがなくなるので……

ちなみにバースは伊達さん、参戦ライダーは龍騎が1位となっています。投票して下さいた方に感謝です。

クラス対抗戦と衝撃砲と瞬時加速（前書き）

C o u n t t h e m e d a l s

オーズが使えるメダルは……

タカ

クワガタ

カマキリ

バッタ

ライオン

トラ

チーター

ゴリラ

クラス対抗戦と衝撃砲と瞬時加速

クラス対抗戦当日。対戦カードは一夏と鈴。そういえば、一夏は織斑先生から何か教わったみたいだったけど、なんだろう？

一夏と親しいから俺、篠ノ之さん、セシリアは織斑先生、山田先生とピットから見ていた。期待の新生生同士の戦いだからか、アリーナは全席満席で、あちらこちらでモニターで見る人がでるほど、注目の的となっている。

「そろそろ、はじまるのかな」

フィールドでは、一夏と鈴が睨みあうように立っている。鈴のISは『甲龍』と書いて、シエンロンと呼ぶ。特に目を引くのは、非固定浮遊部位と、2本の青龍刀 双天牙月。何とも攻撃的なデザインなことだ。

『それでは両者、指定の位置まで移動してください』

アナウンスに促された2人は指定の位置へ。2人の距離、5メートルが少ないと思うのは俺だけだろうか？

「一夏、今謝るなら少しくらい痛めつけるレベルをさげてあげるわよ」

「雀の涙くらいだろ。そんなのいらねえよ。全力で来い」

バトル開始前から舌戦ですかい。まあ、俺が口を出すべき問題ではないから、本人達の気が済むようにやればいいと思う。

「一応言っておくけど、ISの絶対防御も完璧じゃないのよ。シールドエネルギーを突破する攻撃力があれば、本体に貫通させられる」

あの言い方、鈴にはそれができる武装があるってことか。

そして、戦い開始のブザーが鳴る。さて、どちらが勝つのかな。

ガギンッ!!

一夏は展開した雪片で、見えない何かをはじくが、体制を崩す。それなりの威力はあるようだ。まあ、一夏はすぐに、セシリアから教わった機動、え〜と、名前は忘れた、で鈴の正面に行く。

「ふうん。初撃を防ぐなんてやるじゃない。けど」

そう言うつと鈴は双天牙月をバトンのようにくるくる回しながら、一夏に切りかかる。様々な角度からの斬撃をいなすだけで、一夏は精一杯のようだった。あの鮮やかな動きを刀1本でいなせるだけ、俺は凄いと思うんだけどな。

（まずい。このままじゃ消耗戦になるだけだ。1度距離をとって）

「甘いつ!!」

「ッ!!」

鈴が叫ぶと同時に、一夏は吹き飛んだ。肩から、何かを撃ったようだけど……。

「今のはジャブだからね」

不敵な笑みを浮かべた鈴は、体制を立て直している一夏にもう1

度何かを撃ち込んだ。一夏は痛そうな悲鳴をあげている。きっとこれが、最初に言ってた武器なのだろう、あの見えない砲撃が。

「なんだあれは……？」

篠ノ之さんが呟く。俺も仕組みがわからないから、何だ、って思っている。

「『衝撃砲』ですね。空間自体に圧力をかけて砲身を生成、余乗で生じる衝撃を打ち出す。ブルー・ティアーズと同じだ！ 3世代ですわ」

解説ありがとう、セシリア。要するに、威力が桁違いに高いダンボール砲って感じかな。篠ノ之さんは今の説明を聞いていなかったみたいだけど。大切な人が辛そうな表情でいるのだから。

(……一夏)

篠ノ之さんはこの激しい戦闘を目の当たりにして、ただただ、一夏の無事を願っていた。

「心配なのはわかるけどさ、一夏の勝利を願ってあげべきだと思うよ。信じる方が大事だからね」

「……ああ、そうだな」

頑張れよ、一夏。こんな美人が心配してくれているんだから。

「よくかわすじゃない。衝撃砲 龍砲 は砲身も砲弾も見えないのが特徴なのに」

見えない鈴の攻撃に防戦一方になる一夏。弾が飛んできてからよけるのは多分無理。だったら、銃口を見て、あらかじめ射線から逃げるのが有効だけど、銃口すら見えないからなあ。

でも、一夏のISなら相手の攻撃をよけつつけるより、一瞬の隙をついた奇襲の一撃必殺がむいているはずだ。あいつの雪片なら、それが可能だ。

一夏は織斑先生から何かを教えて貰った後、近接戦闘と急加速急停止に力を注いでいた。それが勝利の鍵だろうな。

（練習なら、できることをやったけど、ISの経験はどう考えても鈴の方が上なんだ。だから、俺ができるのは、気持ちで負けないってくらいだな）

一夏はそう考えて、鈴を見つめた。

「鈴」

「なによ？」

「本気で行くからな」

「な、なによ……そんなこと、当たり前じゃない……。とっ、とにかくっ、格の違いってのを見せてあげるわよ！」

鈴は再度、双天牙月をバトンのように回し構え直す。対する一夏は衝撃砲を警戒し、その前にどうにかしようと加速体制に入った。
イグニッション・ブースト
『瞬時加速』。この1週間で一夏が身に付けた技術、そして切り札^カ。この奇襲は1度限りだろう。これが、この勝負の鍵である。

「うおおおおっ！」

そして、一夏は飛ぶ。刃が鈴に届きそうになったとき、それは起こった。

ズドオオオオオンッ！！

大きな衝撃がアリーナを襲い、遮断シールドに穴が空く。穴はすぐに修復されるが、煙ははれない。

「な、なんだ？ 何が起こって……」

迷う一夏に鈴からプライベート・チャンネルが繋がる。

『一夏、試合は中止よ！ すぐにピットに戻って！』

何を言い出すのか？、と考える一夏を現実の戻したのはISの緊急通告だった。

——ステージ中央に熱源。所属不明のISと断定。ロックされています——

「なっ！」

アリーナの遮断シールドはISと同じもので作られている。つま

り、それを貫通するほどの攻撃力を持った機体が現れた、ということだ。おまけに一夏も鈴もエネルギーを消耗している。ようするに、ピンチということだ。

『一夏、早く!』

「お前は どうするんだよ!？」

「あたしが時間を稼ぐから、その間に逃げなさいよ!」

自分が囷になるから、その隙に逃げるように言う鈴と、そんなことはできない一夏。平行線である2人の意見の対立に終止符を打ったのは敵の攻撃だった。

「あぶねえ!」

間一髪、鈴を抱えて、敵の攻撃、ビーム砲をよける一夏。その威力は彼の友人、セシリアのそれを上回っていたのだった。

そのまま、敵は2、3発と一夏達を狙う。それをかわすと、煙がようやく晴れ、敵の姿がわかった。

「なんなんだ、こいつ……」

そこにいたのは異形だった。ISには珍しい『フル・スキン全身装甲』。バランスの悪い図体。そして並みのISより、巨大である。

『織斑君! 鳳さん! 今すぐアリーナから脱出してください! すぐに先生達がISで制圧に行きます!』

山田先生は2人に逃げるように言う。だが、一夏達は戻らないよ

うだ。きっと彼にもわかったんだろう。誰かが相手をしないと、観客席にいる人達が危ないということ。

結局、山田先生の説得むなしく、2人は謎の敵に立ち向かった。武器の都合上、一夏が前衛、鈴が後衛という形で。

「もしもし！？ 織斑君聞いてます！？ 鳳さんも！ 聞いてますー！？」

山田先生がいくら呼んでも返事は来ない。戦いに夢中なのか、それとも、通信不可能だからか。

「本人達がやると言っているんだ。やらせてみてもいいだろう」

「お、お、お、織斑先生！ 何を呑気なことを言っているんですか！？」

「落ち着け。コーヒーでも飲め。糖分が足りないからイライラするんだ」

さすが織斑先生。落ち着いていつらっしゃる。でも、コーヒーって糖分だっけ？

「……あの、織斑先生。それ塩ですけど……」

「……………」

前言撤回。やはり、織斑先生も人の子。弟のピンチには動揺しているようだ。

「あつ！ やっぱり弟さんのことが心配なんですね！？ だからそんなミスを……」

「……………」

気まずい沈黙。山田先生、地雷踏んだな。

「山田先生。コーヒーをどうぞ」

「へ？ それって、塩が入ってるやつじゃ……」

「どうぞ」

有無を言わさぬ口調。さよなら、山田先生。あなたのことは忘れません。

「い、いただきます」

「熱いので一気にいくといい」

ああ、山田先生が何とも言えない微妙な表情を。とりあえず、織斑先生を弟のことではいじってはいけない。例え、ブラコンであることが事実だとしても。

「ほう、火野。お前もコーヒーを飲みたいのか」

「いえ、いいです。それよりも……」

「先生！ 私にISの使用許可を！ すぐに出撃できますわ！」

ありがとうセシリア。君のおかげで命びろいできたよ。

「そうしたいところだが、……これを見る」

「遮断シールドがレベル4に設定……？ しかも、扉がすべてロックされて……あのISの仕業ですよ！？」

「つまり、避難も救援もできないってことか」

強いシールドに囲まれている。突破には高い火力が必要なのか……
… だったら。

「そのようだ。今、3年の精鋭がシステムクラックを続行中だ。それが完了次第。すぐに、部隊を……どうした、火野？」

「先生、ちょっといいですか？」

「何だ？」

「遮断シールドをどうにかできればいいんですよね」

「「？」」

肯定する織斑先生に話を読めていないセシリアと山田先生。あれ、篠ノ之さんはどこ？

「そつだがどうする気だ？」

「まあ、任せてください。とっておきの方法があるので」

「本来なら生徒にこんなことはさせたくないのだがな、事が事だ。出撃を許可する。だが、戻ってきたら色々与方法とか聞かせてもらうぞ」

「織斑先生、でしたらわたくしも行きますわ」

「仕方ないな。本来お前のISは多対1に向いてはいないのだが、勝手な行動をされる方が困るな。出撃を許可する」

「ありがとうございます」

ピットを飛び出してきたのは遮断シールドの目の前。
さてと、じゃあコンボ、いつてみようか。

クラス対抗戦と衝撃砲と瞬時加速（後書き）

今回はあのコンボが登場。コンボは2つ使えるけど、どちらかは感のいい人ならお分かりでしょう。

感想等お待ちしております。それでは次回。

G o t t o k e e p i t r e a l (前書き)

C o u n t t h e m e d a l s

オースが使えるメダルは……

タカ

クワガタ

カマキリ

バッタ

ライオン

トラ

チーター

ゴリラ

G o t t o k e e p i t r e a l

「くっ……！」

一夏が放つ斬撃はいとも簡単に襲撃者にかわされてしまう。これで4回目のチャンス逃している。敵はありえないほどの回避能力を持っていた。死角をつこうが、どんなに速い攻撃をしても、だ。おまけに、鈴も一夏も連戦であって、シールドエネルギーが残り少なかった。

（参ったな……。これじゃ、バリアー無効化攻撃はあと1発だせるかどうか……）

「一夏っ、離脱！」

鈴の警告が一夏の思考を現実に戻す。さっきまで、一夏がいた場所をビームが通り過ぎる。白式のエネルギー残量から考えると、1撃くらいは、御陀仏だろう。

「ああもつつ、めんどくさいわねコイツ！」

鈴も衝撃砲を撃つが、敵の長い腕にはじかれる。残りエネルギーを考えると、速攻で決着をつけたがったがそうはいかなかった。なら、できるだけ早く勝負を、と考えてもそうはいかない相手だった。

「ちょっと、厳しいわね……。現在の火力でアイツのシールドを突破して機能停止させるのは確率的にひと桁台つてところじゃない」

ドンッ！ 2人の頭上からは何かがぶつかる音がする。

「ゼロじゃないだけかもしれませんが、確かに厳しいな……」

ドン、ドンッ！

音は強くなるばかり。

対策を考えているうちに意識を敵からそらしたのがいけなかった。敵は腕を向け、ビームのチャージを始める。一夏が気づいたときはもう遅く、回避はできない状況だった。

「一夏！！」

鈴が叫ぶが、彼はどうあがいてもよけられない体制であった。誰もがもう駄目だと思ったとき、その音が聞こえてきた。

ガシャアアンッ！

遮断シールドを突き破り現れた十機近くの緑のISは襲撃者を蹴り飛ばし、着地する。

「ふう、危ないところだったね」

「2人とも大丈夫でして？」

「英治にセシリア。助けに来てくれたのか」

「って、アンタ達どうやって入ってきたのよ！ 遮断シールドは解除されたないのよ」

「まあ、切り札があつたからね」

いつもの3色のタトバではなく、緑一色の装甲を纏っていた英治が答える。

「それに、なんなのよ、この大量のアンタそつくりのISは!？」

「まあちよつとね……」

ここで時間を戻して、突入する前の英治達にスポットを当てよう。

「さてと、じゃあ、今は」

取り出すのは3枚の緑のコアメダル。

「同じ色のメダル3枚で、何か起こるんですの？」

「まあね。ISだとどんな力かはわからないけれど……」

『クワガタ！ カマキリ！ バッター！ ガクガタガタキリッバ
ガタキリバ!』

ライドオーズの姿はとてつもない力を発揮する姿、ガタキリバコンボとなる。

「うおおおおおおお」

雄叫びとともに展開される十機位のガタキリバに似たIS。

「な！？ なんですよそれは！」

「うーん、セシリアのビットの人型バージョンかな」

セシリアの顔は驚愕の色に染まる。彼女は4機の誘導兵器の制御に苦勞するのに英治が展開するのは10機。それも人型である。彼女が、いや、ISを知る者なら誰もが驚くであろう光景だった。

「さてと、一点突破でいきますか」

『スキヤニングチャージ！』

飛び上がるガタキリバ達は空中で1回転し、足を突き出す。

「うおおおおお、セイヤー——！」

「説明は後で。だから今は目の前だけに集中して」

ISからの警告で人型ビットの展開はシールドエネルギーを大量に消費すると言われ、展開を解除する。敵の目的がわからない以上、持久戦はできるようにしないと。

「一夏！」

「お、おう！」

鈴の警告に応え、一夏はその場から離れる。数テンポ遅れてその場をビームが通り過ぎる。一夏が回避したのを確認した後、すぐに敵に切りかかる。だが、敵はビームを撃った後の体制にも関わらず、簡単にカマキリソードの一撃をかわしてみせた。とてもじゃないけど、人間がこんな動きはできないと思うんだけど。

「英治さん、援護しますわ」

セシリアの援護射撃も簡単にかわし、俺に殴りかかってくる敵。それを後ろに跳んでかわし、一夏達と合流する。

「なあ、アイツの動き、機械じみてないか？」

「ISは機械よ」

「そう言うことじゃなくて……俺が言いたいののは、あれって本当に人が乗っているのか？」

「人が乗ってないISなんて聞いたことがありませんわ。確かに動きは不自然ですが……」

俺は、あれは無人、もしくは人あらざるものが乗っていると考え

るのが妥当な気がする。でも、あれは怪人が使っているわけではない。何だかそんな気がする。

「2人とも何言ってるのよ。でも、確かに不自然なところは多いわね。でも、無人機だったら何？」

「そりゃ、遠慮なしに攻撃しても大丈夫だろ」

確かに搭乗者のことを考えずにボコボコにしても無人機なら問題はないはずだ。

「一夏、どうしたらいい？ 何でも手伝うわよ」

「頼む。英治とセシリアはアイツの隙を作ってくれ」

「了解」

「わかりましたわ」

セシリアのレーザーが足止めをしているうちに切り掛かる。スピード、パワーともに高い相手ならゴリラやチーターがいいんだろうけど、下手な亜種にするよりはコンボのガタキリバの方が強い。人型ビットを展開できるタイムは残り30秒。確実に決めるタイミングで使わないと。

「はぁああああ」

相手の拳をカマキリソードでいなし、バッタの脚力で距離をとりながら、クワガタの電撃を放つ。ダメージはそれなりには通るみたい。一夏はそろそろかなあ。

「一夏、まだ!？」

「わかった。じゃあ鈴、たのm」

『一夏あつ!』

早速、一夏が準備しようとしたときに聞こえてきたハウリング。その発生源は中継室で審判とナレーターを殴り倒した篠ノ之さんからだ。そんなことしてる場合じゃないでしょ!!

『男なら……男なら、そのくらいの敵に勝てなくてなんとする!』

再びハウリングを起こし、叫ぶ篠ノ之さん。彼女の表情は真剣なものだが、あくまで彼女にとっての。そんなことはお構いなしに無人機は銃口のついた腕を篠ノ之さんに向ける。

「っ、っ、っ!」

一夏が飛び出したのと、引き金が引かれたのは同時だった。一夏は白式の単一使用能力、『零落百夜』を発動させるが、白式のシールドエネルギーは残り少なく、ビームを相殺すると同時に一夏は倒れた。

「一夏っ!」

鈴が叫ぶが一夏は気を失っているのか反応はしない。容赦なしに無人機はその腕を一夏に向ける。でも、そんなことはさせない!!。そつ心に思い、ビットを展開させる。悪いけど、倒すから。

再び展開されるビット。チャンスは30秒だけだからすぐにきめる！

『スキヤニングチャージ！』

遮断シールドを破壊した時と同じように全機跳び上がり、空中で1回転。そのまま足を突き出す。

ドガアアンツ！ ドガアアンツ！

1機、2機と次々に蹴り込むと同時に、煙をあげ、無人機はその原型をなくしていく。

「はああああああ、セイヤーーーーー！」

最後に本体である俺のキックが無人機を貫く。

「ふう。やっぱりコンボは疲れるなあ」

爆発を背に、着地した俺は呟いた。実際のオーズのコンボよりは疲労を感じないけどね。さて、一夏は大丈夫かな。

「2人とも、一夏は？」

「ただの気絶ですわ。何にしろ大事に至らなくてよかったですわ」

一夏が大したことのないことに安心。よかった。さてと、問題は無人機が誰からの刺客なのか、ということと、ね。そう思っ
て中継室に目をやる。いくら一夏のためになりたかったからって、
そう認められることじゃないしね。

『火野君、オルコットさん、鳳さん、大丈夫ですか？ 今、遮断シールドが解除できましたので戻ってきてください』

山田先生からの放送を聞き、ピットに戻る。詳しい事後処理は俺達がやることじゃないから。

G o t t o k e e p i t r e a l (後書き)

オーズが終わった……私は何を生きがいにするばいいのでしょうか。
そんなことはさておき、次回は今回の後日談なので翌日に投稿します。

感想等お待ちしております。アンケートも明日までです。

説教と仲直りと約束（ただし一方通行）（前書き）

C o u n t t h e m e d a l s

オーズが使えるメダルは……

タカ

クワガタ

カマキリ

バッタ

ライオン

トラ

チーター

ゴリラ

説教と仲直りと約束（ただし一方通行）

ピットに戻ってきた俺達はすぐに一夏を保健室に運び、一夏が目を覚ましてから今回の事件についての連絡がある、と聞き、すぐに解散となった。でも、俺は今回の事件でどうしても解決しなければいけないと思うことがあった。だから、すぐさま一夏の元へ向かうとする篠ノ之さん呼び止める。

「何故止めるんだ？ 火野は一夏が心配ではないのか！？」

「心配だよ。でも、こうなったのは篠ノ之さんのせいでもあるんだよ。どうしてあんなことをしたの？」

「そ、それは……」

「自分が狙われないことを考えなかったの？ 中継室で篠ノ之さんが気絶させた人達も傷つく可能性があることを考えなかったの？」

「……………」

篠ノ之さんは黙ったまま。それでも俺は続ける。だれが伝えないと、またこんなことが起こる気がするから。

「もしかすると一夏は篠ノ之さんがあのタイミングで出てこなければ怪我しなかったのかもしれない。正直に言っと、あの時の篠ノ之さんは足手纏いだっただけから。俺が言いたかったことはこれだけだから」

「……………わ、私はっ……………」

うつむく篠ノ乃さん。その表情は見えないが雰囲気から自分のミスに気づいてる気がする。

「言い方が悪かったかもしれないけど、人の命に関わることだから。何より失った命は帰ってこないから」

そう言っただけ脳裏に浮かぶのは守れなかった人達。自分に力があれば助けられたかもしれない人、オーズの力があるのに間に合わず助けられなかった人……………

自分でも表情が暗くなっているのがわかるほど俺は今でも後悔をしているんだ。だから後悔しない生き方を探しているんだ。

「火野……………そうだな。私が悪かった。あの時は一夏のためになるってことしか考えていなかった……………すまないな。お前のおかげで大事なことに気がついた」

「わかってくれればいいよ。俺は先生達と話があるから先に一夏のところに行つて」

「ああ」

そう言っただけ篠ノ之さんは一夏のところに向かった。これでこの事件は解決かな。

「すまないな、火野」

後ろから織斑先生の声がある。その顔はいつもの凜とした表情ではなく、少し戸惑いのある気がした。

「本来は篠ノ之にああ伝えるのは教師の役目なのだがな、山田先生は優しすぎるし、私は感情的になってしまいそうだからな」

「別にいいですよ。俺だって気になりましたから。それに……」

一夏本人は優しいからこのことを咎めすぎないだろうから。もし誰も何も言わなかったら大事なものが無くなりそうな気がしたから。

「……そうか」

「じゃあ俺はこれで」

そう言って、俺は保健室に向かった。一夏がどうなってるかな。

英治と篤が話している頃、早くも目を覚ました一夏とそれを鈴はというと、夕日がさす保健室で話していた。

「あー、そういえば試合、無効だったな」

「まあ、そりゃそうでしょうね」

「あ、そっぴやさ、勝負の決着ってどうする？ 次の再試合って決

まってないんだよな？」

負けたほうがなんでも言うことを聞くといい賭け。彼は鈴との約束のことで気になったのだ。

「そのことなら、別にもういいわよ」

「え？　なんで？」

「い、いいからいいのよ！」

顔を赤くする鈴。元々の発端は、鈴が中国に帰るときに一夏とした約束「あたしの料理の腕が上がったら、毎日あたしの酢豚を食べてくれる？」の内容を一夏がただ飯を食わせてもらえると勘違いした所から始まったのだ。鈴の真意は日本でいう味噌汁の話、いわゆるプロポーズのものだったのだが、相手は歩く唐変木、織斑一夏。見事に誤解していたのであった。

「鈴。その……悪かったよ。色々とすまん」

一夏は素直に頭を下げた。鈴はそんな一夏に面を食らったような顔をしたが、すぐに戻った。

「ま、まあ。あたしもムキになってたし……。いいわよ、もう」

ここで終わればいいのだが、一夏は正確な約束を思い出し、それが味噌汁がどうのこうのとか言ったときは鈴は固まって、動揺していた。

「そっいえば、また店やるのか？　鈴の親父さんの料理、うまいも

んな。また食べたいぜ」

「あ……。その、お店はもうしないんだ。あたしの両親、離婚しちゃったから……」

場の空気が重くなった。鈴の両親が仲が良かったのを知っている一夏は冗談じゃないのか、とも思ったが、鈴の表情を見て、冗談ではないのをさとり、何を言うべきなのかわからなかった。何より一番辛いのは鈴なのだ。理由は確かに気になるが、そんなのは訊いていい話ではないのだ。彼女の心の傷をえぐってしまうから。

「家族って、難しいよね」

その問いに一夏は答えられなかった。彼自身も家族に問題があった。一夏と千冬は捨てられた。さらに、一夏は両親の顔知らない。だから、何も答ええなかった。

「なあ鈴」

「ん、何？」

「今度どっか遊びに行くか」

「え！？ それって、そのデー——」

「弾も呼ぼうぜ。久しぶりに3人で集まるか」

「……………」

何かが砕け散る音がした。よく自分から突き落として、上げる。

それが異性に好印象を与える方法と耳にすることがあるが、彼はまさに逆のことをやってのけたのだ。夜中に刺されても文句は言えないだろう。

「あんとと2人つきりなら、行つてあげなくも――」

「一夏さん、こんな所でなにをやっていますの？」

「なんでアンタがここに」

突如、2人の間に火花が散る。その後、クラスだの、戦闘スタイルだの、一夏のコーチは自分だ、だの言い争いが始まった。一夏にとつて幸いなことは箒がないことだろう。幼馴染は自分だ、なので余計に騒がしくなるだろう。

（ああ、早く部屋に帰って休みたい……。ていうか風呂に入りたい……）

「「一夏（さん）！！」」

少年の願いは当分、叶わないようだ。だが、諦めてしまったら、そこが終点になってしまう。

学園の地下。千冬と真耶はレベル4権限者しか入れない場所で無

人機の解析を行なっていた。無人機はすぐさまその場に運ばれていた。真耶が解析してる間、千冬はアリーナでの戦闘記録を何度も見ていた。

「やはり、登録されてないコアだったか」

真耶からの報告を聞き、千冬はあることを思い出した。

（そういえば、火野と門矢のISも登録されていないコアだったな。だが、何者も手出しができないように仕組まれている）

すぐさま友人の顔を思い出し、聞き出してみたいと思った。

「織斑先生、どうかしましたか？」

「いや、このコアについて考えていただけだ」

「ということは心当りがあるんですか？」

「いや、ない。今は、まだ」

千冬は携帯に登録されているある番号を見つめる。それが答えに一番近づく方法だから。だが……。

（山田先生もいるしな。後でかけるか）

彼女は視線をディスプレイに戻す。世界最強まで上り詰めた彼女の瞳には何が映るのだろうか。

「結局、コンボを使わなきゃいけなかったか。でも……」

一夏がいつもの3人に振り回されているのを見た、俺は自室で休んでいた。緑のコンボ、あれがこの世界の常識を超えているものだったら、絶対、誰かが狙ってくる。

あの戦いだって、無人機はあまり高く飛ばなかったし、ガタキリバの物量でどうにかなった部分が大きい。ISでの戦いはまだまだだから強くなきゃ。

そして黄色のメダルに目を落とす。現段階でできるもう1つのコンボ。あのコンボはISだとどうなるのだろうか。それに残りのメダルも集めなくちゃいけない。

「強くなきゃな」

そう思ったあと、気分転換に外の空気、というか購買に行こうと思つて部屋を出た。そして適当にジュース、パンを買つて部屋に戻る途中、のほほんさんがいた。

「何してるの、のほほんさん？」

「あ、ひのひの。今ね、おりむーの部屋の前で面白そうなことになってるのだ」

ひのひのってポケットなモンスターと旅するゲームの2作目のキアラの鳴き声みたい。で、面白いことって？ そう思つて見ると、

篠ノ之さんが一夏の部屋の前で何やら話していた。

「っ、付き合ってもらう!」

そう言い残して篠ノ之さんは去っていった。

「のほほんさん、コレどういうこと?」

「うん、今度の学園別トーナメントで優勝したらおりむーと付き合えるかな」

「へえ、そうなんだ。何か大変なことになりそう……」

「ひのひのとも優勝すれば付き合える?」

「いや、付き合えないけど。一夏達で決めたルールでしょ。優勝したら一夏と付き合えるって?」

一夏がこんな約束するとは予想外かな。

「じゃあ俺、部屋に戻るから」

「うん、おやすみ」

説教と仲直りと約束（ただし一方通行）（後書き）

アンケートは本日0時までです。次回はそのアンケートで決まったキャラを出すための話にするため、一から作るので遅れる可能性があることを御了承ください。

オーズの最終回見たらアंकを出したいとも思ったけど、出しても収集がつかなくなりそうなので悩み中。

簪とドーパントとバース（前書き）

英治が全く出てこないので「Count」はお休みです。アンケート結果発表バース編みたいなものです。

簪とドーパントとバース

「帰ったら…これを見よ」

授業のない土曜日。簪は用事（お気に入りのアニメのDVDをア
ニイトに買いに行く）を済ませ、街を歩いていた。これ以上、こ
こに用事もなかったため、すぐに帰るつもりだった。

（私のIS、どうしよう？）

道中、彼女はそのことを考えた。代理が出たクラス対抗戦は
ともかく、今度行われる学年別のトーナメントにはこのままでは間
に合わないからだ。

（…英治は自分のデータを使ってもいいって言ってた。……でもあ
の子にはライドオーズのデータは、ちょっと……）

クラス対抗戦で見た人型ビット。あれがあれば戦いは有利だろ
う。だが、彼女が元々作るうとしてたのはマルチロックオンシス
テム。それで苦戦中なのだからそれよりも難しい人型ビットは論外で
ある。それを作るきっかけとなったのは蒼い翼を持つ自由ではない
と思いたい。

好きなアニメの技が使えたらいいなあ、とも簪は考えているが、
それを再現するためのヒントとかがないため不可能である。

（アニメの武器か……ドリルかな……天を突くみたいな感じ……）

彼女の脳内にはとあるロボットが思い浮かんだ。

（こ、これは無理…… な、何か別の……）

さすがに道理は蹴っ飛ばせなかったのだろう。簪はふるふると首を振った。他にも赤く輝き3倍の性能を発揮するシステムや月面まで伸びるパンチ等々考えたが、彼女個人ではどう考えても再現不可能だったので考え直した。

そんなことを考えてるときに事件は起こった。

ドガアンッ！！

その爆音は彼女が銀行の近くを通ったときに聞こえてきた。

「な、何？」

辺りでは悲鳴があがり、逃げ惑う人々が大勢いる。爆音の中心となった建物からは煙が上がリ、そこから人型のシルエットが歩いていった。

「ヒヤハハハハ、楽勝じゃねえか。ここには厄介な仮面ライダーもいないし、俺に勝てるやつはいねえぞ！」

異形の怪人、アームズドールパントはそう言いながら駆けつけてきた警官を蹴り飛ばした。カエルが潰れたような声をあげ、警官は転がっていった。

（ど、どうしよう。英治に連絡したってここからIS学園は結構距離あるし……）

彼女が思考の渦の中にいる最中も次々と警官は駆けつけ、包囲する。

「貴様は包囲されている。大人しく投降するんだ！」

「ああ、んなことするわけねーだろ！」

アームズドローパントは右腕を銃に変え、発砲する。だが、その1撃は脅しとばかりに警官達を狙わず、付近のパトカーを破壊した。それをきっかけに警官隊は拳銃で攻撃をしかけるが、ドローパントには大したダメージは与えられず、1人また1人と倒れていく。

（早く英治に連絡を……っ！）

少し離れた物陰に隠れて、英治に連絡をとろうと思った彼女の目の前に映ったのは怪我をしていて動けない女の子だった。近くにはパトカーの残骸が見えるため、それで足を怪我したのだろう。

（助けなきゃ……）

そう思っただけは少女のもとへ急ぐ。幸いにもドローパントは警官達を相手にしているようでこちらに気づいていないようだった。

「……大丈夫？　早くここから……」

「いい獲物がいるじゃねえか。なぶりがいのありそうなやつらだ」

女の子を背負い、逃げようとした簪に後ろから声がかかる。そこですぐさま走りだせば違う未来になったかもしれない。だが、簪は怪人が自分に向ける殺気に恐怖し、立ち止まってしまった。

（せ、せめて…この子だけでも守らないと……）

自分より震えている少女を見て、簪はそう思った。しかしドーパントはそんな彼女の考えも気にせず、着実に近づいてくる。

「あばよ、お嬢ちゃん達」

バンツ、バンツ！

彼女達めがけてドーパントが腕を振り下ろそうとしたとき、銃声が響いた。

「がぁぁぁぁぁ」

警官の持つ拳銃とは威力が桁外れのそれに煙をあげ、よろめくドーパント。

「貴様ぁ！」

ドーパントが怒りをこめて目を向けた先には体格がよく、髪を短く刈った男がいた。年は30くらいであろう。だが、何より目を引くのは背負っているミルク缶だろう。

「いけねえよ、自分の欲望を満たすためにそんなことをするのはよ」

ま、俺も欲望まみれだけどな。そう男は続ける。

「貴様、タダじゃすまねえぞ」

男はドーパントの敵意をさほど気にせず、悠々としている。

「さて、異世界での初仕事。いっちょがんばりますか」

男はベルトを巻き、メダルをはじく。宙を舞うメダルを掴み、一言。

「変身！」

メダルをベルトにいれ、ハンドルを回す。カポーン、そういう音と共に、男の姿は変わる。仮面ライダーの姿に。

「か、仮面ライダーだと!？」

ドーパントは狼狽する。こことは違う街、風都で手に入れたガイアメモリで男がわざわざこっちに来て暴れたのは自分達の天敵とも言える仮面ライダーを警戒してのことだった。

「そうなるな。じゃあ仮面ライダーバースだな」

「バースだろうがどうでもいい。貴様を倒せばいいんだよ！」

アームズドーパントは右腕を剣に変え、バースに切りかかる。

「うおっと。危ねえな…つと、お返しだ！」

体勢を低くして剣戟をよけ、膝蹴りをする。よろめくドーパントにそのまま追撃にパンチをする。

「こっちも武器を使うか」

再度、メダルをベルトにいれ、ガチャガチャのように回す。

『ドリルアーム』

「もいっちょオマケだ！」

『キヤタピラレッグ』

右腕と両足の周りにいくつもの部品が展開され、それが名前通りの形となる。

「おりゃああああああ」

キヤタピラで前進し、ドリルアームを振り回す。火花を上げ、よろめくドーパントに今度はキヤタピラレッグで蹴りこむ。

「がああああああああ」

キヤタピラの回転に巻き込まれ、痛みに悲鳴を上げるドーパント。

「く、くそっ」

実力の差を知ったのかアームズドーパントは背を向け走り出す。

「逃がすかよ！」

バースは何枚かのメダルをベルトにいれ、回す。

『ブレストキャノン』

『セルバースト』

「ブレストキャノン、シュート!!」

走り出すドーパントを光の奔流が飲み込み、爆発させる。煙が晴れたそこには気絶した男と砕けたメモリがあった。

「さて、お仕事完了。嬢ちゃん達、大丈夫だったか？」

変身を解いた男は簪の方へ近づいてくる。

「私は大丈夫。でもこの子が……」

簪は怪我をしてる子に目を向ける。

「どれ、見せてくれ。うーん、安心しな。ただの打撲だ。少し休めば大丈夫だ」

そういつて男は簡単な処置を施す。

「ヒナ、どこ？ 返事をして？」

「あ、お母さんだ。お姉ちゃん、おじちゃん。ありがとう」

母親に連れられて女の子は帰っていった。母親に背負われながらその子はずっと手を振っていた。

「さあて、嬢ちゃん、1ついいか？」

「は、はい」

「ここからIS学園に行くにはどうすればいいんだ？ 俺、今度その保健室で働くことになったんだな」

「え？ あ、私、IS学園の生徒です。よかったら一緒に行きますか」

「お、そいつはありがたいな。頼むぜ。俺は、えーと、こういうやつだ」

男は1冊のマニュアルを取り出した。

「……伊達明。で、仮面ライダーバース……」

マニュアルを受け取った簪はペラペラとページをめくる。そこにはバースの武器、CLAWSが書かれていた。

(すごい。もしかするとこれなら……)

「嬢ちゃん、どうしたんだ？ そのマニュアル気に入ったのか？」

静かに頷く簪。

「そうか。そっぴゃ嬢ちゃん名前は？」

「……更識簪」

「じゃあ、簪はこっぴつの整備できるのか？」

「ま、まあ、少しは……」

「お。じゃあ、もしかすると頼むことがあるかもしれないな。ソレ、貸すからヨロシクな」

「あ、はい」

簪の案内の元、伊達明はIS学園に向かう。そこで英治達にどう
いう影響を与えるのだろうか。

「じゃあIS学園に向かうか」

そう言って伊達は歩き出した。

「あ、あの駅はそっちじゃない……あっち」

「何？」

大雑把な人だな。会ってそうそうなのに簪は伊達の性格がわかった気がした。

簪とドーパントとバース（後書き）

文句が着そうな簪魔改造計画。

言い訳をするならバースのIS化をしたかったからです。

ちなみに参戦希望ライダーは龍騎とカブト（天道総司で）の同率一位でした。すぐにはいきませんが、出番をお待ち下さい。天道をどのタイミングで介入させるかが難しい……

アンケートに協力してくださった皆様、ありがとうございました。

おでんと噂と転校生（前書き）

今回はつなぎみたいなもので短いです。

C o u n t t h e m e d a l s
オーズが使えるメダルは……

タカ
クワガタ
カマキリ
バッタ
ライオン
トラ
チーター
ゴリラ

おでんと噂と転校生

とある日曜日。簪に呼ばれた俺は保健室に来ていた。俺に会わせたい人がいるかららしいけど、誰だろ？

「失礼します。火野ですけど……」

「…英治、来た」

「おう、来たか。お前が火野英治だな」

「あ、はい、そうですけど」

保健室には簪と知らない体格のいい男の人がいた。男の人は鍋で何かやってるけど。

「俺はこういうやつだ。ヨロシクな、火野」

そう言って渡されたマニュアルを見る。そこには「バース装着者伊達明」って書かれていた……って、バース！？

「おう。紅渡に頼まれて来た、お前の助っ人だな。しかし、お前本当に俺の知ってる火野とそっくりだな」

「「？」」

同時に「？」を浮かべる俺と簪。どうやら伊達さんは俺とは違うオーズの世界から来たみたい。その世界のオーズは俺とそっくりだが、グリードの1人、アंकと仲間だったらしい。俺がいた世界じ

や、皆敵だったもんな。そうか、グリードとも仲良くなれる可能性だってあるのか。

「ま、俺は医者だから普段ココにいるから困ったときは俺のところに来な」

「はい。ありがとうございます」

「何か聞きたいことはあるか？」

聞きたいことが……。じゃあ一つ。

「その鍋は何作ってるんですか？」

そう聞いた途端、簪が「え……それ？」って呟いたけど気にしない。だってお腹すいたから。

「お、これに目をつけるか。こいつはおでんだ。食うか？」

「あ、いただきます」

「……しかも食べるの……？」

簪が突っ込むけど、これも気にしないで箸を伸ばす。あ、ちくわ。

「コレおいしいよ。簪も食べたら」

「……じゃあ、私も……」

このときは気にしなかったけど、保健室で3人がおでんを食べて

るって異様な光景だったんだろうな。

「ふう、食べた食べた」

「結局……ずっと、食べてた……」

おでんを食べた後、俺達は戻ることにした。簪は伊達さんのマニュアルを持ってたけど、どうするんだろ？

バースに変身するのかな？

まあ、それにしても伊達さんみたいな人が来てくれてよかった。ここISS学園は一部の職員を除き、全員が女性。ああいう頼れる大人って憧れるしね。

その後すぐ、簪と別れ、俺は寮へ。といっても特にやることはないんだけどね。

英治達が戻った後、伊達は1人、考え事をしていた。

「紅はコイツを使うときが来るって言ってたな」

取り出したのはバーストライバー。だが、彼の元にはもう一本、バーストライバーがある。

感のいい人ならお分かりだろうが、これはプロトバーストライバーとも呼ぶのがいいであろうものだ。紅渡は伊達にこれも渡していたのだ。

自分がいた世界でもバースを後藤慎太郎に託し、自分は手術のために旅立った。その後、プロトバースとして復帰したのである。

「ま、あんまり考えていても変わらないか」

この世界には英治のオーズ、伊達のバース。そしてまだ見ぬ仮面ライダーがいる。それでも危機に陥らない可能性が無いわけではない。

「コイツを渡すやつ、探しといた方がいいかもな」

プロトバースのベルトを見ながら、伊達は呟いた。

夕方、自由気ままに過ごした後、ご飯を食べに食堂に来ていた。

「ねえ、聞いた？」

「聞いた聞いたー」

「え、何の話？」

女子の集団が何か盛り上がっているな。何かあったのかな？ 聞いてみよう。

「ねえ、何かあったの？ 凄い盛り上がっているけど」「ひのひの。この前のおりむーのことだよー」

一夏の？ ああ、あの優勝したら付き合えるってやつか。

「なるほど。優勝すれば一夏と付き合えるから盛り上がっているのか。思ったんだけど俺が優勝したらどうなるの？」

まさか俺が一夏と……絶対そんなことはないはず。

「今年のネタになるわ」

「むしろそれがいいかも」

「って！！ ちょ、冗談じゃないよ」

何が悲しくて男と付き合わなきゃいけないの！？

「ところで火野君とは付き合えないの？」

「そりゃそうだよ。優勝したら付き合うつて約束したのは一夏でしょ。残念だけど俺は違うよ」

「そうなんだゝ残念」

「残念ってなんかあったのか？」

「あ、一夏。帰ってきてたんだ」

鈴と一緒に一夏が現れることによって慌てる女子達。隠す必要あるのかな？ ま、いつか。

ちなみに一夏は中学の友達の家遊びに行ってきたらしい。

「まあ、一夏はあんまり気にしないでいいと思うよ」

「そうか。まあ、いいや。それより英治も一緒に食わないか？」

「いや、先約があるからやめとくよ」

そう言つて鈴を見る。彼女はホツとした表情だった。多分、一夏と2人きりがよかったんだろう。俺が邪魔するのは悪いはず。さて、何食べようかな。

「諸君、おはよう」

翌朝。織斑先生の登場によって一気に静かになる教室。まあ叩か

れたくないからね。先生の威厳は軍隊でも通用するんじゃないかな。

「今日から本格的な実戦訓練を開始する。訓練機ではあるがISを使用しての授業になるので各人気を引き締めるように」

その後、ISスーツを忘れたものは水着、それすら忘れた人は下着で、って。思春期男子としては気になる光景だけど、駄目でしょ。ちなみに誰が狙ったのか、ここ指定の水着は旧型のスクール水着で体操着はブルマ、と。

「では山田先生、HRを」

「は、はいっ」

そんなことを考えているうちに始まるHR。今日は何かあるのかな。

「ええとですね、今日はなんと転校生を紹介します。しかも2名です」

「「えええええっ!?!」」

え? 転校生? 2人も同じクラスに? 分散させないの? こちらの疑問にも関わらず、開くドア。どんな人が来るのかな?

「失礼します」

「……………」

礼儀正しく入ってくるブロンドの髪の人と、黙って入ってくる銀

髪の人。でも驚くことはブロンドの髪の方は“男”だったことだった。

おでんと噂と転校生（後書き）

やっとで原作2巻突入。2巻が終われば大体のキャラが揃うから、その後の展開がやりやすいのに。何が言いたいのかというと、ライダーの出番が未だに少ないってことです。

フォーゼって宇宙関係と学園ものってことでISと絡ませやすそうなのがしますね。フォーゼを出す予定は無いですけど。

金髪と銀髪と山田先生の実力（前書き）

C o u n t t h e M e d a l s

オーズが使えるメダルは……

タカ

クワガタ

カマキリ

バッタ

ライオン

トラ

チーター

ゴリラ

金髪と銀髪と山田先生の実力

「シャルル・デュノアです。フランスから来ました。この国では不慣れなことも多いですが、よろしくお願いします」

にこやかな表情で告げるデュノアさん。そんな彼とは逆に俺達クラスメイトはあっけに取られていた。

「お、男？」

クラスの誰かが呟く。

「はい。こちらに僕と同じ境遇の方がいると聞いて本国より転入を

――」

「きゃ……」

「はい？」

「きゃあああああー！ー！」

クラス中に響き渡る換気の叫び。耳が痛い。織斑先生もやれやれって顔してるし。

「男子、3人目の男子」

「守ってあげたくなるタイプね」

「地球に生まれちゃったー」

次々と聞こえてくる喜びの声。最後の人は大げさだと思うけど……

「あー、騒ぐな。静かにしろ」

「み、皆さんお静かに。まだもう1人の自己紹介が終わってませんから」

織斑先生、山田先生に言われて静かになるクラス。そして大量の視線はもう1人の転校生に。銀髪の彼女は綺麗な髪をしているが、何より目を引くのは左目を隠す眼帯である。デュノアさんと違ってその雰囲気はまるで軍人って感じで、冷たい印象だった。

「……………」

黙ったままの転校生。本人はまるで周囲に興味がないような表情だった。

「挨拶をしろ、ラウラ」

「はい、教官」

織斑先生に言われて姿勢を変える転校生。織斑先生を「教官」って呼んだけど、何か関係があるのか？

「ここではそう呼ぶな。もう私は教官ではないし、ここではお前も一般生徒だ。私のことは織斑先生と呼べ」

「了解しました」

「もう教官ではない」に「ここでは」か。昔何かあったってことだよ。後で一夏に聞いてみるかな。

「ラウラ・ボーデヴィツヒだ」

その短すぎる自己紹介に固まるクラス。そしてこの空気にいたたまれなさそうな顔の山田先生。

「あ、あの以上……ですか」

「以上だ」

ばつさりと切り捨てられ泣きそうな山田先生。ボーデヴィツヒさんもボーデヴィツヒさんだけど、山田先生もしっかりしてください。先生は一応、年上ですよ。

ボーデヴィツヒさんは一夏と目があったかと思うと、一夏の方へ近寄る。

バシンッ！

そしていきなり一夏を殴った。え、一夏は何もしてないよね。

「私は認めない、貴様があの人の弟であるなど、認めるものか」

「いきなり何しやる！」

「ふん……」

一夏の抗議も鼻にかけずに戻っていくボーデヴィツヒさん。俺を含め、クラス中はポカンとしていた。一夏は何か心当りがあるようだけど。

「あー、ゴホンゴホン！ ではHRを終える。各人はすぐに着替え
て第2グラウンドに集合。今日は2組と合同でIS模擬戦闘を行う。
解散！」

手を叩きながら織斑先生は指示を出す。それによって一夏とボーデヴィツヒさんの事件で固まっていたクラスは動き出した。

「織斑と火野はデュノアの面倒を見てやれ。同じ男子だろう」

その指示がですぐに一夏と目をあわせ、頷く。

「君達が織斑君に火野君だよね。僕は――」

「ごめん、デュノアさん。このままだと大変だから！」

すぐさまデュノアさんの手を取り、走り出す。こうしないと大変なことになるから。

「とりあえず男子は空いてるアリーナ更衣室で着替え。これから実習の度にそこまで行くから慣れてくれ」

「う、うん」

走りながら一夏が説明する。デュノアさんは落ち着かなさそうだけど、今は気にしてる場合じゃないか。

「ああつ！ 転校生発見！」

「それに火野君と手をつないでる」

「どんどん辺りに集まってくる女子達。」「者ども出会え出会えい」
「つてここは江戸時代じゃないから。」

「きゃああ、生まれてきてよかった。お母さん、今年は母の日は河原の花以外のをあげるね」

「そこ、家族は大事にしようよ！」

「な、なに？ 何で皆騒いでるの？」

「そりゃ、男子が俺達だけだからだろ」

「……？」

「わからないって顔のデュノアさん。一夏が説明しようとしてるけど、もう行き場がないよ。」

「しまった。英治、どうする？」

「どうするって図作戦か、それとも」

「チラッと窓を見る。この高さなら俺は変身しなくても何とかかな。」

「一夏、ゴメン」

「「「え？」」」

一夏、デュノアさん、その他の皆が驚く。窓を開けただけなのに。

「一夏、織斑先生にフォローは入れとくから」

「おい、英治、待ってくれ」

一夏が何か言ってるけど気にしないで、デュノアさんを抱えて飛び降りる。

「キャアーーーーー」

やけに高い悲鳴をあげるデュノアさんが気になったけど、時間が大変だから、そのまま走り出す。

「ね、ねえ、降ろしてくれないかな？」

「あ、ゴメン。まあ、改めてよろしく、俺は火野英治。英治でいいよ」

「うん、よろしく英治。僕もシャルルでいいよ」

そのまま更衣室に到着。一夏は一々着替えるけど、俺は面倒だからって理由でISスーツは中に着ている。だから制服を脱いで着替え完了。上着をいきなり脱いだとき、シャルルが驚いていたけど何かあったのかな？

まあ、そんなこんなで無事、時間通りに俺とシャルルは授業に間に合った。でも、何か忘れているような……？

「英治さん。間に合いっただけですわね。……ところで一夏さんは？」

「あ！」

スパアン！

響きわたる出席簿が振り下ろされた音。結局遅れてきた一夏は叩かれた。ゴメン、一夏。フォローするのも忘れてた。

「ずいぶんゆっくりでしたわね」

「英治に囲にされて女子に囲まれてたんだよ。くっそー、英治のやつ」

「女子に囲まれてずいぶんお楽しみのお誘いでしたわね。そんなですから女子に叩かれるのですわ」

少々刺のある口調のセシリア。今回ばかりは一夏、ホントにゴメン。

「何？ アンタまた何かやったの？」

「こちらの一夏さん。転校生に会っていきなりはたかれましたの」

「はあ！？　一夏。アンタ何でそうバカなの！？」

「安心しろ。バカは私の前に2名いる」

バシーン！！×2

セシリアと鈴が反応するよりも先に降りおろされる出席簿。いつ
たい今日はどのくらいあれが降り下ろされるのかな？

気を取り直して始まる授業。鈴とセシリアは叩かれたことを根に
もっているのかブツブツと何か呟いていた。そんなことしていると、
また叩かれるよ。

「今日は戦闘を実演してもらおう。ちょうど活力が溢れんばかりの
十代女子もいることだしな。——鳳！　オルコット！」

織斑先生の指名に不満の声を上げる2人。諦めた方がいいと思う
けど。

「お前ら少しはやる気をだせ。——アイツにいいところを見せられ
るぞ」

「やはりここはイギリス代表候補生、わたくしセシリア・オルコットの出番ですわね！」

「まあ、実力の違いを見せるいい機会よね！ 専用機持ちの！」

織斑先生が何か言ったと思ったら途端にやる気を出す2人。先生、何言っただんですか。

ドガンー！！

突如響いた音の方向を向き、俺達は絶句した。なんと、一夏が山田先生を押し倒していたんだ。

「驚いたよ。まさか一夏が好きな人が山田先生だったとは……どうりで篠ノ之さん達に振り向かなかったのか、納得納得。あ、でもこんなところで押し倒すのもどうかと……」

「いや、英治、違うから！ これはただの事故だ！ 皆も何か言ってくれ」

「そう言われても……その体制じゃ……」

どんな体制かと言うと、一夏の手は山田先生のメロンのとこだね。いわゆるラッキースケベってやつ。

「ハッ！」

刹那、一夏は山田先生から離れる。そして一夏がいた位置をレーザーが通り抜ける。

「ホホホホ……残念です。外してしまいましたわ……」

顔は笑っているセシリアはライフルを再度構える。って止めなきやまずいんじゃない！

「うおおおっ！」

俺がそう思ってる間にも双天牙月を連結させ、ためらいもなく投げる鈴。あ、あれは当たるな。そう思っていたが、間一髪、一夏はそれをかわした。すごいな……って一夏、後ろ！

体制を崩してる一夏を襲うのはブーメランのように戻ってきた双点牙月。あれは冗談抜きでマズイって。

ドンッドンッ！

そう思ったのもつかの間。山田先生は両手でマウントしたアサルトライフルで双点牙月の軌道を変えたのだ。あの山田先生とは思えない行動だ、というかいつもからあれくらいしっかりしてればいいのに。

「山田先生はああ見えて元代表候補生だからな。今くらいの射撃は造作もない」

「む、昔のことですよ。それに代表候補生止まりでしたし……」

照れたように答える山田先生。まあ俺だって自分の過去のことと褒められることがあれば照れくさくなるけど。それにしても代表候補生ってことはセシリアや鈴達と同じかそれよりは強いってことになるよなあ、そう考えると山田先生が凄く思えてくる。ゴメンナさい、先生。頼りにならないかと思っちゃったりして。

それよりもよく考えれば俺の試験の相手は山田先生で、負けたんだった……

「さて小娘どもいつまで惚けている。さっさとはじめろ」

「え？ あの、2対1で……？」

「いや、さすがにそれは……」

「安心しろ。今のお前たちならすぐ負ける」

セシリアと鈴が物言いたそうな顔で言うが、織斑先生の一言に火がついたのか、急に闘志を燃やす。

「では、はじめ！」

「手加減はしませんわ！」

「さっきのは本気じゃなかったしね！」

「い、行きます！」

号令と共に飛び出す3者。専用機があり、数でも勝ってる2人の方が有利だと思っただけど……。

「さて、今の間に……そうだな。ちょうどいい。デュノア、山田先生が使っているISの解説をしてみせる」

「あ、はい」

山田先生が使っているのは確かラファール・リヴァイブだったな。俺の試験のときにも使ってたやつだし。シャルルの説明を程々に聞きながら、俺は3人の戦闘を見ていた。

セシリアがレーザーを撃つが、簡単にかわされて反撃をもらう。この隙に鈴が攻撃すればいいんだろうけど、鈴は鈴で攻撃をしてかわされ、反撃をくらう。

「ちよっ！ セシリア邪魔よ！」

「り、鈴さんこそ、わたくしの邪魔ですわ」

しまいにはお互いがお互いの邪魔になっている始末。そこ、ちゃんと協力しようよ。お互いに足を引っ張っているせいか、山田先生はノーダメージだった。あ、セシリアそちに動いたら鈴とぶつかるよ……って、遅かったか。鈴と激突したセシリアはそのまま動きを止め、2人まとめてグレネードでやられた。目をまわしながら落下する2人。結局、山田先生の完全勝利だった。性能が戦力の決定的差でないことがよくわかる戦いだったな。まあ、2人の連携が悪かったのが一番の要因だったけどね。

で、結局今日の授業は何するの？

金髪と銀髪と山田先生の実力（後書き）

我ながら中途半端なところで話を終わらせたな……

次回は授業の続き + α の予定です。

感想や要望等お待ちしております。

実習と貴公子と屋上（前書き）

C o u n t t h e m e d a l s

オースが使えるメダルは……

タカ

クワガタ

カマキリ

バッタ

ライオン

トラ

チーター

ゴリラ

実習と貴公子と屋上

「ぐぐぐぐつ……！」

「ぎぎぎぎつ……！」

山田先生との模擬戦の後、ずっとにらみ合ったままのセシリアと鈴。お互いに相手が悪いって言うてるけどどっちもどっちだったからな……

それにいつまでも話してると、ほら。

パシーンッ！

「いつまでにらみ合っている、馬鹿どもが」

頭を抑えてうずくまる2人。まあ、自業自得って言えばそうだけど……

「さて、これで諸君にもIS学園教員の实力は理解できただろう。以後は敬意を持って接するように」

セシリア達をにおかまいなく、パンパンと手を叩き織斑先生は続ける。

「専用機持ちは織斑、火野、オルコット、デュノア、ボーデヴィツヒ、それに鳳だな。では8人グループとなって実習を行う。各グループリーダーは専用機持ちがやること。いいな？ では分かれる」

織斑先生がそう言うやいな、女子が一斉に俺達男子の方に来る。

「織斑君、一緒にがんばろう！」

「火野君、わからないとこ教えて」

「デュノア君の操縦技術見たいなあ」

予想通りかな、やっぱり女子達は俺達を囲むように、いや、もう囲んでるか。シャルルはこうなるのを予測してなかったのかずつと「ふえ！」だの「え！」とか言ってる。なんか、女子に流されていきそうなのがするんだけど……

そんな男子の状況を見かねたのか、織斑先生は面倒そうに低い声で告げる。

「この馬鹿どもが……。出席番号順に1人ずつ各グループに入れ！順番はさっき言ったとおり。もたつくようなやつはISを背負ってグラウンド百週させるからな！」

途端に女子達は一目散に自分のグループに行く。多分、このグループになるのに2分もかかってないんじゃないかな。

自分のグループのメンバー（テンションが高い）を確認した後、俺は周りを見てみると、俺や一夏、シャルルの班になれて喜ぶ声、さっきの模擬戦のせいかわかりの声があがるセシリアや鈴の班。そして何も会話がないボーデヴィツヒさんの班、という状況になっていた。あそこの班、気まずそう……

「ええと、いいですかーみなさん。これから訓練機を1班1体取りに来てください。数は『打鉄』、『リヴァイブ』ともに3機です。好きな方にしてくださいね。あ、早い者勝ちですよー」

いつもよりしっかりした山田先生が告げる。さっきの模擬戦で自信でもついたのかな。

「火野君、ラファールのほうがいいな」

「うんうん、私もそう思う」

山田先生の戦いで印象がよかったのか、うちの班では満場一致でラファールを使うことになった。じゃあ、さっさと持ってくるか。

「さてと、誰からやる？ やることは装着と歩くとか簡単な動作をすることだけど」

「じゃあ、わたしからー」

最初はのほほんさんからか。えーと、確か装着の手伝いをしろ、とも言ってたな。

「主席番号1番！ 相川清香！ ハンドボール部所属！ 趣味はスポーツ観戦とジョギングだよ！」

「お、おう。ていいうかなぜ自己紹介を……」

隣の一夏の班から聞こえてきた自己紹介。何で？

「おりむー、人気だねー」

「まあ、数少ない男子だからね。って俺もだけど。じゃあ、やることやっちゃんおうか」

「わかったー」

とりあえず自分もISを展開しておくかな。そっちの方が色々と便利だろうし。

「タカ！　トラ！　バツタ！　タ・ト・バ　タトバ　タ・ト・バ！
！」

「じゃあのほんさんはどこまでできる？」

「んー、大体はできるかなー」

「じゃあ、やってm「「「お願いしますっ！」「」って何？」

声の方を見ると女子に言い寄られているシャルルが戸惑っていた。助け舟出した方がいいのかな。あ、織斑先生が向かった。じゃあ大丈夫かな。

スパーンツ！×3

「「「いったああっ」「」」

「ああはなりたくないから、皆、がんばろ」

俺がそう言うのとグループの皆はコクコクと頷いた。見ると一夏の班もまじめに行動しだした。ちなみにセシリアや鈴の班は着々と進んでいた。騒ぐこともないからかなあ。逆にボーデヴィツヒさんの班は静かすぎて進んでいない。あ、山田先生が向かった。

「あ、織斑君の班、いいなー」

「一夏がどうかしたの？」

見てみると、一夏の班はISを立たせたまま解除してしまったため、一夏が抱えていた。

「うらやましいかもしれないけど、あんなことしないでよ」

「「「うつ、善処します」「」」

その後、なんとか実習を切り抜けた俺はISを片付けることになった。ちなみに一夏の班は一夏任せで、シャルルの班は女子達が「デュノア君にそんなことさせられない」とか言われて、女子が運んでいた。俺は女の子に力仕事をさせるのはどうかなって思ったから自分でやることにしたんだ。

「じゃあ、こういうときはこれだな」

『タカ！ ゴリラ！ バッタ！』

ISを使えば元々楽なのにさらにパワー型のタカゴリバであるために大した苦もなかった。

「あー。あんなに重いとは……」

俺が訓練機の置き場に来ると俺より結構先にISを運んでいた一夏が座り込んでいた。

「一夏、どうかした？」

「いや、これってすっげえ重いな……って…」

俺を見て声が小さくなっていく一夏。なんか「ISを展開すればよかったのか」とかブツブツ言ってるし。

「まさかとは思うけど、そのままカートを引いてたの？」

「おう、てっきりそんなものかと思ってたからな……」

「ハハ。ま、まあ昼休みだし、さっさと着替えてご飯にしようよ」

「そうだな。英治、今日は屋上で飯にしようぜ。シャルルも誘って」

「うん、いいけど」

なんか一夏は今日弁当があるらしい。じゃあ俺は購買行ってから行くかな、シャルルと。

「お、シャルルだ。おい、シャルル。着替えに行こうぜ。俺達アリーナの更衣室まで行かなきゃいけないしよ」

「え、ええつと……僕はISの調整をしてから行くから。時間がかかるかもしれないから先に行ってて」

「いや、別に待つのは慣れてるから大丈夫だぞ」

「い、いいからいいから！ 僕が平気じゃないから。ね？ 先に教室で待つてて」

シャルルの妙な気迫に押されて一夏は頷いた。シャルルのあわてつぷりはなんか不自然だけど、ま、いつか。

「じゃあ、シャルル後で」

「う、うん」

「お待たせ。あれ、一夏は？」

昼休み、アリーナから戻ってきたシャルルがそう告げる。

「一夏は先に屋上に行ってるって。じゃあ俺達も早く行こうか」

「うん」

「ねえねえ、あの子だよ。今日来た男子ってのは」

「え、ホントだ」

さっそく購買に向かう俺達だけど、第3の男子ということだろうか、周りの女子達の視線が怖い……

「ねえ、私達とお昼食べよ」

「あ、ずるーい。私達と食べようよ」

……予想通りなのかな。争奪戦とばかりに集まってくる女子達。先約があるから断つてもキリがないなあ……。俺がそう困っているとき、不意に聞こえてきたのが……

「僕のようなものために咲き誇る花の一時を奪うことはできません。こうして甘い芳香に包まれているだけで、もうすでに酔ってますから」

声の主であるシャルルは、何て言うかな、そう、お世辞っぽくない感じだった。まるで本心からみたいに。一方シャルルにそんなことを言われた人達は、というと……って、流血！？ 血を流しながら倒れてる人がいっぱい……。リボンの色からだと大半は3年生みたいだけど、何があったんだ。

「ちょ、大丈夫ですか!？」

一番近くに倒れていた人に呼びかけてみる。もしかして新手の病気が何かかもしれない。

「……うーん、幸せ……」

そういい残し、幸せそうな顔で気絶した。他の人もそうだけど流れている血は鼻血で、シャルルの一言に興奮したみたいだった。気絶してない女子達は今の一言に恥ずかしそうな表情で引き上げていった。

「シャルル、凄いね。ああいうこと言えて。俺にはできそうにないよ」

「……予想以上に効いちゃったけどね」

気を取り直して購買でお昼を買って、屋上に向かう俺達。そこで目にしたのは……修羅場だった。どういう状況かというと、篠ノ之さん、セシリア、鈴が自作の弁当を持って一夏に迫っている光景だった。

「ねえ、英治。僕達、ここに来てよかったのかな？」

「うーん、確かにそんな気はするけど……まあ、一夏が誘ってくれたんだから、行くだけ行ってみない？」

「英治、シャルル。思ったより遅かったな。何かあったのか？」

「いや、シャルル珍しさに女子が集まってきただけだよ」

そう言つと、一夏は納得した顔で頷いた。一夏も最初はそうだったから思うことがあるんだろう。俺もだけど。

「……どういうことだ」

「ん？ 篠ノ之さん、何か言った？」

「い、いや、何でもない」

何か言つてたけど、本人が何でもないって言うならいいか。そんなこんなで雑談、というか、篠ノ之さん達から文句を言われる一夏

を見ながら昼休みを過ごした。わかったことと言えば、篠ノ之さんと鈴は料理ができて、セシリアは……

「さてと、じゃあ英治、シャルル。次の授業の準備に行こうぜ。今度は第1アリーナに行かなきゃいけないからな」

次の授業はかなりの距離を移動しなきゃいけないから、そろそろ行かなくちゃ。そう思って立ち上がった瞬間、携帯が鳴り響いた。

「はい、火野です」

「私だ、織斑だ。突然だが、お前に頼みたいことがあるんだが、いいか？」

「はい」と答え、話を聞く。どうやらIS学園付近で怪人がたみたい。で、その調査をして欲しいらしい。断る理由もない俺は返事をした。

「一夏、ちょっと俺は用事ができたから」

「え、ああ。授業はどうするんだよ!？」

「大丈夫だよ、織斑先生からの頼みだから」

一夏にそう告げた俺はライドベンダーの所に行く。目撃現場は少し距離があるみたいだから。

実習と貴公子と屋上（後書き）

次回から仮面ライダー的な展開が多くなる予定です。まあ、グライダーではないですが、メダル争奪戦をしようかなということ。そのために『W』をクロスさせているのですから。

農と指揮官と野獣（前書き）

C o u n t t h e m a d a l s

オーズが使えるメダルは……

タカ

クワガタ

カマキリ

バッタ

ライオン

トラ

チーター

ゴリラ

農と指揮官と野獣

「……ここか、怪人を見たって人がいるのは……」

特に変わったところはなさそうだな。とりあえず、怪人を見たって人がこの辺りにいるらしいから、その人から色々と聞くのがよさそうだな。そう思って歩くこと少し、40歳くらいのスーツを着た男性を見かけた。多分、あの人だろうな。

「すみません、この辺りに怪人を見たって話があったんですけど、何か知ってますか？」

「ん、ああ。怪人なら確かに私は見た。この近くにはIS学園があるから、そこを狙ってるかもしれないからね」

男の人の言い方はまるで一夏が狙われているような口調だった。確かに一夏は世界的に有名な織斑先生の弟で、ISが使える男。狙われる可能性は十分にあるはず。学園に戻った方がいいのかもしれないな。

「そうですか。じゃあ俺はこれで」

「ふむ。ところで少年。この世界をどう思っかね？」

「……どう、とは？」

「力を持たない、いや、力を持つことができない男が虐げられ、ごく一部しか力を持つ者はいないのに偉そうにできる女。ISとは必

要なものなのか、ということだよ。力を持つ少年」

ISは必要なものなのか、か。この世界に来てみてそれなりに経ったけど、そんなこと考えたことはなかったな。

「……今のは忘れてくれて構わんさ。そろそろ本題に入ろう。火野英治君」

刹那、身構える俺。この人の雰囲気から何か大変なことを起こそうとしているのがわかる。

「率直に言うと、君に協力してほしいのだよ。我々財団は君の持つメダルに興味を抱いていてね、それを提供してほしいのだよ」

狙いはメダルか。もしかすると俺を呼ぶために敢えて嘘の怪人の情報を流したのかもしれない。

「お断りします。貴方達のような人にこのメダルは渡せませんから」

「フフ、予想通りの回答だ。だが、本来の我々の目的は織斑一夏の生け捕り。私の任務としては君を織斑一夏から引き離すことなのだよ」

その答えを聞き終える前に走り出そうとする。だが、俺はすぐ从这里から離れられない理由ができてしまったのだった。

『COMMANDER』

その音声と共に、男はUSBメモリみたいなものを腕に挿し込んだ。瞬間、みるみるうちに男の姿は異形の怪物に変わっていく。

「いいのかな。私のような怪人を放っておいて」

周りを人質に取られた俺はこの怪人を放っておくわけにはいかなかったから。

「くっ、やるしかないのか。変身!!」

『タカ! トラ! バッタ! タ・ト・バ タトバ タ・ト・バ!』

構えを取ると同時に走り出す。相手の右ストレートをはい、左拳を繰り出すが、つかまれる。

「はあああああああ」

膠着も束の間、バッタレッグに力をこめ、蹴り飛ばす。相手が転がると同時に後ろに跳び、距離を取る。

「やはり君は厄介な存在のようだな。財団としてはガイアメモリからは手を引いたのだが、君やISを相手にするとなると必要になるものだな」

怪人、コマンダードーパントはそう言い、左腕にある円形のディスプレイのようなものに手をかざす。その瞬間、ドーパントを囲むように兵士のような怪人が数体、姿を表す。仮面兵士達は警棒を取り出し、こちらに走り出してくる。それに対して俺はメダジャリバーを構える。

「はあ、セイッ!」

正面から来る敵を袈裟懸けに斬り、次に来たのを蹴り飛ばす。仮面兵士は1体1体は大した強さじゃないけれど、数が多い。しかもドーパントは無限に召喚できるから、この状況が続けば、絶対にこっちがやられる。どうにかしないと。そう思った俺は、メダルを変えることにした。

『タカ！ カマキリ！ チーター！』

タカキリターとなつて、兵士達の間をすれ違いざまに切りながら駆ける。火花をあげながら転がる兵士達は消滅するけど、そっちには目もくれずに、怪人へと一直線。両腕の刃で、その体を切り裂いた。

「くっ。やはり一筋縄じゃいきませんね。こちらもちり札を使う必要ありますか。それに向こうにもそろそろ到着した頃でしょう」

口元を拭うような動作をしながら、ドーパントは立ち上がる。そして、小型の機械を取り出した。

「先程までのように思わない方がいいですよ」

『COMMANDER UPGRADE』

その何かを自身のガイアメモリに取り付けたとき、背中には機械的な輪が装備された。

「では、それでも」

背中から放たれた大量のミサイルがオーズを狙う。俺はそれをよ

けようとしたけど、行動を起こすのが遅かった。ミサイルは広範囲に撃たれていて、チーターの速さでも安全圏には逃げ切ることはできなかった。

「ぐわああああああああ」

英治が調査に行った後、IS学園では授業が行われていた。それは反対意見があったものの、余計な不安を与えないための措置だった。

「ねえ、一夏。英治ってどこに行ったの？」

「さあ。千冬姉の頼みがあるってどこかに行ったけど、俺も詳しくは聞いてないな」

一夏とシャルルは格納庫で話していた。午後の授業はISの整備。専用機をもたない生徒達は午前中に使った学園のISの整備を行なっていく。専用機持ちである彼らは学園のものだけでなく、自分のISも見るように言われていたが、自身の愛機のこととは自分が分かっているし、慣れた作業でもあるため一夏以外は余裕ができたのだった。

「英治さんのことですから、その、仮面ライダー絡みのことですか？」

「ああ。そうかもしれないな。だとすると、英治は大丈夫か」

昼休みに出てってから戻らない英治の行方を気になっていた一夏はセシリアの一言に納得の声をあげる。

「大丈夫じゃない？　あたしは英治が変身したの見たことないけど」

会話に鈴も加わる。この受業は2組と合同のため、彼女もいるのだ。この場所にいない英治、一夏達と親しくないラウラ以外の専用機持ちはこの場に集まっていたのだ。ただ1人、会話の内容についていけない者がいたが……

「ええっ！？　英治って日本で有名な都市伝説の仮面ライダーなの！？」

会話についていけないでいたシャルルが声を荒らげる。その声を聞いた銀髪軍人が部下にそんなことを言ってたやつがいるな、と思ったがくだらないと思い、一蹴した。

「お、おう。英治は仮面ライダーだぞ。というか、仮面ライダーって外国でも有名な話だったのか……」

「ええ、わたくしも噂くらいは聞いたことがありますわ。確か、どこかの街によく出るとかって」

「ああ、それ風都よ。あたしが日本にいたとき、一夏と行ったことがあるのよ」

鈴の発言を聞き、一夏はそのことを思い出す。

（中2の夏休みに花火を見に行ったんだよな鈴の両親が連れてってくれるって言ったから千冬姉もOKしてくれたんだったな）

そう思ったのも束の間、シャルルのアドバイスの元、白式の整備を進めていく。

「では、ISの整備はここまでとする。諸君は教室に戻るように」

各グループがノルマを達成したのを確認した千冬は指示を出す。それを皮切りに次々と教室に向かう。一夏達も教室に戻ろうと、歩き出したのだった。

「お、織斑君！ 早く逃げてください！ IS学園内に怪人が！」

後ろから来たのは息も絶え絶えの山田先生。一夏は状況もちゃんと理解する間もなく、山田先生に手を引かれていく。そしてそれについていくシャルル達。

「怪人ってどういうことですか!？」

走りながら一夏は聞く。山田先生は教えるべきかどうか、少し考えて後、告げることにした。

「つい、さっき、学園内に侵入者が出たんです。先生達が何人か向かったのですが、侵入者は怪人に姿を変えて逃げ出したんです」

教員達は学園のISを使用して追撃をしたが、大したダメージも与えることもできず、野獣のごとき動きに次々と撃墜されていたのだった。

「おい、ガキ。友達の命が惜しければ大人しくこっちに來な」

突如、壁をぶち破って現れた怪人は一夏を見て言う。それを見たセシリア、鈴、シャルルはすぐさまISを展開して攻撃を仕掛ける。ブルー・ティアーズのスターライトMk-?、甲龍の龍砲、シャルルのIS『ラファール・リバイブ・カスタム?』のアサルトライフ ルヴェント が火を吹いた。それぞれの銃弾は怪人にまっすぐ当たり、爆発を起こす。

「やったのか!？」

遅れて白式を展開した一夏は呟いた。そんな様子の一夏とは違い、代表候補生3人はこれで倒しきったとは思わず、真剣な眼差しで煙の中を見ていた。

「はっ、少しは効いたじゃねえか。まあ、嬢ちゃん達に用はないんだ。そこの織斑一夏を引き渡せば素直に帰ってやるぞ」

煙からでてきた怪人、ビーストドーパントは傷だらけではあったが、瞬時に傷を治し、セシリア達と向き合う。

「な、マジかよ……」

「傷を一瞬で治したっての、コイツは!？」

「とにかくやるしかないですわ。一夏さん、ここは私達が時間を稼ぎますわ」

「うん、だから一夏は早く逃げて!」

「デュノア君に、オルコットさん、鳳さん、危険過ぎます。早く逃げてください！！」

山田先生は戦う意思を見せる3人を説得するが、聞く気はなかったようだ。

「何言ってるんだ！！　アイツが俺を狙うてなら、俺が残るから皆こそ早く逃げる」

全員の意見が行き違う中、痺れを切らしたビーストドーパントは爪を突き立てた。

「俺は織斑一夏を連れて帰ればいいんだ。全員でかかって来てもいいんだぜ」

そう言ってビーストドーパントは駆け出した。

「「させませんわ！／やらせないよっ！」」

シャルルとセシリアはすぐさま銃の引き金を引く。レーザーと実弾、2種類の弾丸がビーストドーパントに直撃するが、相手はビクともしないで、一夏に向かって前進を続ける。

「だからやらせないって言うてるでしょうが！」

爪と青龍刀、つばぜり合いになる鈴とビーストドーパント。だが、ドーパントは甲龍のパワーをもとめせず、そのまま押していく。

「なんてパワーなのよ、コイツは！」

弾かれた鈴はそのまま距離を取る。その間にもビーストは一夏に近づいていく。

「このままでは不利ですわね。一夏さん、壁を壊して外に！」

屋内であるここではISの利点、飛べることが活かせないため、3人はビーストが入ってきた箇所から外に行く。セシリアの忠告に頷いた一夏も近くの壁を壊し、セシリア達と上空で合流する。

「で、どうするのよ？ 肝心な時に英治がないみたいだし……」

「アイツの狙いは俺なんだ。だから俺がここに残って奴の気を引くのが一番だろ」

「一夏、何言ってるの！ 一夏を放っておくわけにはいかないよ」

「そうですね。それにわたくし達がここから逃げると、他の皆さんが狙われる可能性がありますわ」

話し合いの末、折れたのは一夏であり、皆でビーストと戦うことになった。そうは言っても、一夏の白式はブレードしか武装がないため、セシリア、鈴、シャルルが作った隙に攻撃をし、距離を取るヒット&アウェイの戦法を取ることにした。

「ぐわあああああああ」

コマンダー同様に強化された仮面兵士の警棒が突きたたる。それから流れ出す電流に俺は苦しんだ。変身が解除されて、膝をつく。結構、ヤバいなあ……

「くっ、何だ、こっちも急に強くなって……」

あのミサイルの後、立ち上がった俺を待ち構えていたのは、また召喚された兵士達だった。でも、召喚主が強くなっていたからか、兵士達も強くなっていて、俺は苦戦していたんだ。

「そろそろ、君のトドメといこうか。君が倒れた後、そのメダルは有効に使わせてもらうよ」

「まだ、諦めるもんか……手が届くのに伸ばさなかったら後悔する、だから、できる限りでもいい、俺は、諦めない」

敵の数が多いなら、コレしかないな。手にした3枚のメダルを見て、俺はそう思った。それに、俺がここで倒れても学園には仮面ライダーはもう1人いるから。

ドライバーの両端に緑色のメダルを入れて、真ん中にも緑のメダルを入れる。そしてオースキャナーを手取る。

「うわぁあああああ」

「一夏っ！」

同時刻、一夏達もビーストに苦戦していた。連携でビーストを追い詰めるところまではよかった。だが、ビーストの回復力を上回る攻撃がないのが決定的となってしまった。ISが相手なら最大の攻撃力を誇る白式もドーパント相手では十分に力を発揮できなかったのだ。一夏の一撃は簡単に掴まれ、お返しにと重い一撃を食らったのだ。解除される白式。倒れ込む一夏。彼に少しずつ近づいていくビースト。

「くそっ、ここまでなのかよ」

「そんなことはないぜ」

「くくく！」「くくく」

その場にいた誰もが、新たに現れた声の主の方を向いた。

「よっ、助っ人ってわけだな。後は俺に任せな」

見たことのない男の登場に誰もが不思議な顔をする。だが、男はそんなのを気にした様子もなく、ビーストの方を向く。

「あ、アンタは、誰なんだ？」

「ま、火野の仲間みたいなやつだな」

男、伊達明は慣れた手つきでドライバーを装着、右腕で弾いたメ

ダルを掴む。

「「変身!!」」

『クワガタ！ カマキリ！ バッタ！ ガタガタガタキリッバ！
ガタキリバ!!』

違う場所にいるはずなのに2人の変身は同じタイミングだった。
英治は歌と共に、昆虫系グリードのコアメダルによるコンボ、オ
ーズガタキリバコンボに。
伊達はカポーンという音と共に、セルメダルの力で戦う、バース
となる。

2人のメダルの戦士がここに参上した。彼らは自分の守りたいも
のを守ることはできるのだろうか。

農と指揮官と野獣（後書き）

次回、ガタキリバ無双の気が……（笑）

黒幕的ポジションが財団Xだっというのは、W最終回付近で、ファンサービスの出てきたコアメダルが理由つてのは口が裂けても言えないぜ。まあ、財団はISのあの企業とも上手く絡めれると思っただのもありますけど。

感想、意見等お待ちしております、いや、ください（笑）

数の暴力と足止めと弟子入り（前書き）

C o u n t t h e m e d a l s

オースが使えるメダルは……

タカ

クワガタ

カマキリ

バッタ

ライオン

トラ

チーター

ゴリラ

数の暴力と足止めと弟子入り

「うおおおおおおお！！」

雄叫びを上げる、俺。やっぱコンボは体に力が溜まってくるなあ。

「ふん、今更姿を変えようともこの数には勝てまい」

そう言って相手は数十体の仮面兵士を召喚してくる。でも、このコンボなら数では負ける気がしないな。近寄ってくる仮面兵士に向かって俺も走りだす。進む度に1人、また1人と俺は分身していく。

「はあ！！」

降りおろされた警棒ごと敵を切り裂くものもいれば……

「セイヤツ！！」

相手が攻撃する前に先手必勝とばかりにミドルキックを放つやつもいる。

「ば、バカな……こんな情報、聞いてないぞ」

啞然とするコマンダーをよそに、ガタキリバと仮面兵士の乱戦は熾烈を極めていた。あちこちで繰り広げられる攻撃の応酬。火花が飛び散り、殴られ、蹴り飛ばされ宙を舞う仮面兵士達。ものの数分もしないうちに仮面兵士の数はかなり減っていた。

「くっ、これでどうだ!!」

ドンッ、ドンッ!!

放たれたミサイルはあちこちに着弾し、黒煙をあげる。分身も何体か吹っ飛ばされたけど、まだ、大丈夫。

「うおおおおお」

煙の中から走り出す影は3つ。1人目、2人目は両腕の刃で相手を切り裂き、3人目はよろめいた隙に飛び蹴りを当てた。そしてコマンダーが転がっていった方に残された仮面兵士も吹き飛ばされてく。

「くそっ、まだだ、まだ終わらんよ!!」

そう言うコマンダー。だけど、かなりのダメージを受けたようで、何度も立とうともがくけど、立つことはできなかった。

「悪いけど、これできめるから」

何十もいるガタキリバはコマンダー達を囲み、一斉にオースキヤナーを手にする。

『スキヤニングチャージ!!』

「はあああああああああああ」

何重にも重なった電子音声と一緒に飛び上がるガタキリバ。

「セイヤー—————!!」

相手に断末魔をあげさせることもなく流星群のように、ガタキリバキックが叩き込まれていく。自分でもやりすぎかもしれないと思うけど、友達のピンチだから。

爆発を背に1人に戻るガタキリバ。ちゃんと1人に戻った。

「さてと、一夏のところに……」

フラッ、そういう感じによるめく俺。久々にこれやったからかなあ、座り込む。最初に使ったときは倒れたんだっけ。

「……って、昔を思い出してる場合じゃないでしょ」

そう思ったから、ライドベンダーを一端自販機の方にして、赤い缶と緑の缶をいくつか出す。プルタブを開けると、赤いのはタカに、緑はバッタのになる。

「じゃあ、一夏と伊達さん、それから織斑先生のところよろしくね」

通信器として使えるバッタカンとタカカンに運ばせる。もちろん、自分の手元にも1つバッタカンを残すのを忘れないで。

「じゃ、俺も急がないと」

ライドベンダーをバイクの形態にして、アクセルを切る。皆、無事でいてくれよ。

「仮面…ライダー？」

伊達が変身したバースを見て一夏は呟いた。

「おう。仮面ライダーバース。ヨロシク」

一夏に向かってサムズアップをした後、バースはビーストと向き合う。

「さあて、いっちょ始めますか」

構えたバースバスターの引き金を引くが、相手はそれをよけ続ける。

「もらったぁ！」

「おおっと」

ビーストの一撃を転がってかわし、バースバスターを撃つ。怪人と戦うための武装であるためか、与えたダメージはISのものより大きいのは一目瞭然だった。

「がっ……少しは効いたぜ。だがよ、この程度！」

すぐさま回復するビースト。バースは「げっ！」と声をあげるが、すぐに気を取り直して銃を構える。

「これでもくらってな！」

再度、連射するが、楽に回復できるダメージだとわかったビーストはそのまま前進してバースバスターを弾き飛ばした。

「コイツ、すげえパワーだな」

「って、何呑気なこと言ってるんですか！！」

関心したような口調のバースにすかさず突っ込みを入れる一夏。バースは「わりい、わりい」と謝るような仕草をするのだった。

「コイツで頼むぜ」

『シヨベルアーム』

バースの左腕に装着されたそれは、バースの武器の中で最大のパワーを誇るため、怪力のビーストに対しては最も適した装備なのであった。

「フン、何を使ったって無駄だぜ」

そうとも知らずにビーストはバースに接近。拳を繰り出そうとするが、シヨベルアームのクローに掴まれる。

「おりゃあああああああ」

そのまま掴んだ腕を軸にビーストを振り回すバース。そして、そのままビーストを地面に思いっきり叩きつけるのであった。さすがにコレは効いたのか、空気を吐き出すビースト。だが、持ち前の生

命力によって再び立ち上がるのであった。

「こりゃ、もうアレしかないな。おい、嬢ちゃん達！ とっておき使うからコイツの足止めしといてくれ」

「「「え!?!」」」

「頼んだぜ」

セシリア達の返答を聞く間もなく、バースはメダルをベルトに入れていく。

『プレストキャノン』

『セルバースト』

「もういっちょ!」

『セルバースト』

「ああ、もう！ やるしかないわね」

「わかりましたわ。シャルルさんもよろしいですわね?」

「うん、大丈夫」

シャルル達はすぐさま、銃の引き金を引き、次々とビーストに銃弾を浴びせていく。レーザーがかすめ、衝撃砲が相手を弾き飛ばす。追撃にと、アサルトライフルが浴びせられる。

「ぐ、がつ！」

与えられるダメージは大したことはないのだが、連続攻撃に回復に専念してしまうビースト。

「まだまだあ！」

『セルバースト』

鈴達が攻撃を浴びせていく間もバースはセルメダルを入れ続ける。そんな様子を見た一夏はISが解除されている自分にもできることはないのか周りを見回す。

「あれは！」

一夏の目に映ったのはすぐ近くに飛ばされていたバースバスター。皆を守りたいと願う彼はすぐさまそれを手に取り、引き金を引く。

「うわああ！」

「ん、があああ！」

反動に弾き飛ばされる一夏だが、放たれた弾丸はビーストの顔面に命中し、その動きを妨げるのに充分に役に立ったのだ。

「よし、サンキューな」

セルメダルを何枚も入れて、かなりのエネルギーを貯めたブレストキャノンを向ける。ビーストは一夏の一撃の当たりどころが悪かったのか、足を止めていた。

「ブレストキャノン、シュート！」

「ん、があああああああああ」

バースが後ろに押される程のエネルギーの流れに飲み込まれたビーストは断末魔をあげ、爆散する。

「ふう、終わった。お！」

変身を解いた伊達の元に飛んでくるタカカン。タカカンは上空で旋回して、伊達の手元にバッタカンを落とす。

『伊達さん！ そっちに怪人が出ませんでしたか！？』

「おう、そいつなら今さっき倒したとこだ。見たところ皆無事のようだぜ」

『そうですか。よかったあ』

伊達と英治が話している頃、一夏の元にもタカカンが来たが、一夏はバッタカンの使い方が分からず四苦八苦していたのだった。

「改めて、バース装着者兼ここの保健室の先生の伊達明だ。ヨロ

シクな」

「……「はあ」「……」

戸惑う一夏達をよそに伊達は話を続ける。英治も合流して一行は保健室に来ていた。

「一夏ちゃんだっけ？ お前も相当な無茶するやつだな。いきなりそれを使うなんて」

「あ、アハハハ……すみません」

「ま、気にすんなよ。おかげで相手に好きができたからな」

伊達はそう言ってその時のことを思い出す。皆を守ろうとして行動する姿勢、目。行動が無茶であると言えばそうだが、誰かがしっかりと鍛えればまっすぐ育つ。伊達はそう思った。

「お前ならコイツを託してもいいかしんねえな」

「コイツ、ですか？」

「おう、一夏ちゃん。俺が鍛えてやろうか。ISじゃないけれどな」

伊達は続ける。お前は怪人にも狙われる可能性もある。今回は自分がいてよかったけど、いつもそうとは限らない。一夏自身が怪人に対抗できる力があつた方がいい、と。

「……お願いします！ 俺を鍛えてください」

少しの間の後、一夏は答えた。誰にも傷ついて欲しくない。英治と同じような願いを持つ一夏は自分のせいで誰かが傷つくのは嫌だったからであろつ。

「OK。じゃあまずはコレからだな」

取り出したのはバースバスター。

「それって伊達さんの武器じゃ？」

「気にするな、一夏ちゃん」

伊達の武器がなくなる。そう思つて一夏は聞くが、首を横に振られた。

「伊達さん、まさか……」

「おう。火野の思つてる通りだ。コイツもベルトも2つあるからな」

「ベルトが2つってことは一夏さんも変身するんですの？」

「え、一夏が……」

セシリアと鈴。一夏に恋する少女はその光景を思い浮かべる。自分がピンチになったときに颯爽と現れ、敵を倒し自分を守ってくれるヒーローを。

「……はふう／＼／」

「ど、どうしたんだ、2人とも」

「さあ。急に悶え出したけど、何を考えたんだろう？」

「まあ、そっちは大丈夫だ。じゃあ一夏ちゃん、今日はゆっくり休みな。特訓のことは後で教えてやる」

「はい！」

気のいい返事をした一夏は皆と一緒に寮に戻ることに。今回の件の報告等は本人達の疲労も考えて後日に回されたのだ。保健室にいたのも念のための診断だったからもある。

途中でセシリアと鈴と別れた一夏、英治、シャルルは自室に戻る途中だった。ちなみにシャルルは英治がいる方の部屋が割り当てられたのだった。

「うーん、皆を守りたいと思うけど、俺にできるのか？」

「大丈夫だよ。一夏が皆を守りたいって想いをなくさない限りは」

「僕もそう思うよ。それに初めから後ろ向きじゃできることもできないよ」

「英治、シャルル。ありがとな。俺、頑張るよ」

頑張れよ、一夏の欲望は一夏にしか叶えられないから。

数の暴力と足止めと弟子入り（後書き）

自分で書いていて、これがISとのクロスものと忘れそうな回だった（笑）

とりあえず、伊達さんと一夏が接触。これがやりたかったことの1つですね。まあ、伊達さんを出すにあたり、後藤さんポジが欲しかったからもありますけど。今後の一夏は予測がつくと思いますが、念のために『バーズはずつと伊達さんでいきますから』

意見、感想等お待ちしております。

シャルル先生と挑発と危ない疑惑（前書き）

C o u n t t h e m e d a l s

オーズが使えるメダルは……

タカ

クワガタ

カマキリ

バッタ

ライオン

トラ

チーター

ゴリラ

シャルル先生と挑発と危ない疑惑

シャルルが転校してきてから、数日。シャルルも一夏のISの特訓に付き合うようになっていた。一夏の動きは日に日によくなっていくのがよくわかる程だった。多分、シャルルのわかりやすい説明と、伊達さんとの特訓により体力がかなりついてきたのが理由だと思っただ。まあ、そんなこんなで今日もISの特訓ってことでアリナに来ていた。

「ええとね、一夏がオルコットさんや鳳さんに勝てないのは、単純に射撃武器の特性を把握していないからだよ」

「そ、そうなのか？ 一応わかってるつもりだったし、伊達さんは感覚でやっていけって言うってたんだけど……」

今日もシャルル先生の講義が開かれていた。俺も一夏も射撃武器はないからね。どうしても把握できないところはあるからね。厳密に言つと、遠距離攻撃（クワガタの電撃e t c）が可能な武器はあるけど、銃火器じゃないからわからないんだろうな。

「瞬時加速の場合は方向を変えない方がいいよ、最悪の場合は――」

シャルルのレクチャーは続く。一夏が言うにはシャルルの教え方が一番わかりやすいんだって。まあ、擬音だらけの篠ノ之さん、理路整然とはしているんだけど、イメージしづらいセシリア、「何となく」とか「感覚で」等の鈴。それと比べてm……比べなくても教え方は上手だな。あの3人もシャルルの教え方は上手いって認めているんじゃないかな？

「ふん。私のアドバイスをちゃんと聞かないからだ」

「あんなにわかりやすく教えてやったのに、なによ」

「わたくしの理路整然とした説明の何が不満だと言うのかしら？」

あれ、すつごく納得していないって顔だよ。一夏もわからないならはつきりそう言った方がいい時だってあるのに。

「一夏め。どうして幼馴染の私ではなく、デュノアなんだ」

「ちよつと待ちなさいよ！ 一夏の幼馴染はあたしよ！」

「お、幼馴染だからって一夏さんのコーチになる理由はありませんわよ！」

気が付けば、打鉄VSブルー・ティアーズVS甲龍に……って、こんな人が多い場所じゃ戦っちゃ駄目でしょ！ 俺、一夏、シャルル、と男子3人見たさで来てる人が多いんだから。一夏なんてさっきから何回も周りの人とぶつかってるんだし。

「ちよつと、ちよつと、3人とも、落ち着いてよ！」

「む、英治か。なぜ止める？」

「そうですね、邪魔しないでくださるかしら？」

「邪魔するんだったらあんたも相手にしてあげるわよ」

視線だけで人が殺せる世界だったら何人も殺せそうな目で俺を見
てくる3人。だから落ちついて言ってるでしょ！

何とか説得の末、3人の正面衝突は避けれたんだけど、問題が1
つできたんだ。それは……

「こうなったら誰が一番一夏さんのコーチに適しているのか英治さ
んに選んでもらいましょう」

「いいわ。あたしが勝つに決まってるんだもの」

「そんなわけではないだろう。私が一番だ。一夏との訓練も一番長く
やってるからな」

自分が一番だと思い込んでる3人娘。これっではつきり言ってい
い場合だよね……。

「俺はシャルルの教え方が一番上手いと思ってるけど……」

「「「な!?!」」」

絶句する3人。すぐに再起動して「それはどういうことだ」とか
「納得のいく説明を要求しますわ」等言いながら俺を揺さぶって
くる。ブンブンって音がするほど振られたからかなあ、気持ち悪くな
ってきた。ウプツ……。

「そ、そんなこと言うならお互いの説明を聞きあってよ。そ、それ
から……そろそろ離してくれないかな……」

「「「あ」」」

ボタンッ！

ゲホゲホ、死ぬかと思った。とりあえずお互いの説明を聞きあっていた篠ノ之さん達は再度衝突していた。

「篝さん、あなたの擬音だらけの説明では全くわからないですわ！」

「そういうセシリアのだって、具体的過ぎてイメージしづらいのよ」

「だったら鈴のだって、感覚だの、で伝わらないぞ」

いつの間にか名前で呼び合う仲になってたみたいだけど、こうなったらどうしようもないや。そう思っていた俺に話しかけてきたのはシャルルだった。

「ねえ、英治。英治のライドオーズにも射撃武器は無いんですよ。
アンロック
使用承諾したから英治もやってみて」

「わかった」

そう言つて渡されたアサルトライフルを構えてみる。オーズの時も銃持ったのはあのコンボだけで、しかも必殺技のときしか使わなかったからかな。慣れない感じだ。

「構えはいいね。じゃあ撃ってみて」

だれもない方に向けて、引き金を引く。「バンッ！」って音がしたけど、思った程の反動じゃなかったなあ。続けて2発、3発と撃つ。うん、こんなもんかな。銃の感覚を掴めた気がしたからシ

ヤルルに銃を渡す。ライドオーズも後付武装がないし。

「どう?」

「ん〜、まあ、思ったより反動がないっていうかな。そんな感じだよ」

「ISで撃つからじゃないかな。どうしてそんなことを思ったの?」

高威力のバズーカを使ってたから、とはさすがに言えないよなあ。そう思ってここは言葉を適当に濁しておくことにした。

「ねえ、ちょっとアレ……」

「ウソっ、ドイツの第3世代機だ」

「まだ本国でのトライアル段階だっけ聞いていたけど……」

銃の話からシャルルのISについて話していたとき、急にアリーナが騒がしくなったんだ。何があったのか気になって、女子達の視線の先を見ると、黒いISを纏っているボーデヴィツヒさんだった。

「おい、貴様も専用機持ちだすだな。ならば話は早い。私と戦え」

俺も含めた周りの人間は眼中にないって感じに一夏に告げるボーデヴィツヒさん。一夏は理由がないから断っている。

「貴様にはなくても私にはある」

一夏を睨みながらボーデヴィツヒさんは言った。理由があるのか、どんな理由だろ？

「貴様がいなければ教官が大会2連覇の異形をなしえただろうことは安易に存在できる。だから、私は貴様を——貴様の存在を認めない」

ボーデヴィツヒさんの言う教官って織斑先生のことだね。大会2連覇は一夏がいたからできなかった。ってことは一夏に何かがあったからその大会で優勝できなかった。でも、それがどうしてボーデヴィツヒさんが一夏の存在を認めない理由になるんだ？ 一夏本人なら何か心当りがあると思っ て見てみると、何か心当りはあるみたいだった。けれど、俺が簡単に踏み入っていいことでもないのわかった。一体、何があっ たんだ。

「また今度な」

ボーデヴィツヒさんの挑発には乗らず、あくまで理由がないとする一夏。でも、ボーデヴィツヒさんはその態度が気に入らなかったのか、左肩に大砲を展開する。

「ふん、ならば——戦わざるを得ないようにしてやる」

そう言うなり、引き金を引く。俺も、一夏もそれに反応できなかったけど、1人は違った。

ゴカギンッ！

鈍い音をたてたのは割り込んできたシャルルのシールドだった。

「……こんな密集空間でいきなり戦闘を始めようとするなんて、ドイツの人はずいぶん沸点が低いんだね。ビールだけでなく頭もホットなのかな？」

「貴様……フランスの第2世代型アンティークごときで私の前に立ちふさがるとはな」

「未だに量産化の目処が立たないドイツの第3世代型ルキよりは動けるだろうからね」

アサルトカノン ガルム を向けたままシャルルは挑発する。お互いに涼しい顔をしたままの睨み合いが続く。シャルルの武器の展開の速さには驚いたんだけど、今はそれを気にするときにじゃないから。いつでも動ける準備をしておく。多分、シャルルはここで戦うつもりはないんだろうけど、もしものためにね。

『その生徒！ 何をやっている！ 学年とクラス、出席番号を言え！』

騒ぎを聞きつけて現れた先生の声が響く。相手が教師だったからなのか、ボーデヴィツヒさんは興を削がれたように帰っていった。

「一夏、大丈夫？」

「あ、ああ。助かったよ」

さっきの睨み合いのときとは違って変わり人懐っこい顔でシャルルは一夏の無事を確認する。時間も時間だから、今日は終わろうってことになってアリーナに戻ることにしたんだけど……

「たまには一緒に着替えようぜ」

一夏のこの一言がまた騒動の原因になったのだった。確かにシャルルは人前で着替えるのを嫌がってるけど、誰かと一緒に着替える必要もないと思うんだけど。あ、そう言えば寮の部屋でシャワー上がりにパンツだけで過ごしていたら顔を赤くして目をそらされたなあ。他にも不自然っていうか違和感を感じることもあったけど、ま、いつか。

「ぼ、僕はISの点検があるから先に行ってていいよ」

「そのくらいなら待つさ。一緒に着替えに行こうぜ」

「い、イヤだよ。というかどうして一夏はそんなに僕と着替えたがるの？」

「じゃあ何でシャルルは俺達と着替えるのが嫌なんだ？」

あれ、一夏ってあっち系の人だったの？ どう見てもそうにしか見えないんだけど……。まさか、俺とシャルルが同室になったのは一夏がそっち系だったからなのか！？

その後も一夏のしつこいアプローチは続く。周りからは「織斑君ってそっちの趣味だったんだ……」とか「どうりで篠ノ之さんやオルクottさんのアプローチを気にしないわけね」、「今年のネタは織斑君×……」と言われたい放題で、正直一夏から距離を取ったほうがいいのかと思うくらいだった。そんなことはさておき、そろそろ助け舟出した方がいいよな。

「ところでさ一夏、周りを見てみた方がいいよ。ひどいことになっ

てるから」

「周りって何かあるのか……」

ここで始めて一夏は自分にB.L疑惑がかかっているのに気づいた。慌てて否定する一夏だけど、もう遅い気が……。「今年のネタは……」って言うた人は「インスピレーションキター……！」って宇宙服みたいなライダーの真似してどっか行っちゃったし……。ドンマイ、一夏。落ち込む一夏を引きずりながら更衣室に向かった俺だけど、山田先生から大浴場が使えるって聞いて復活した一夏に引いたのは余談かな。

続く。

シャルル先生と挑発と危ない疑惑（後書き）

原作のこの部分でも一夏ってホの字かと思ひ込んだ時期が1時期ありました。果たして一夏は汚名返上できるのか！？ え、できない。

メダルを手に入れるタイミングが中々見つからなくてシャウタとかサゴーズを出すタイミングが見つからないorz 一夏達との模擬戦が初登場ってことだけは避けたいと思っている今日この頃。後、今さらですが前書きの部分に「前回までの3つの」ってあった方がいいのでしょうか？

それでは意見、感想等お待ちしております。

データと真実と自分のやりたいこと（前書き）

C o u n t t h e m e d a l s

オースが使えるメダルは……

タカ

クワガタ

カマキリ

バッタ

ライオン

トラ

チーター

ゴリラ

データと真実と自分のやりたいこと

「英治、ちょっと、いい……？」

山田先生からの大浴場が使えるようになったという知らせを受けた俺達は寮に戻ろうとした。けど、一夏は何か書かなくちゃいけない大事な書類があるって連れて行かれたんだ。

で、シャルルも中々更衣室に来る気配も無かったから寮に帰ろうとしたところ、簪に呼び止められたんだけど、何だろ？

「いいけど、何かあるの？」

コクリと頷く簪。どうやら簪は自分のISを作るためにライドオーズの稼働データが欲しいみたいなんだけど、何に使うんだろ？

「……伊達さんの、バースをISにしたい……だから、英治のISが一番参考になる」

「いいけど。バースってことはドリルとか作るってことなの？」

「……うん。今度の学年別トーナメントには、間に合わないかもしれないけど……」

「わかった。で、いつデータを渡せばいいの？」

「英治がいいんだったら……今すぐが、いい」

今か……特に断る理由もないし、それでいいかな。そう伝えて、

早速簪に着いていく。

「あれ、英治、何かあるの？ それにそっちの子は？」

途中シャルルとすれ違う。どうやら今から部屋に行くみたい。

「うん、ちょっとね。こっちは更識簪」

「よろしくね。簪」

「……よろしく」

「じゃあ俺達は行くから。後でね」

シャルルと別れ、整備室に向かう。さてと、どのくらいかかるのかな？

「で、俺は何をすればいいのかな？」

作業を始めた簪に聞く。俺がやったのはライドオーズを見せただけだし。話を聞くと、ISの素体はできているけど、武器、それにバースを再現したときの立ち回りの参考となるデータがないんだって。立ち回りは伊達さんに聞いた方がいいと思っただけ、伊達さんに聞くと仮面ライダーバースとしての立ち回りでISには参考

にならない可能性があるんだって。それ以前に大雑把な伊達さんに聞いて必要な情報が手に入るのか疑問だけど……。それで、仮面ライダーでもありE.S.も使える俺のデータが欲しいってことになったのか。

「で、何かわかった？」

カタカタとキーボードを打つ簪に聞く。簪は暇そうな俺にとある画面を見せてきた。

「……これ。まだ、使っていない頭が4つ、腕は4つ、脚は5……どういうこと？」

簪が見せたのはライドオーズのパーツ一覧の表だった。使っていないメダルのはシルエツトだけで何もわからないけど。ん、おかしいな使っていない頭はサイにシャチにプテラ。腕はクジャク、ウナギ、トリケラ。脚はゾウ、コンドル、タコ、ティラノのはずなんだけど、1個多いぞ。俺が知らないメダルでもあるのか？ でも、紅さんは赤、黄、緑、白、青のコアメダルがこの世界に流れてきたって言うてたけど。

「そのデータはオーズの他のメダルのやつだけど、俺が持っていないやつだね。と言っても、存在を知らなかったのがあるみたいだけど……」

「組み合わせは7×7×7の、343通り……？」

「違うよ。1つは他の色のメダルとは組み合わせられないのがある。知らないメダルが他の色のと組み合わせれるんだったら217、組み合わせれなかったら127通りだね」

「……多過ぎ」

「あはは、確かにね。オーズでも使わなかった組み合わせがあるからね」

「……よく使ったのが、その、コンボ？」

「そうだね、反動で結構疲れるけど」

作業自体は簡単に済むみたいだから、雑談をしながら進めていく。30分くらい経つと、データのコピーも終わったのでお開きとなった。

英治とシャルルの部屋ではシャルルが1人いた。英治が簪とどこかに行くのを見て、自室に戻ってきたわけだが、特にやることもなく一息つくだけだった。

「英治は遅くなるみたいだし、シャワー浴びよう」

一休みを終えたシャルルは着替えを手に取ってシャワー室に入った。

（そういえば、昨日、英治がシャワーについて何か言ってた気がするけど……いいや）

「ただいま」

自室に戻つてくると、そこにシャルルの姿はなかった。あれ、いないのか？　そう思つて周りを見るとシャワー室から水音がするの
に気がついた。あれ、そういえば石鹸が切れていたよね。まあ、伝
えたから大丈夫かな。そう思つた俺はベッドに飛び込んだ。「んー」
と背伸びしながら心地よさを堪能する。さすがに汗をかいた後に寝
る気にならないし、夜ご飯もまだだから眠りはしないけど。

ガチャ

ドアが開く音がした。多分シャルルだな。そう思って体を起こす。

「ん？ シャルル上がったの……？」

「え、え、英治……？」

出てきたのはタオルを体に巻いたシャルルだった。でも、男ならふくらむはずのない部分がふくらんでいる状態だ。あ、綺麗な肌だな、って、そうじゃなくて。

「ええ ええ ええ ええ ええ ええ ええ ええ ええ ええ！」

「え、英治。お、お、落ち着いて!!」

なぜか大声で叫んだのは俺だった。慌てた様子で俺の口に手を当てるシャルル。ちょ、どういうこと、これ？ 誰か答えて……アレ、息が……って、前もこんなことなかったっけ？ もう限界。ボタンッ！

「え、英治……！」

それから俺が意識を取り戻したのは30分くらい後のことだった。

「で、一体どういうことだったの？ シャルルが男装していたってことはわかったけど、いいんだったらどうしてそうしていたのか教えてくれない？」

「それは、その……実家からそうしろって言われて……」

「実家っていうと、デュノア社だっけ？」

「そう。その社長が僕の父。その人からの命令なんだよ」

命令？ どうして家族がそんなことを？ それにどうしてシャルルは家のことを話すと表情が暗くなっていくなんだ？

「どうして家族が命令なんかするの？」

「僕はね、愛人の子なんだよ」

「……………」

その瞬間、俺はシャルルになんて言えばいいのかわからなかった。同情して慰める？ 違う。シャルルは同情して欲しいとは思ってないはず。じゃあ、元気づける？ それも違う気がする。元気づけようと言葉をかけても、それは軽いものにしか見えない気がするから。

「引き取られたのが2年前。ちょうどお母さんが亡くなったときにね、父の部下がやってきたの。それで色々と検査をする内にIS適性が高いことがわかって、非公式だけどデュノア社のテストパイロットをやってたんだ」

その後もシャルルの話は続く。父と会った回数が少ないこと。父の本妻と会ったときの衝突。そしてデュノア社が経営危機になったから広告塔、そして俺と一夏のISデータを得るためにIS学園に来たこと。淡々と乾いた口調で話すシャルルだったけど、俺は煮え切らない思いで聞いていた。俺が簡単に口を出せることじゃないのはわかってるけど。

「とまあ、そんなところかな。でも、英治にばれちゃったから僕は本国に呼び戻されて、デュノア社は他の企業の傘下になるか、……倒産だろうね。どのみち今までのようにいかないけど、僕にはもうどうでもいいことかな」

「……………」

「話したら気が楽になったよ。それに、今までウソついててゴメン」

深々と頭を下げるシャルル。でも、俺はそんな態度にモヤモヤした感情が浮かんでいたんだ。

「本当にそれでいいの？」

「え……？」

「だからそれでよかったの、そう聞いているんだ。ただ親の言うことを聞いて、ウソがばれたからどうでもいいや。それでいいの？」

「え、英治？」

戸惑う様子のシャルル。彼女のそんな様子に構わず俺は続ける。

「親が言ってたからそうしなくちゃ駄目なの？ シャルルはそれでよかったの？」

「僕にはどうしようもないから、いいも悪いもないよ。どうせ僕がどうなるのかも時間の問題だろうし……」

「じゃあシャルルの欲望は何？ どうしたかったの？ 父親の言いなりがよかったの？ それがいいなら俺は何も言わないさ」

「よくわけないだろ！！ でも、僕には、どうしようもなかったんだ！！」

目に涙を浮かべながらシャルルは叫ぶ。溜めていた思いが溢れてきたのか、その涙は止まる気配はなかった。

「大丈夫。今ならどうしようもあるさ。ここISS学園はあらゆる国家や組織の影響は受けない。だから時間は卒業するまでである。それに俺でよかったら力を貸すよ」

「いいの？ 僕は英治を騙していたんだよ」

「誰かを助けるのに理屈はいらないさ。それに俺は自分の手が届くんだったら手を伸ばす。届かなかったら誰かと手を繋いで伸ばす。とにかく後悔だけはしたくない性格だからね」

「ははっ、何それ。でも、元気がでたよ。ありがとう」

そう言ってほほ笑むシャルル。さっきまでとは違って本心から笑えてるみたい。

「やっとで笑ったね。そっちの方が可愛いと思うよ」

「え……／＼／」

可愛いって言われたからか、顔を赤くするシャルル。その反応を見ると、言った自分も気恥ずかしくなってきた。

「ま、まあ、どうするかはシャルル次第だからね」

「う、うん。そうするよ」

妙な気まずさが襲う。こっぴつときってどうしたらいいんだ？

コンコン

「「!？」」

「英治、シャルル。飯食いに行こうぜ」

いきなりのノックに慌てる俺達。

「入るぜー」

「ええええ英治、どどどどどうしよう?」

「おおお落ち着いて、まずは身を隠して……って、クローゼットじゃないって! ベッドの方がいいよ! それで布団をかぶって。後は俺が何とかするから」

ガチャ

ドアが開く音がする。俺は先手必勝とばかりにドアの近くに行く。

「一夏、ご飯だけどシャルルの調子が悪いみたいだから俺は後で行くよ。ゴメンね。俺達に構わず先に行ってて」

「お、おう。わかった。シャルルによろしく言っといてくれ」

「うん。じゃあ後で」

一夏が去っていくのを見送ってドアを閉める。ふう、何とかだったな。俺もそろそろお腹がすいたな。シャルル、ご飯食べに行こう……って、俺が具合悪いことにしちゃったんだった。シャルルが迂闊に部屋を出るわけにいかなくなっただな……

「ゴメン、そういうわけで何か取ってくるよ。何がいい？」

「何でもいいよ」

何でもいいが1番困るんだけどな。そう思って部屋を後にした。

「ただいまー」

「あ、おかえり」

部屋に戻ってくるなり、シャルルに焼き魚定食が乗ったトレイを渡す。

「ありがとう」

にっこり笑って受け取るシャルルだったが、トレイを見るなり固まった。何かあったのか？

「どうしたの？ 嫌いなものでもあった？」

「べ、別にそうじゃないんだけど……。い、いただきます」

ぎこちない表情で箸を持つ。魚をほぐす、そこまではよかったんだけど……

ぼろ、ぼろっ

「あっ……」

どうやらシャルルは箸が使えないみたいだった。そういえば、シャルルが箸を使ってるの初めて見る気がするし……

「ゴメン、スプーンでも持ってくるよ」

「ええっ！ 悪いよ、そんな。これで頑張ってみるから……」

「別に気にしないでいいよ。それで食べるの難しいでしょ？」

俺の問いに答えを詰まらせるシャルル。そんなに気を使うこともないのに……

「それにさ、シャルルはもっと誰かを頼った方がいいと思うよ。甘えることでも何でもいいからさ」

「うつつ……じゃあ、英治……」

ためらいを見せた後、シャルルが出した答えは俺を驚愕させるのに充分だった。

「え、えつとね……英治が食べさせて」

上目遣いで俺を見てくるシャルル。あ、まっげ長いな……って、そんなことを考えてる場合じゃなくて……俺がシャルルに食べさせる？

「だ、ダメかな……?」

まあ、誰かに甘えるとか言ったのは俺だけとさ……。それにこの上目遣いは反則だと思うんだけど……

「……わかったよ」

結局折れたのは俺だった。箸でご飯をつまむ。

「じゃ、じゃあ、あーん」

「あ、あーん」

もぐもぐと口を動かすシャルル。食べてる様子を見て小動物みたいな、とか思ったけど段々と気まずくなってきたから口数は減っていた。すっごく恥ずかしい／＼

お互いに気恥ずかしかったのか、その後は口数も少なく眠りについた。

データと真実と自分のやりたいこと（後書き）

ええ、次回からかなり原作をぶっ飛ばした展開になる予定です。まあ、新キャラがです。オリジナルの。というか、次回の話自体がぶっ飛んでる展開になる気がするんです。まあ、そこは新キャラに頑張ってもらおうとしましょう。

それでは、意見、感想等お待ちしております。

Ride on Right time (前書き)

Count the medals

オースが使えるメダルは……

タカ

クワガタ

カマキリ

バッタ

ライオン

トラ

チーター

ゴリラ

Ride on Right time

(……どうしてこうなったのだ)

ある日の朝、箒は窓際の席でそう思い悩んでいた。諸君は覚えて
いるだろうか、箒が一夏に「付き合ってもらおう!」。そう宣戦布告
(?) したのを。そしてそれが布仏本音に知られ曲解の末、今度の
学年別トーナメントで優勝した人が一夏と付き合えるってなったの
を。その噂の真相をするため、セシリア、鈴はおるか別クラス、他
学年から次々と1-1に押し寄せてきたのだ。鈴も別クラスでだけ
ど……

「なあ、英治。さつきから俺の名前がちらほら聞こえてくるけど、
何だろうな。聞こうとしても女子にはぐらかされるし……」

「いや、そうは言われても。俺の予想の範疇を超えていたっていう
か……正直、俺にもよくわからないんだけど……」

「僕にも何が何だか……」

クラスを見回すと篠ノ之さんが何かに耐えるように震えていた。
何にだろ? 考えてもどうしようもないので席に着く。今日の授業
は何だったかな。

放課後。一夏は今日も特訓があるみたいでアリーナに行こうとしていたけど、それを呼び止める。大事な話があるからね。

「ゴメンね、一夏。話があるのは僕なんだ」

シャルルを含めた3人で、寮の自室に来る。ここならそうそう誰かに聞かれる心配はないだろうからね。

「話ってなんだ？ そんなにかしこまらなくても……」

「いいから聞いて。僕はね、一夏達に大きなウソをついてたんだ。僕はね、女なんだよ」

「え？」

シャルルは俺にしたのと同じ話をする。違うのは俺にしたときより悲観的でないこと。話を聞く一夏の表情が重くなり、握った拳が震え出す。

「謝ってすむことじゃないのはわかってるけど、ホントにゴメンなさい」

頭を深く下げるシャルルに対して一夏の答えは……

「いいよ、そんなこと。シャルルはそのことを悪いって思ってるんだろ。なら、俺は何も言わないさ。ま、どうしようもなかったと、か、どうでもいいってまだ言っただったら黙っちゃいなかったかもしれないけどな」

「……一夏」

「困ったことがあるなら俺にも言ってくれよ。友達を助けるのに理由はいらないからな」

一夏がそう言つと「ふふっ」ってシャルルが笑つた。

「え、どうして笑うの？」

「だってね、英治と同じこと言つんだから」

一夏にも謝つたからか、スッキリした表情でシャルルは言つた。

一夏はホントにいい奴だな。だから皆惹かれていくんじゃないかな。

その後、シャルルが女子だってバラすわけにもいかないから皆で協力して隠すことにした。この後は時間もあるし、一夏の特訓をすることになった。まあ、俺も特訓しなきゃ怪しいけど……

「「あ」」

鈴とセシリア、2人揃つて間の抜けた声を出してしまう。2人っているのは第3アリーナ。大方、今度の学年別トーナメントに向けての特訓だろう。

「奇遇ね。あたしはこれから月末の学年別トーナメントに向けて特訓するんだけど」

「奇遇ですわね。わたくしも全く同じですわ」

火花を散らす2人。学年別トーナメントでも、一夏を巡る戦いで、も2人はライバル（？）なのだ。強敵と書いて友と読む。そんな言葉があるが、2人に、いやこの場にいない筈も含めれば3人か。とにかくその言葉を否定するであろう。周りから見ればお前ら、仲いいだろってなるが……

「ちょうどいいわね。この前の実習のこともあるし、どっちが上かはつきりさせようじゃない」

「あら、珍しく意見が一致しましたわね。どちらがより強く、より優雅であるかはつきりさせようじゃありませんか」

メインウェポンを呼び出し、構える2人。少しの静寂の後、動き出そうとした2人に邪魔をするものが現れた。

ドンッ

「「!?!」」

いきなり飛んできたのは1発の弾丸。緊急回避の後、鈴とセシリアが見たのは漆黒にISだった。

機体名『シュヴァルツェア・レーゲン』。登録操縦者……ラウラ・ボーデヴィツヒ。

「……どういづつもり？ いきなりぶつ放すなんていい度胸してるじゃない」

連結した双天牙月を肩に掛けながら、鈴は言った。セシリアも同様にいつでも戦闘に入れるような大勢をとっていた。

「中国の『甲龍』にイギリスの『ブルー・ティアーズ』か。……ふん、データで見たときの方がまだ強そうではあったな」

挑発的な物言いに来るものがあるセシリアと鈴。ラウラの物言いは自身から来ているものが2人にはわかったのだった、だからこそ2人はその鼻つつらを折ってやりたいとも思っていたのだ。

「何？ やるの？ わざわざドイツからくんだりからやってきてボコられたいなんて大したマゾっぷりね。それともジャガイモ農場じゃそついうのが流行ってんの？」

「あらあら鈴さん。こちらの方はどうも言語をお持ちではないようですから、あまりいじめるのは可哀想ですわよ？ 犬だってまだワンと言いますのに」

「はっ……口は一人前のような。だが、2人がかりで量産機に負ける程度の実力しか持たぬものが専用機持ちとはな。よっぽど人材不足とも見える。数くらいしか能のない国と、古いだけに取り柄の国はな」

ぶちっ！！

挑発が逆にし返され、2人はついにキレた。自国をバカにされて黙っているわけにもいかないし、何よりこの2人はラウラ・ボーデ

ヴィツヒという人物が気に入らなかったからだ。

「……セシリア、どっちが先にやるかジャンケンしよ」

「ええ。そうですね。わたくしとしてはどちらでもいいのですが……」

「はっ！ そんな下らないことなんて決めずに2人がかりで来たらどうだ？ 下らん種馬を取り合うようなメスにこの私が負けるものか」

「「は」

この場にはいない者、一夏を罵倒されて2人は我慢の限界だった。そんなセシリアと鈴の様子も気にせずラウラは「来い」とだけ告げる。

「「上等！」

こうして第3アリーナでの戦いの火蓋は切って落ろされた。

「あう……」

「くっ、何なのよあの装備……」

アリーナにたどり着いた俺達が見た光景は想像を越えるものだった。セシリアと鈴とボーデヴィツヒさんが模擬戦をしている。これだけならよかった。でも、現状はセシリアと鈴が完全にボコボコにされているところだった。シールドエネルギーが0になったみたいでISが解除される2人。それに対して、ボーデヴィツヒさんは大したダメージを受けていないみたい……。鈴とセシリアの相性が悪いからってココまでになるものなのか。

「口程にもない奴らだ。お前達にもう用はない」

ジャキンと銃を2人に構える。ISを展開していない人にそんなことするなんて……。冗談にすらならないよ。この行為は止めなくちゃ、そう思っただけでISを展開しようとする俺の隣を何かが通りすぎたっていった。

「おおおおっ！」

零落百夜を発動させた一夏の白式がボーデヴィツヒさんのシュヴァルツェア・レーゲンに肉薄する。アレはISに対しては絶大な威力を発揮する。ボーデヴィツヒさんも避ける様子もないから、必ず当たる。皆そう思っていたはず。でも、一夏は何もない場所で止まっていたんだ。

「な、なんだ！？ 体が、くそっ……」

「やはり敵ではないな。この私とシュヴァルツェア・レーゲンの前では、貴様も有象無象の1つでしかない。……消える」

冷たく言い放ったボーデヴィツヒさんはその大型カノンを一夏に

向ける。俺とシャルルが何らかの行動を起こそうとしたとき、引き金は引かれた。

「ぐああああああ」

零落百夜の長時間の発動、今の直撃で元々のシールドエネルギーが少なかった白式は解除されて、一夏は鈴達が倒れている方に転がる。

「くそっ……」

「ふん、やはり私は認めるわけにはいかない。貴様が教官の弟であることを。その2人もろとも、消えろ」

再度、大型カノンを向ける。今の状態でそんなことされたら、命が危ないじゃないか。でも、そんなこと……

「させてたまるかああああ！」

「タカ！　トラ！　バツタ！　タ・ト・バ　タトバ　タ・ト・バ！
！」

「がつ……き、貴様」

不意をつけてのか、飛び蹴りを当てることに成功した。何とか照準をずらすことに成功した俺はそのまま構えを取る。

「これ以上やるなら、俺が相手になるよ」

「ふん、今更1人増えようと、何も変わらない」

「僕もいるよ」

アサルトライフルを構えたシャルルも英治の隣に来る。でも……

「シャルル、ここは悪いけど俺に任せて3人を守っていてくれないかな？ 見たところ大した怪我はしてないみたいだけど、ISは展開できないだろうから」

「そんなこと言って大丈夫なの！？ 相手は動きを止めることができるんだよ。多分、アレは認識した標的を止めるものだから2人でいった方がいいよ！」

認識でか…… だったら尚更大丈夫だな。ホントは対人では使いたくなかったけど、ボーデヴィツヒさんの目を覚まさせてやりたいからね。

「大丈夫、切り札はあるから」

俺の目を見たからか、シャルルは頷いて一夏達の方へ下がった。それを確認した俺の手には2枚のメダルが……

「1人でいいのか？ あのブロンドのやつが言ったように2人がかりならどうにかできたかもしれないが？」

「ま、見ていてよ。君の間違った強さを止めてみせるから」

「ッ！ 私の強さが間違っているだと？ そこまで言うなら見せてもらおう。貴様の実力とやらを」

予想外にも少し同様したボーデヴィツヒさん。彼女に対抗するために俺はタカとバッタのメダルを変える。

「いくよ！」

『ライオン！　トラ！　チーター！　ラッタラッタラター！』

「あれは……」

「コンボですの……？」

「あの時の緑のとは違うみたいよね」

「コンボって……？」

「ふん、色が変わったところで何が……ぐっ」

ボーデヴィツヒさんが言い終わる前に、トラクローで切りつける。ヒット&アウェイ。認識したものを止めるんだったら、認識できないスピードで動けばいい。これが対策その1。

「は、速い。あれが英治のISの力なのか……」

「変な歌は相変わらずみたいね」

「いつものがタトバ、この前のがガタキリバですと、今はラトラター……？」

「だからコンボって何！？」

離れたところで話している一夏達。でも、シャルルだけは話についていけないみたいで、ずっと説明を求めている。無視というか、気づいて貰えてないみたいだけど……

「くっ、がつ……」

その間も俺の攻撃は止まない。一撃、一撃の威力は大して高くないが、反撃を許さない分、十分こっちに勝機はある。右から、左からと振り回されるボーデヴィッヒさん。でも、彼女は何かを狙っているみたいで、目を閉じていた。

「どんなに速かろうと、対処できないわけではないっ！」

俺が突っ込んでくるタイミングを計っていたみたいで、彼女が手を突き出した途端、俺は静止した。そのまま肩の大型カノンを向けてくるけど、手はまだあるから。

『ライオディアス発動』

黒いバイザーが展開されて、ライドオーズは輝きだす。

「何っ！」

その眩しさから、目をつぶってしまうボーデヴィッヒさん。その瞬間、俺の行動は自由になる。

『スキヤニングチャージ!!』

「ハッ、しまった！」

ボーデヴィツヒさんが目を開けたころには、もう遅かった。3つの黄色い光の輪。それをくぐる度に加速していくラトラーターを止めることはできなくて、両腕のクローでXの字に切り裂いた。

「まだだ！ まだ私は負けでない！」

一瞬で急所だけは外せたのか、未だに健在のボーデヴィツヒさんでも、ダメージは少なからず与えられたみたいで装甲には多くの傷がついていた。

「行くぞ……！」

ガキンッ！

響き渡る金属音。ボーデヴィツヒさんの攻撃を受け止めたのは……織斑先生だった。

「……やれやれ、これだからガキの相手は疲れる」

「千冬姉！？」

驚きの声を上げる一夏。そんな一夏も気にしないで、織斑先生は続ける。

「模擬戦をやるのは構わん。だが、こうも被害が多くでるのは教師として黙認しかねる。この戦いの決着は今度のトーナメントでつけてもらおうか」

「……教官がそうおっしゃるのなら」

不満気ではあったけど、相手が織斑先生だったからか、ボーデヴィツヒさんは頷いて去っていった。

「火野や、織斑達もそれでいいな？」

「わかりました」

俺達も頷く。その後、この事態は織斑先生によってあずけられ、今後はトーナメントまで私闘は禁止という状況になった。

「あいつ、中々面白そうだなア。潰しがいいがあるぜエ」

「……好きにすればいい」

IS学園、第3アリーナを遠くから見つめる者が2人いた。どちらも異形の姿をしており、狂気を振り撒くのは茶色がかったオレングジの蛇のような異形。一方の興味なさそうなのは紫色の恐竜みたいな異形だった。

「早速あの女でヤミーを作ってくるぜエ。祭りの始まりだア」

「……ワース、程々にしろ」

「わアってるよオ、ギル」

2体の欲望の化身はその姿を消した。ワースと呼ばれたグリードの視線の先にいたのは先程英治に負けそうになったラウラであった。

Ride on Right time (後書き)

怒られそうですが、オリジナルのグリードで、爬虫類と恐竜（幻獣？）を出しました。ぶっちゃけ最近思いついたので、この後どうなることや……

というか、シャウタ、サゴーズ、タジャドル出さずにプトティラ出たら物語が……未だにそれに対応したIGがどのタイミングで出るか半分未定なのに……

それでは、感想、意見等お待ちしております。

設定集？（前書き）

これを閲覧する前に22話を見ることをオススメします。

9/28訂正。ラトラーターの技名を教えてください。ゲートゲ
ー様、ありがとうございます。勝手ながらこの場を使ってお礼を
させていただきます。

設定集？

・ライドオーズ『ガタキリバ』

イメージはそのまま、ガタキリバのIS化。わかりやすいチート。能力はクワガタの電撃、カマキリソード、バツタレグの脚力だが、コンボの特殊能力として無人機操作がある（イメージはガンダムXのGビット）。武装はガタキリバと同じ、操作も意識を集中させることもなく使えるが、シールドエネルギーの発生源は1つしかないため、展開できる時間には制限がある。まあ、よっぽどのことがない限り、大抵の相手は時間内に倒せるが……

必殺技は人型ビット含めた全機で繰り出すガタキリバキック。こんな試合で使ったら大半は操縦者へのダイレクトアタックになると思われる。

・ライドオーズ『ラトラーター』

AIC、いや、ラウラに対するチート（？）。ライオディアスに高速移動で相手に認識させる感がゼロである。だが、その点からいくとビットの制御に集中力を使うセリアキラーにもなると思われる。ガタキリバと違い、特筆する能力はない。だってISはバイクに乗らないもんorz

というか、コンボって大概チートになるが、誰かキラーにもなりそう。シールドバリア関係なしに堅いのや、水を操るのがあるし……必殺技は黄色い光の輪をぐりながら、的を両腕のクローで切り裂く「ガツシユクロス」。

・メダル設定

クワガタ……電撃を放てるようになる。中距離攻撃の獲得。

ライオン……ライオディアスが使用可能。要するに強力なめくらし。

・オリジナルグリッド設定。

『ワース』

爬虫類型のグリッド。属性をつけるなら『地』だろうか。本来はガメルが大地らしいが、重力を操る描写しかなかったため、砂等を操れることでいきます。メインの動物のモデルはコブラ。そのため、性格は龍騎の朝倉威をモデルとしてる。名前の由来は朝倉↓暴れる↓壊す↓ワース。

『ギル』

結局オース本編でははつきりしなかったグリッド。本小説ではオリジナルのグリッドとして使わせてもらった。属性か『氷』。ドクターのモデルがティラノ、映司がトリケラらしいので、モデルはプテラ。朝倉がワースなので、北岡をモデルにしようと思ったけど、カザリとかぶる気がしたから性格はよりクールで無口に、そうなった。

このグリッドだけ、存在している理由は昔はこのISの世界にもコアメダルはあった。しかし、ギルによって残りのコアは全て碎かれた。その後、ギルとワースは相討ちとして、メダルの状態で眠り続けた。そのため、世界の管理者からは認識されることはなかった。ところが、別のコアメダルが流れてきた影響で復活。財団Xがコアメダルを狙い出したのは彼らのせいである。

・IG (imitation greed)

コアメダル1枚とセルメダルで誕生したグリッドもどき。誰かの特定の欲望で生まれたというよりも完全な自分を求めて他のコアメダルを狙う。

クワガタI G……クワガタのコアメダルで誕生。他のコアメダル（特に緑の）を求めて英司を狙った。モデルは『剣』よりギラファアンデットのカラーで、武器を持ったクワガタヤミィ。

ライオンI G……ライオンのコアで形成。ライオディアスが使用可能。モデルは『電王』のレオソルジャー！。

設定集？（後書き）

とりあえず現時点での設定集。タジャドル等も能力設定は終わっているので知りたい人がいれば活動報告にでも載せようと思います。

IGは他のライダーの怪人をモデルとしています。一応調べていますが、コンドル、ゾウ、シャチ、ウナギがモデルの怪人を教えていただければ幸いです。ちなみにクジャクは赤い銃撃手、サイは紅き救世主と戦ったのが予定です。

完成と暗躍とチーム結成（前書き）

Count the medals
オーズが使えるメダルは……

タカ
クワガタ
カマキリ
バッタ
ライオン
トラ
チーター
ゴリラ

完成と暗躍とチーム結成

「それじゃ、治療も終わりだ。よかったな、3人共、大した怪我もなくてな」

場所は保健室。先程の戦いでダメージを負った一夏達のために来ていたんだ。伊達さんが言うには3人共、大したことはないみたいでシップを貼るとか、その程度で済むみたいだった。

「別に助けてくれなくてよかったのに」

「あのまま続けていれば勝っていましたわ」

「いや、強がりはやめようよ。2人とも、俺達が着いた頃にはIS、解除されてたしね」

「「う」」

言葉を詰まらせるセシリア、鈴。完璧に凶星だったね……

「お前らなあ……。はあ、でもまあ、怪我が大したことはなくて安心したぜ。ま、俺も人のこと言えないか……」

同じく、シップや絆創膏だらけの一夏が諫めるけど、2人はまだ強がりと言っていた。

「好きな人にかっこ悪いところを見られたから、恥ずかしいんだよ」

「わあああああ!」「」

「ん?」「」

シャルルの一言に取り乱すセシリアと鈴。頭に「?」を浮かべる一夏。これじゃあ誰かの一夏への想いは成就しないんだろうなあ。一夏は「シャルルのやつ何言っただんだ?」って顔してるし。

「はい、ウーロン茶に紅茶。とりあえず落ちついてね。一夏もウーロン茶でいいでしょ?」

「ん、おう。サンキュ」

「ふ、ふんっ!」

「不本意ですがいただきます!」

鈴とセシリアは受け取った飲み物を一気に飲もうとするけど、そうすると「ゲホッ、ゲホッ」……むせるよ……って、遅かったみたい。

「そう言えば火野、更識が探していたぞ」

「簪が……?」「」

「おう、何でもISが大体はできたらしくてな」

簪のISって、バースがモデルだね。この前できるかどうかって言ってたのにもうできたの? そうだったら凄いや。

ドドドドドドドド……！

「な、何だ？ 何の音だ？」

廊下から聞こえる地鳴りにも聞こえる音。どんどんそれが近づいてくるのを感じた俺と一夏は顔を見合わせた。嫌な予感しかないんだけどね……

ドカーンッ！ そんな激しい音をたてて、保健室のドアが吹き飛ぶ。そのドアが宙を舞う光景に目を奪われそうになったけど、そのドアがあつたところにはもつと恐ろしい光景があつたんだ。どこを見ても、手、手、手。とホラー系の映画にも使えそうな光景が繰り広げられていたんだ。

「織斑君」

「デユノア君」

「火野君」

冷静に考えればわかることだったけど、なだれこんできたのは沢山の女子。状況を飲み込めていない俺達に女子達は1枚のプリントを突きつけてきた。

「なになに」今月開催される模擬トーナメントは、より実践的なものとするために、2人組みで行うこととする。ペアができなかったら――」

「ああ、そこまでいいからっ、とにかく！」

「私と組んで織斑君！」

「一緒に組んで、デュノア君」

「私と参加しよ、火野君」

「伊達さん、結婚してください」

あれ、何か1つ違うの混ざってなかった？ 伊達さんも「嬢ちゃん」がもう少し年が上だったら考えたけどな」って、何普通に答えるんですか？

「え、えっと……（ど、どうしよう、英治、一夏？）」

（落ちついて、とりあえずシャルルは俺達のどっちかが組むことにしないとイケないね。一夏、どうする？）

（ジャンケンか？）

（いや、俺はアテがあるから、一夏が組んでいいよ）

この間1秒。とりあえずさっさと手を打たないとしてことで、行動を開始する。

「悪いな、俺。シャルルと組むことになってるし……」

「ゴメンね、皆。俺も約束した相手がいるから」

しーん、そう一気に場の空気が静まる。悔しそうに去っていく女子を目に、俺達はふう、と息をつくのだった。

「ちょ、ちょっと。あたしと組みなさいよ！ 幼馴染でしょうが！」

「いえ、ここはクラスメイトとしてわたくしと……」

「2人とも、悪いな。後で何でも言うこと聞いてやるからここは諦めてくれ」

一夏がそう言った途端、2人の目がキューピーンって光ったけど、気のせいだよな。

「ま、まあ、そういうことなら仕方ないですわね」

「わ、わかったわ。その代わり後で覚悟しときなさいよ」

ねえ、一夏、ひょっとしなくても自爆したんじゃない？……？

「ねえ、英治。僕は一夏と組むことになったけど大丈夫なの？」

「ああ、気にしないで。俺にはアテがいるからね。それに下手に一夏を残すと厄介なことになりそうだったからね」

「アハハ、ありがとね。気を使ってくれて」

「じゃあ俺は組んでくれそうな人の所に行ってくるから」

「うん、頑張ってね」

そう言って保健室を後にする。さてと、簪はどこにいるのかな？

「くっ、火野英治……」

英治が簪を探し始めた頃、ラウラは1人、屋上に佇んでいた。思い浮かぶのは、自分の強さを間違っていると、自分を追い詰めた男。そのせいか、彼女は今、一夏は眼中になく、どうやって英治を叩き潰すか、が頭の中を占領していた。

「お前、オーズを叩き潰したいんだってなア」

「何者だ!？」

急に後ろから聞こえた声に慌ててラウラは振り向く。そこにいたのは、見たこともない男だった。現役の軍人である自分に悟られず、背後を取ったことに警戒するが、男はそんなことを気にしないように続けた。

「だから、オーズ、いや火野英治を潰したいんだろオ？」

「ッ!」

火野英治、まさしく自分が倒そうとしていた相手の名前を出されてラウラは目の前の男がますます謎に思えてきたのだった。

「その目、いい目じゃねエか。お前の欲望、開放しちまいなア」

男、ワースはラウラにセルメダルを入れて去っていった。ラウラは自身に一瞬違和感を感じ、見渡したが、男は既に消えていたのだった。

「せいぜい楽しませてくれよオ、オーズよオ」

ワースはラウラの中にいるヤミーの存在に期待しながら歩きだした。オーズが自分の相手にふさわしいかどうかを確かめるために。

（しかしよオ、ギルの野郎が言ってたが、この世界には俺のと、ギルのしかコアメダルは存在してねエはずなんだが……まア、考えても変わんねエか）

オーズが持つてるコアメダルの存在に疑問を持ちつつも、ワースの姿は闇に紛れたのであった。

「簪、いる？」

「……うん、ここに……」

簪を探しに整備室に来てみると案の定いた。最後の点検でもあるのかな？

「早速だけど、俺を探していた用事って？」

「……これが、できたってことと、……模擬戦の相手になって」

模擬戦の相手、か。可動実験は大事だからね。俺はすぐにOKして、アリーナに向かうことになった。

「ねえ、模擬戦やるのはいいんだけどさ、1つお願いがあるんだけど？」

「……な、何……？」

「今度のトーナメント、俺と組んでくれないかな？」

「……え!？」

急に驚いた顔の簪。俺、何かマズイことでも言ったのかな？

「べ、別にいいけど……私で、いいの……？」

「よくなかったら頼まないよ。それとも、簪は俺とじゃ嫌だった？」

ふるふると首を振る簪。どうやらいいたいだな。

「それじゃあ、よろしくね。それとさ、簪はもう少し自身持った方がいいよ」

「……私は、あの人には適わないから……」

あの人？ 誰のことだろ？ でも、その誰かと比べて、自分が劣っているからそう思うんだよね。

「あの人が誰だかわからないけどそんな卑屈にならなくてもいいと思うよ。簪には簪にしかないいいところがあるんだから」

「……私のいいところ？」

「うん。例えばそのIS。自分で作れることは凄いと思うよ」

「でも……あの人は、できる……」

「げ、その人、そんなに凄いの……？」

「で、でもさ、俺にはISは作れないよ。ISが作れたからすごいってなら、俺なんか……」

「で、でもあの人は他にも何でもできるから……」

「こついうやり取りは数回続いた。俺が簪の凄いところを言っても、……あの人もできる」の一点張り。段々と自分でもヤケクソになつていくのがわかるほどの繰り返しだった。

「あああああああ、もう。簪には簪にしかできないことがあるし、その人にも苦手があるんだって。完璧な人がいたらそっちの方が怖いよ！ 人って字は支え合つてできているものだしね」

「……編み物……」

「編み物？ あおれが一体どうかしたのかな？」

「その人の、苦手なこと……。あ、ありがとう……なんか、すっきり

した……」

俺の必死の説得が通じたのか、簪はさっきよりいい表情をしていた。シャルルといい、どうして俺の周りには卑屈な女子が多いのかな？

「じゃあ、今度のトーナメント、よろしくね」

「う、うん。……よろしく、お願いします……」

こうして正式にペア結成と言ったところで、アリーナに着いた。さてと、模擬戦、始めますか。あ、よく考えれば織斑先生から私闘禁止ってなってたんだ……でも、模擬戦だから、大丈夫だよな。

『タカ！　トラ！　バッタ！　タ・ト・バ　タトバ　タ・ト・バ！
』

模擬戦の開始前。簪を待ちながら周りを見回した俺は一人の女子と目があった。その人は俺と目が合うなり、ウィンクをして、扇子を広げた。だが、気になったのは、その人は簪と、目、髪の色が同じってこと。制服のリボンから見ると上級生だから姉ってことだね。

「……待った……？」

「いや、別に。それよりあそこにいるのって簪のお姉さん？」

俺が指す方向を、見て表情を暗くする簪。お姉さんと何かあったのか？

「……う、うん。でも、今は…あんまり、仲良く、ない」

「……そうなのか」

何とかしてあげたいとは思っけど、これは簪の問題だからむやみに首を突っ込むべきではなかった俺はそれだけを言う。さてと、始めようか。

「……展開」

簪がそう言うのと、あっという間にISが展開される。黒とシルバの装甲。肩や肘、膝とかにあるガチャポンのカプセルみたいなパーツ。そして背中に展開される翼。デザイン、シルエットが他のISより人型に近いそれはまさに、仮面ライダーバースをそのままIS化したものだった。

「じゃあ、始めようか」

コクリと頷く簪を見て、距離を取る。

少しの静寂の後、どちらともなく、動き出した。

「当たって……！」

バースバスター似の銃を呼び出し、こっちに向かって撃ってくる。

2発、3発と銃弾は俺に向かって飛んでくる。それを横に、あるいは上にとよけ続ける。セルメダルを消費しない分、あっちの方が燃費（？）がいいんだろうなあ。そう思いつつもオースカリバーで斬撃を飛ばしながら反撃する。簪はそれを楽々とかわすと同時に、再度、こつちを狙ってくる。

「くっ、のわっ、おおっと！」

どう考えてもこの状況が続けば、こちらが不利なのは変わらないであろう。それ程射程の差、弾数の差は大きいんだ。シールドエネルギーを消費して斬撃を飛ばすこつちと弾数式の銃の向こう。このまま遠距離戦が続けば絶対こつちが負ける。せめてウナギか、クジヤクがあれば……

「……隙有り」

「しまった！」

考えてるうちに動きが悪くなった所をつかれて何発かくらう。ラッキーなことに大ダメージにはなっていないけど。とりあえずコレに賭けてみますか。

『タカ！ ゴリラ！ バッタ！』

メダルチェンジと同時に腕を突き出す。そうすると、腕甲だろうか、その辺りのパーツが飛んでいく。まあ、要するにロケットパンチだな。

「ロケットパンチだ…？」

これかわす簪だけど、何か今、期待に満ちた顔をしていたよう
な。でも、これで隙は作れたはず。

『クワガタ！ カマキリ！ チーター！』

「セイヤツ！」

「え……？」

一気に近づいてカマキリソードを振るう。突然の加速、それも瞬
時加速並みの加速をたやすくやったことに驚いたのか声をあげる簪
を何回か攻撃するのだが……

ギユイインッ！

回転する何かに止められて、火花が散る。簪の右腕に装備された
ドリルアーム。それに俺の攻撃は受け止められていたんだ。

「うわっ……！」

ドリルとソード、そのままつばぜり合いになるかと思ったが、そ
うはいかなくて、ドリルの回転による振動で思うように力が入らな
くて弾かれる腕。がら空きになった胴にはドリルの一撃が。

「のわああああああああ」

ドシーン、そういう音と一緒に地面に叩きつけられる俺。シール
ドエネルギーは結構減ったけど、まだ戦えるな。でも、どうやって
攻めようか。やっぱり大技で、かな？

「……クレーンアーム」

「え？」

クレーンアームの展開により、さっきまで右腕にあったドリルはクレーンの先端になる……つまり、ドリルの射程が伸びること……アレ、かなり不利？

そう思った瞬間に、飛んでくるドリル。ギリギリでかわせたけど……危なかったあ。

『タカ！　トラ！　バツタ！　タ・ト・バ　タトバ　タ・ト・バ！
！』

イチかバチかの逆転のためにタトバコンボに戻り、オーズカリバーを取り出す。シールドエネルギーの消費は大きいから斬撃は飛ばさない。でも、これならダメージは期待できるはず。

『スキヤニングチャージ！！』

「ッ！？」

その音で何かするってわかったのか、簪はこっちに向かって加速してくる。ドリルやクレーンも展開しないで突撃してくることに疑問は感じたけど、背に腹は変えれないから、こっちも加速して簪に突っ込んでいく。いくよ、簪！

ガキンッ！

その音と共に着地する両者。着地によって舞い上がる砂煙。場を支配する静寂の中、健在だったのは簪の方だった。こっちの一撃は

当たっていた。それでも俺が負けたのは、簪の翼はカッターウィン
グってことを忘れていたからだった。

「英司、大丈夫……？」

「ん、大丈夫だよ。ハハ、それにしてもあつさりと負けちゃったな」

「そ、そんなことないよ……英司も、強かったし……」

その後も談笑は続いた。そういえば、そう思っ簪のお姉さんが
いた方を見るとそこは誰もいなかった。もう帰ったのかな、妹に
言くらいかけていけばいいかもしれないのに……

トーナメントまでもう少し。特訓あるのみ、かな。

完成と暗躍とチーム結成（後書き）

遂に（？）登場、簪のIS。でも、名前未定（笑）。いや、本気で。何かいいアイデアがあつたら教えてくれれば嬉しいです。ちなみに自分が間がれたのは『打鉄・誕』とかでしっくりこなくて…

…orz

とりあえず今回の原作（？）ブレイクは

一夏にもシャルルの秘密をばらした。

セシリア、鈴、簪、トーナメント出場可能。

ラウラがヤミーの親に

の3本です。次回もまた見てくださいね。ジャンケン、ポン……
ってサ。エさんじゃねえし！

それでは気を取り直して、感想、意見等お待ちしております。

ラッキースケベと眠れない夜とトーナメント開始（前書き）

C o u n t t h e m e d a l s

オーズが使えるメダルは……

タカ

クワガタ

カマキリ

バッタ

ライオン

トラ

チーター

ゴリラ

ラッキースケベと眠れない夜とトーナメント開始

「ふう、疲れた」

「お疲れ、英治」

部屋に戻って来た俺を笑顔で迎えるシャルル。身長差も加わり、多少上目遣い気味になるそれは破壊力抜群で……、同室が女の子なんだなって強く認識させられてしまうのだった。

「ねえ、英治。遅くなっちゃたけど……あの時は助けてくれてありがとう」

あの時？　って、ああ。ペアのことか。

「いや、気にしないでいいよ。事情を知ってるのは俺と一夏だけだから。それに友達だからね。助けるのには理由は必要ないよ」

「アハハ、友達か……」

何故か微妙そうな顔のシャルル。何でだろ？　そう思ったけど、そんなに気にすることじゃないかな、と俺は思ったのだった。

「でもさ、友達だから。そうじゃなくてもきつと英治は誰にだって手を伸ばすと思うよ。それは、きつと英治が優しいからだよ」

「そっなのかな？」

「そつだよ。だからね、英治、色々ありがとうね」

そう言われて俺は何か、照れくさかった。でも、誰かからこう感謝されるのは嫌いじゃなかった。

（嫌いじゃないわ！ 嫌いじゃないわ！）

あれ、今オーズと知らない黄色い怪人が思い浮かんだけど、気のせいだよな。

「ところでさ、シャルル。俺と一夏の前だったら男口調にしないでもいいんじゃないかな。どこかで本当の自分でいられるのは大事だと思うしね」

「う、うん。僕も直した方がいいかなとは思ってたんだけどね、徹底的に仕草とか口調とか覚えさせられたからすぐには直らないかも。でも……これじゃ女の子っぽくないのかな？」

「い、いや。そんなことはないと思うよ。シャルルは可愛いと思うし」

「か、可愛い……？ ぼ、僕が？ ほ、本当に？ ウソついてない？」

身を乗り出しながら聞いてくるシャルルに驚いたけど、ホントのことだったからすぐに頷いた。俺の反応を見ると、「そうかあ、僕可愛いのかあ、えへへ」と繰り返してたのは怖かったけど……

「ま、まあ、そろそろ着替えないかな？ どっちもいつまでも制服のままってわけにはいかないでしょ？ じゃあ俺は外にいるから着

替え終わったら言ってね」

そう言っただけから出ようとしたら「待って！」と服の裾を掴まれた。え、何？

「い、いいよ。そんなの。英治に悪いし。そ、それに……ほら！男同士なのに部屋の外に出てたら変だっと思われちゃうよ」

そう言われればそうだな。だからって男と女の子が同じ場所で着替えるのは……？

「ぼ、僕は気にしないから。ね、英治も普段通りでいいよ」

何でか一生懸命になるシャルル。そう言っただけでシャルルの気持ちを無駄にしないために断ることはできなかった。

「じゃ、じゃあ、俺も着替えることにするよ」

「うん、そうして」

にこっと笑うシャルル。その頬は少し赤い気がしたけど、着替えるんだっただけささと着替えてしまおう。そう思ったからあんまり気にしないことした。

じー。

上着を脱いだとき、なぜか後ろから感じる視線。誰がつていうのは考えるまでもないけど……。

「ねえ、シャルル？」

「ふえ！？ な、何かな？」

動揺した声をあげるシャルル。その反応にはこっちもびっくりでどう声をかけたらいいのかわからなかった。

「と、とりあえずこっち見てないかな？」

「え、え、え、え、そそそ、そんなことないよ」

「そ、そう？」

とつても挙動不審なシャルル。まあ、本人が違うって言うんだからこれ以上、聞くのもよくないよな。そう思っただけで着替えようとする。

じー。

それでも、感じる視線。えーと、シャルルさん。どうしたのでしようか？

「えっと、覗きはよくないよ」

「にや！？ ぼ、僕はそんなこと……きゃん！」

再び動揺したシャルル。そんな彼女の方から、どたっ、そういう音と悲鳴が聞こえた。

「ちょ、大丈夫？ ……あ」

「いたた、足がひっかかちゃった……え？」

不意に振り向くとシャルルと目があう。ということは、彼女の状態も見えてしまうわけで……。俺の視界に写ったのは脱ぎかけのズボンに足をひっかけて転んだシャルル。とうことは、その…下着が見えてしまったわけで……

「ご、ゴメン！」

瞬時に後ろを向く。色はピンクで……って、違う違う。落ち着け、落ち着け。

「……見たよね、英治？」

「ごめんなさい」

慌てようが、落ち着こうが、俺には謝るしかなかった。

「ちゃ、ちゃんと言ってくれれば僕は、その……」

「ん？ 何か言った？」

「い、いや、何でもないよ。何でもないから！」

「あ、うん。わかったから、落ちついて」

「あ、う……／＼／」

シャルルは顔を赤くして黙り込んだ。えっと、これって俺が悪いの？

その夜。英治が眠りに着いた後もシャルルは起きていた。いや、眠れなかった。その表現の方が正しいのかもしれない。さっきのハプニングを思い出しては顔を赤くして、悶える。その繰り返しだった。そういえば。シャルルはふと思った。自分の下着を見たとき、英治はどう思ったのか、と。自分は男としてIS学園に来るために仕草や言葉遣いを教え込まれた。そして先日までは男として接してきた。英治は可愛いと言ってくれたが、それでも不安なことはあった。自分を異性として意識しているのかどうか。そして今日、自分の下着を見られた。それで意識してくれれば……

「な、何考えてんだらうね、僕は……」

その呟きに答えるものは誰もいない。少しの静寂の後、頭が冷えたシャルルは眠ろうと目蓋を閉じる。想い浮かぶのは英治の顔。

（ああ、もうっ、でも／＼／＼）

すぐさま顔を赤くする。英治を異性として意識したあの日。母がいなくなってから、シャルル自身と向き合ってくれた少年。半分ヤケだった自分にやりたいことを考えさせてくれた。

気が付けばシャルルは自分の布団を出て、英治の寝顔を覗いていた。心地よさそうな顔の英治。彼はどんな夢を見ているのだろう？ そんな英治を優しい表情で見つめていたシャルルは、静かに彼の額にキスをしたのだった。

「おやすみ、英治」

彼女の眠れない夜は続く。

6月の最後の週。この日から学年別トーナメントは始まる。IS学園にはそのトーナメントを見るための来賓が来るため、1回戦がもうじき始まるというのに忙しかった。

「で、調子はどう、一夏？」

「おう、バツチリだ」

男子があてがわれた更衣室。そこにいるのは俺と一夏、シャルルそれから俺のペアの簪だった。着替えも終わったし、作戦会議的な名目で彼女もここにいた。最初は簪はその内気の性格のためか、一夏とあまり話さなかったが、一夏の性格のおかげか、彼女も人並みには一夏と話すようになっていたんだ。

「しかし、すごいな、こりゃ……」

モニターから見えるアリーナの観客席。そこには政府のお偉いさん、技術者等々すごい顔ぶれが集っていた。

「3年にはスカウト、2年には1年間の成果の確認にそれぞれ人が来ているからね。1年には関係はないみたいだけど、上位に入ればチェックが入るかもね」

「……それだけじゃない……多分、織斑君と、英治にも視察が来る……」

「ふーん、ご苦労なことだ」

シャルルと簪の説明にも興味がなさそうな一夏。どうやら一夏が気になるのは……

「一夏はボーデヴィツヒさんとの戦いだけが気になってるからね」

「まあ、な」

やっぱりね。最初の出会いからして良くなかったし、この前の敗北。男としては同じ相手に2回も負けたくないからね。その勝負的な問題では俺もボーデヴィツヒさんの標的らしいけど。

「一夏、あんまり感情的にならないでね。彼女、ISの操縦技術ではこの学年1番だと思うから」

シャルルの言うことには俺も思うところはある。この前の戦いは彼女のISとラトラーターが相性がよかったからで、操縦技術では足元にも及んでないはず。

「そろそろ対戦表が決まるはずだよな」

シャルルは呟く。今回のトーナメントは2人ペアで行う、今まで

のとは違う形式。だからかな、対戦表を作るためのシステムが上手く作動できなかったみたいで、今朝から手作りのくじでトーナメント表が作られていたんだ。

数分後、発表されるトーナメント表。それには驚きの組み合わせがついていた。

Aブロック1回戦：火野英治 更識簪VSセシリア・オルコット
鳳鈴音

同じく2回戦：織斑一夏 シャルル・デュノアVSラウラ・ボー
デヴィツヒ 篠ノ之箒

「……………」

「……………」

ラウラと箒がいる更衣室の一角は沈黙に包まれていた。周囲の興味がなく、特定の誰かと組む気がなかったラウラと特定の誰かを誘えず終いの筈。ペアが見つからず抽選で組まされたのは彼女達だけだった。望んで組んだわけでもないし、性格的な問題からか、彼女達は全くそりがあわなかった。連携のれの字もないくらいに。

（初戦が一夏、これに勝っても次は火野達かセシリア達のどちらかか。だが私は負けるわけにはいかないのだ！）

そんな具合に気合を入れる筈とは反対にラウラはその口を釣り上げた。まずは自分の敬愛する教官に泥を塗った一夏を倒せて、次に自分に屈辱を与えた英治を倒せる。彼女にとっては都合のいい組み合わせだった。ラウラの2人を倒すという想いは狂気に変わり、彼女の中にあつた。それが火種になることは誰も知らない。

ラッキースケベと眠れない夜とトーナメント開始（後書き）

やっとで次回からトーナメントに入ります。我ながら展開が遅いと思っていましたので、次の巻からは適度なペースでやりたいな、と。

それでは意見、感想等お待ちしております。

撃ち合いとドつきあいとトーナメント開始（前書き）

C o u n t t h e m e d a l s

オーズが使えるメダルは……

タカ

クワガタ

カマキリ

バッタ

ライオン

トラ

チーター

ゴリラ

撃ち合いとドつきあいとトーナメント開始

「さてと、お手柔らかにね、セシリア、鈴」

「勝負というからには全力でいきますわ」

「そうよ。あんたらに勝ってあたしと組まなかった一夏にお仕置きするんだから！」

「…話に入れない……」

アリーナに浮かぶ4機のIS。トーナメント1回戦である俺、簪ペア対セシリア、鈴のペア。この2人は自分に一夏が自分と組まなかったことにご立腹で、その怒りの矛先が俺にもむいているような

……

「そ、それにわたくしは優勝しなきゃいけないんですの！」

「セシリア！ あんたも、例の件を……！」

それに一夏の件もあつてか、やる気はMAXだろうな……。それでも、俺は簡単に負ける気はしないけどね。こっちだって練習してきたんだから。

『それでは、両チーム規定の位置へ』

試合開始を促すアナウンス。それに従って、セシリア達と距離を取る。

『5、4、3、2、1』

「簪、援護お願い！」

「……任せて」

試合開始とともに俺は加速する。接近戦向けの俺と、射撃武器がある簪。どっちが前衛をやるか、なんて簡単な話だった。というか、俺が後衛に向かないだけなんだけどね……

「来なさい、英治！」

激突するオーズカリバーと双天牙月。やはり相手の前衛は鈴であり、つばぜり合いとなる。金属音が鳴り響く中、俺は押されていた。パワー型の甲龍相手ではタトバコンボではパワーに向かないからだろう。

「くっ！」

思った通りに弾かれたのは俺だった。パワーにはパワーを。

『タカ！ ゴリラ バッタ！』

「メダルを変えたって！」

鈴がそう叫ぶなり、吹き飛ばされる俺。殴り飛ばされたような衝撃の中、俺は弾道、銃口の見えない衝撃砲への対応方法を考えた。た。

「さあ、おゆきなさい！」

「当たらなかったら、どうってこと、ない」

一方の簪は、後衛同士、セシリアとの打ち合いになっていた。セシリアの操作するビットを縦横無尽に飛びながらかわす簪。ビットの隙を狙って本体を狙うが、その行動を読まれていたのか簡単によけられる。

「……こうも、連続だと……」

ビームの雨の中、簪は呟いた。簪が苦戦しているのは、セシリアの成長が原因だった。俺や一夏と戦った時の欠点、ビットの操作中、本体は何もできない、を少しずつ克服していたからだ。一度に5つのレーザー。俺だったら、手も足も出ないかもしれない。

「こうなったら……」

何かを思いついた簪は地面に向かう。空中では360度警戒しなければいけないが、地面にいれば180度の警戒で済む。それに、簪には他にも手があった。目には目を。誘導兵器には誘導兵器を。

「……CLAWS、起動」

瞬間、翼等の装備が外れ、1つの形を作っていく。完成したそれはサソリのような外見。CLAWS・サソリ。CLAWSとは、バースの装備「Cannon, Leg, Arm, Wing, System」の略称で、プレストキャノン、キャタピラレッグ、ドリルアーム、クレーンアーム、シヨベルアーム、カッターウィングが含まれている。その各装備が合体したものがCLAWS・サソリ。本来のバースではセルメダルを多量に消費するから、多様はできないんだけど、ISで再現されたそれにはデメリットが少ない。強いて上げるのなら、翼もパーツの1部となっているため、飛行速度が落ちることであるくらい、かな。ちなみに動かし方はセシリアのビットと同じように操作するか、あらかじめ組まれたプログラムに従うかの2つ。

「な、なんですよ、それは!？」

簪が展開したCLAWS・サソリに目を丸くするセシリア。いや、セシリアでなくても初見の者ならそれに驚くと思うよ。

「……お願い」

簪の指示でセシリアに向かっていくCLAWS。さすがに飛行能力はないのか、右腕をワイヤーで飛ばす。

「そんなもの、あたりませんわっ!」

横に逃げるセシリア。けど、CLAWSもその方向に回転することで、追撃する。今度は上によける。そこに飛んでくるのは、左腕。2本の腕の攻撃をかわしながら、セシリアは距離を取った。相手の攻撃はワイヤー。その長さがどの程度のものかは知らないけど、距離を取れば届かないと思ったんだろう。

「この距離なら……ッ！」

C L A W sの射程外に来れたセシリアめがけて飛んでくる弾丸。セシリアがその方を向くと、銃を構えた簪がいたのだった。

「ビットは、壊した。後は、貴方だけ……」

やられた。セシリアが思ったのはそうだった。C L A W sによって自分に隙ができた。簪はそのタイミングを見逃さず、着々と1つ、2つとビットを落としていった。

「くっ、まだわたくしは負けてないですわ！」

セシリアもレーザーライフルを構える。お互いの銃口が狙いをつける。

ドガアアンッ！

壁に叩きつけられる音が響く。衝撃砲の直撃をまた受けた俺だけど、ただでは転ぶ気はしなかった俺は腕甲がないゴリラアームを見た。俺がぶつかった場所とは逆方向、そっちにも土煙は上がっていた。

「やってくれたわね……」

鈴もすぐさま浮上して、こっちに向き直す。カウンターとばかりに放ったバゴーンプレッシャーは彼女に直撃して、ダメージを負わせるのに成功したのだった。でも、シールドエネルギーの残量はこっちが負けている。

簪の方は順調にセシリアを追い詰めていた。とりあえず、女の子に活躍を取られるのは格好悪いかなあ、そう思った俺は気合を入れ直した。さあて、どうやって攻める？ 衝撃砲の回避は鈴の視線から予測するしかないとして、どうやって有効打を与えるか……、最初の切り結びでパワーではこっちの分が悪いことはわかってる。なら、スピードしかないよな。

『クワガタ！ カマキリ！ チーター！』

「ッ！」

鈴が反応するが、襲い。両腕の刃でダメージを与える。厄介な衝撃砲への対抗策としてはいちかばちかだけど、インファイトっていう手段もあるんだ。

「ちょこまかと！ あたりなさい！」

ガキーン！

連結した双天牙月を交差した両腕で止める。力押しされているけど、こういう時のためのクワガタだから！

「しびれるけど、ゴメン！」

「へ？ きゃあああああああ」

怪しい煙をあげ、バランスを崩す甲龍。絶対防御が発動したのか、鈴のシールドエネルギーはかなり減っていた。ここしかチャンスはないよね。

『スキヤニングチャージ！！』

加速しながら、電撃を纏ったすれ違いざまに両刃で切り裂く。鈴のシールドエネルギーはゼロになっていた。鈴に勝てたことにより、俺は着実にレベルアップしているのを実感していた。

激しい銃撃戦の中、簪とセシリア、両者のシールドエネルギーは減っていた。簪はCLAWSを解除して、カタールウィングを展開していた。空中での銃撃戦。弾丸、レーザー、ミサイルが入り乱れる戦い。

「……そこ！」

「きゃあ！ まだまだですわ！」

「！！！」

ブルー・ティアーズから放たれたミサイル。執念から撃たれたそ

れを簪はかわしきることはできなくて、煙があがる。

「やりましたの……？」

ライフルを構えたままセシリアは呟く。そして、気づく。煙の中、立っている影に。だが、簪のISは試合開始当初と様子が大きく違っていた。両腕、胸部、足。それぞれに装備があった。バース・デイ。CLAWSフル装備のそれは、簪が好きなアニメの表現で言えば、フルアーマーかな？

「これが、とっておき……」

クレインアームの先端に接続されたドリルアームを飛ばして攻撃する。対応が遅れたセシリアはその攻撃にあたり、ワイヤーに巻き付けられる。

「くっ、やってしまいましたわ……」

後悔をするセシリア。それとは反対に簪はセシリアをロックしたまま、ブレストキャノンのチャージを始める。

「ブレストキャノン、シユート」

セシリアが光の波に飲まれると共に試合終了のブザーが鳴る。俺は簪のそこに行く。

「おつかれ、簪」

「……うん」

自分のISで勝ったことが嬉しかった簪は嬉しそうに頷く。次は一夏の試合だな。

「お疲れ、英治、簪」

「ああ、ありがとう」

ピットに戻つてくると、一夏とシャルルがいて、スポーツドリンクをくれた。早速一口つと。

「一夏、調子はどう？」

「ああ、バッチリだぜ。ラウラの方が実力は上かもしれないけど、やるだけのことはやってくるさ」

「いや、そこは絶対勝つ、とか言おうよ」

「僕もそう思うよ」

「……同感」

3人に言われて、頭をかく一夏。すぐさま、「わかったよ」と言う。

「絶対、勝ってくるぜ！」

「……今更、言っても……」

「うんうん」

「アハハハ、じゃあ英治、行ってくるよ」

「ああ、頑張って」

「ふん、逃げずに来たとはな。まあ、いい。貴様はここで……」

「やれるのならやってみろよ。この前とは違うからな」

試合開始前から繰り広げられる舌戦。この決着がつかないまま、試合開始のカウントダウンが始まる。

「叩きのめす！」

ブザーと一緒に2人の言葉は重なった。

「おおおっ！」

瞬時加速をしながら雄叫びをあげる一夏。でも、それと一緒に嫌な予感が俺にはしたんだ……

撃ち合いとドつきあいとトーナメント開始（後書き）

やっとで始まったトーナメント。この調子で行けば夏休み、その後はいつになるのか（汗）これじゃ夏休みの風都編が……ゲフンゲフン、今のはなかったことに。

今回の執筆にあたって、亜種コンボの必殺技を確認（wikiで）したところ、こんな感じに……

頭…属性強化（水、光等）または視力等の強化。ただしサイは不明
腕…武器の強化。クジャクはギガスキャン。

脚…バツタはジャンプ。チーターは加速。タコは脚の固定。後は？
という具合になりました。劇中ではタカキリバ、ラキリバ、タカキリター、タカジャバ、シャゴリタしか使っていないので、推測多いですけどね。

チームワークとラウラの欲望とその代償（前書き）

予約投降する日にちを間違えて10/9にしていました。すみませんでした。以後気を付けます。

C o u n t t h e m e d a l s

オーズが使えるメダルは……

タカ

クワガタ

カマキリ

バッタ

ライオン

トラ

チーター

ゴリラ

チームワークとラウラの欲望とその代償

「おおおっ！」

「ふん……」

試合開始と共に瞬時加速する一夏。ボーデヴィツヒさんは動揺もなく右腕を突き出す。トーナメントの何日か前、ボーデヴィツヒさんの慣性停止能力『A I C』に対抗するための策が一夏にあることを話したのを思い出す。A I Cもエネルギー波なら零落百夜で切り避けることを。

「くっ……！」

だが、対策があるからってどうにかなるわけじゃなく、A I Cに止められる一夏。一夏がA I Cに対抗できるのはエネルギー波が雪片式型に当たったときだけ。おまけに一夏の動きは読まれやすいらしい。

「開幕直後の先制攻撃か。わかりやすいな」

「……そりゃどうも。以心伝心で何よりだ」

「ならば私がどうするかわかるだろう」

ボーデヴィツヒさんはレールガンの照準を一夏にあわせる。だが、一夏には焦りの表情はなかった。だって……

「させないよ」

ボーデヴィツヒさんの後ろからシャルルはアサルトカノン ガルムの引き金を引く。一夏のAICを解除して間合いを取るボーデヴィツヒさん。

「逃がさないよ」

ボーデヴィツヒさんと向き合ったシャルルは瞬時にアサルトライフルを展開する。戦場のリアルタイムに合わせた武器を瞬時に展開できるシャルルの特技、『ラビット・スイッチ高速切替』は遺憾なく発揮されていた。

「私を忘れてもらっては困る」

シャルルの追撃を阻むように立ちふさがる篠ノ之さん。専用機持ちではない彼女は打鉄を纏っていた。打鉄は防御に優れている。その照明のように盾で銃弾を弾きながら剣を振るう。

「それじゃ、俺も忘れないようにしないと！」

今度は一夏が割り込み、篠ノ之さんと切り結ぶ。何回か剣がぶつかっていくけど、その度に篠ノ之さんは後ろに押されていく。白式と打鉄の性能差が大きくでた瞬間だった。

「くっ、この！」

自分が不利なのに焦ったのか大振りになる篠ノ之さん。もちろんこのチャンスを見逃すはずはなく……

「シャルル！」

「うん！」

雪片で攻撃を受け止めた一夏が叫ぶ。それに呼応するようにシャルルはアサルトライフルを構えたまま篠ノ之さんの背後にまわる。

「はっ……！」

顔を青ざめるけど、もう遅い。シャルルは引き金を引こうとしていたから。

「！？」

突然、宙を舞う篠ノ之さん。どう見ても不可思議な軌道で篠ノ之さんはアリーナの端へ飛んでったけど、大丈夫なのか？

「邪魔だ」

篠ノ之さんを投げた張本人、ボーデヴィツヒさんは呟く。彼女のワイヤーブレードが篠ノ之さんを放り投げたのみたい。

「なっ、何をする！」

投げ飛ばされた篠ノ之さんは抗議をするけど、聞く耳を持たれず。ボーデヴィツヒさんは一夏をプラズマ手刀で追い詰めていく。その正確無比な攻撃に一夏は攻撃を凌ぐだけで精一杯って感じだった。シャルルはすかさず一夏の援護にまわろうとするけど、ワイヤーブレードに行く手を阻まれて、その回避ばかりになっていた。だけど、何回かその応酬が繰り返されると、シャルルは急に向きを変える。その視線の先にいるのは、篠ノ之さん。どうやら、一夏

がボーデヴィツヒさんの足止めをしている間にシャルルが篠ノ之さんを撃墜する。そうすれば安心して2対1でボーデヴィツヒさんと戦える。

「一夏が相手じゃなくてゴメンね」

「なっ……！？ バカにするなっ！」

激昂した篠ノ之さんの一撃を右手に展開した近接ブレード ブレツド・スライサー で受け止めたまま、左手のアサルトライフルの照準をあわせる。

「くっ……」

ロクな回避行動を取ることもできなくて、篠ノ之さんのシールドエネルギーは減っていく。

「先に片方を潰す戦法か。いい戦法だな、だが無意味だ」

追い詰められている篠ノ之さんに興味を示さずに、一夏への攻撃を続けていく。自分の武器がブレードだけ、離されたら一気に決められることがわかっていいるから、一夏は必死で食らいついていた。

「うおおおお！」

自分に気合を入れて、高速近接戦闘を続けていく一夏。お互いの武器が交差する金属音が一定のリズムでフィールドに響いていく。

「……そろそろ終わらせるか」

その言葉と共に一夏の動きは止まる。一夏は動こうと足掻くが、体は少しも動かすことはできない。一夏はマズイなって顔だけど、アリーナ全体を見ることが出来る俺は戦いはまだまだ続くことがわかっていた。

ドンッ！

「がっ………！」

響きわたる銃声。ボーデヴィツヒさんがダメージを受けると同時に一夏は動けるようになる。そして一顆の隣に降り立つ影。

「お待たせ、一夏！」

「サンキュ、助かったよ」

篠ノ之さんを下したシャルルが合流してから、一夏の反撃は始まる。一夏の突撃をサポートするシャルル。ワイヤーブレードを撃ち落とすなどで、道を作っていく。

「一夏！」

「おう！」

加速する一夏。零落百夜が当たるとヤバいことはわかっているボーデヴィツヒさんは右手を突き出し、AICを発動する。度重なる零落百夜の使用、試合初期のダメージと重なって白式のシールドエネルギーは残り少ない。後1発くらえば、撃墜だろう。それを理解しているボーデヴィツヒさんは口元に冷笑を浮かべる。

「これで終わりだ」

「ははっ、大事なことを忘れてるぜ。これは2人組なんだぜ」

「なっ！」

「これでっ！」

シャルルは右腕のシールドをボーデヴィツヒさんに押し当てる。シャルルのISが何なのか、それに気づいたボーデヴィツヒさんは焦りの表情を見せる。瞬間、縦の装甲がはじけ飛び、リボルバーと杭がついた装備が現れる。ノットパニッス……『盾殺し シールド・ピアース』。受業で習った第2世代最大の攻撃力を誇る武器。

ズガンッ！ズガンッ！ズガンッ！

「がっ……ぐっ……」

盾殺しの連射にシールドエネルギーがごっそり減っていく。誰が見ても、シャルル達の勝利だった。でも、何だろ、この近づいてくる嫌な予感……

（私はここで負けるのか……？ 織斑一夏、そして火野英治を倒すこともなく？）

自分の敬愛する教官に泥を塗ったアイツを。教官―織斑千冬は最初に自分を認めてくれた存在だった。そしてそんな存在だから、憧れ、近づく、いや、彼女になりたいと願う。一度、千冬に強さの理由を聞いてみた。同じことをすれば彼女に近づけると思って。だが、千冬の特別は弟だった。弟―織斑一夏だけが千冬に特別な表情をさせる。それが許せなくて完膚なきまでに叩き潰すことを決めた。それなのに、火野英治に負けた。自分の強さを見せれば自分の敬愛した教官が帰ってくると思ったから。

（お前、力が欲しいんだよなア。だったら望め。そうすりゃ手に入るぜエ）

頭に響く声。力が欲しいラウラは迷うまでもなく、力を望む。それが、人に許されることのない力とは思わずに。

「あああああああああ！」

突然、身が叫んばかりに叫びだすボーデヴィツヒさん。その体からは、銀色のメダルが流れ出す。

「織斑先生！ アリーナの遮断シールドの解除を！ 早く！」

『わかった、後で説明してもらっぞ』

すぐさま、アリーナに降りる。どうしてこの世界にヤミーが!?

「英治、アレは一体なんなんだよ? ラウラから突然メダルが……」

「一夏は下がっていて、ここからは俺のやることだから」

ヤミーの足元に倒れるボーデヴィツヒさんを見つめる。彼女は自分の過ちに気づいたのだろうか、その体は震えていた。次にヤミーに目をやる。ワニのようなヤミー。ワニが5体のグリードのどれにも該当しないことに疑問を感じたけど、今はそれどころじゃないから!

「どこに行っても、人の欲望は消えないし、利用するやつはいるのか。変身!」

「タカ!トラ! バッタ! タ・ト・バ タトバ タ・ト・バ!」

トラクローで切りかかる。が、しかし、ワニヤミーには大したダメージは与えられないみたいで、相手が軽くよろめいただけだった。何てパワーだ、こいつは……

「織斑一夏を……火野英治を……倒すっ!」

ワニヤミーは叫ぶ。俺と一夏を倒すって。つまりボーデヴィツヒさんの欲望はそうだったってこと。俺が狙われるのはラトラーターでボーデヴィツヒさんに勝ったからだろう。一夏が狙われるのは……事情はわからないけど、ボーデヴィツヒさんが因縁みたいないなことを言っていた。それで、一夏を消そうと……

そんなことはさせない！　そう思つて格闘、つまりパンチやキックの応酬で立ち向かうけど、相手には大したダメージを与えてる気がしない……。元々ワニつて動物はイメージに似合わず、足が速いし、そのアゴの噛み付きはあがいても逃げることはできない。その能力はヤミーになつても充分に発揮されるから、かなりの強敵だ。おまけにアリーナはシェルターこそかかっているが、コイツが暴れると他の皆が危ない。アリーナの外に行けばコイツに対抗できる手段があるのに。

「はあ！」

右ストレートを打ち込む。だが、その拳は簡単に止められて首を絞め上げられる。

「あ、ぐっ……！」

片手で持ち上げられる。地面に足がつかず、首も絞められていて力が入らない。おまけに右腕は掴まれている。どうする？

「英治！！！」

刹那、シャルルがヤミーの背中にアサルトライフルを撃ち込んだ。やはりダメージは与えていないけど、今のショックで首絞めから脱出はできた……

「英治、大丈夫？」

「ああ、ありがとう、シャルル。助かったよ」

ヤミーと距離を取ったところで近くに来るシャルル。このアリー

ナに居るのは、俺、シャルル、一夏、ボーデヴィツヒさん、篠ノ之さんだけど、シャルル以外の3人は試合でISのシールドエネルギーは尽きている。早く退避してもらわないと。

「一夏！ 篠ノ之さんとボーデヴィツヒさんを連れてアリーナから出て！ シャルルはその援護を！」

「……ああ、わかった。箒、ラウラ、行くぞ」

自分が何もできないことに悔しそうな一夏。でも、自分ができることはそれくらいだと分かっているからこそ、すぐに行動にする。シャルルに目をやる。シャルルは頷いて、一夏達の近くに行く。これで、安心してコイツと戦えるな。ガタキリバで一気に行くか？ それともトラクターで？ 考えながらも格闘戦を続ける。拳やクローがぶつかり合い、火花が散り、倒れ、転がる体。とりあえず一夏達が早く避難してくれれば……

「キシヤアアアアア！」

そんなときだった、一夏達の方に空から飛来してくる何かが来たのは。

赤く、肩に扇の様に広がる翼。鳥のような顔。飛来したのはクジヤクのIG。ソイツが来た場所は運悪く、一夏達が出ようとした出口の前だった。

無言で手を突き出すクジヤクIG。その手から放たれてのは火炎弾。生身の人間が当たったら冗談じゃないことになる威力のはず。

「皆、危ない！」

それにいち早く対応したシャルルはラファールの盾を構え、一夏達の前に立つ。だが、ギリギリとシャルルが駆るラファールは後退していく。

「うわぁああああぁ」

火炎弾は防げはしたもののシャルルまでがISを解除されてしまふ。……このままじゃマズイ。焦る俺の心情は関係なし、クジャクIGは一夏達に近づき、その爪を降り下ろそうとする。

「させてたまるかぁー！ー！ー！」

『タカ！　トラ！　チーター！』

タカトラーターとなって、一夏達とIGの間に入る。そして、すぐさま降りおろされ爪。

「がつ……」

切り裂かれた俺は、転がり、そして倒れる。メダルは飛ばされてなくて、変身は解かれてないけど、この体力じゃコンボはできなさそうだな。

「ぐう……ハア……ハア……まだだ」

誰の目から見てもボロボロ。一夏は「俺達に構わず逃げろ！」って叫んでる。結構キツいなあ……。目がくらんできた。それでも、俺は立ち上がる。後悔だけはしたくない。手が届くなら伸ばす。届かなかったら誰かの手を掴んで、届く距離を伸ばす。そんな譲れないもの、守りたいものがあるから、まだ立てるんだ。

フラッ。立ち上がるけど、よろめく。でも、構えを取る。来るなら、来い。俺はそう簡単には負けないから。

2体の怪人は駆け出して来る。そんな時だった。空に道ができていたのは……。そして響くのはバイクのエンジン音。

「伊達明、参上！」

現れたのはタコカンの道を使い、ライドベンダーで現れた、伊達さん、いや、バースだった。

チームワークとラウラの欲望とその代償（後書き）

次回、皆大好きあのマシンが登場！

ところで、本小説で出したオリジナルの爬虫類グリード、ワース。彼のコアメダル、コブラ、カメ、ワニについてですが、そのメダルは他のタカやバツタと亜種形態になっていいでしょうか？ オーズ本編ではそんな描写は無かったですし、一般には爬虫類メダルは亜種ができないって見解が大多数です。もしかしたら、自分が気づいてないだけで、公式でできないって断言してるかもしれません。そういうわけで、爬虫類メダルはブラカワニ専用か、亜種可能にしているか、意見を貰えると嬉しいです。他にも感想等お待ちしております。 それでは、また次回。

乱戦と逆転と超マシン（前書き）

C o u n t t h e m e d a l s

オーズが使えるメダルは……

タカ

クワガタ

カマキリ

バッタ

ライオン

トラ

チーター

ゴリラ

乱戦と逆転と超マシン

「火野、大丈夫か？」

ヤミーとIGをライドベンダーで弾き飛ばして、俺の方に来る伊達さん。これで2対2、頭数は同じだけど、俺は結構辛いなあ。でも、やるしかないでしょ。

「こっちの鳥が噂のグリードもどきか？」

その問いに頷く。

「だったらえぐり取った方がいいよな。ヤミーの方はよろしく！」

『ドリルアーム』

そう言っただけで伊達さんはクジャクの方に突っ込んでいく。じゃあ俺はヤミーの方を。とりあえずバランスから考えてタカトラーターからタトバに戻しておく。

「ハッ！ セイヤツ！」

メダジャリバーで攻撃をしかける。斬るたびにセルメダルが散らばっていく。この調子なら、いける。

『スキヤニングチャージ！！』

「ぐっ……はああああああ、セイヤーーーーー！」

よるめいたけど、バッテリーに力をこめて、飛び上がる。そして両足を突き出しながら3つの光の輪をくぐっていく。これで決める。そう思っただけで出したタトバキック。でも……その一撃は相手に受け止められていた。

ジャイアントスイングをされて、壁に叩きつけられる。多分、トバキックが当たらなかったのは、俺が跳ぶタイミングとか力を入れるタイミングをミスったからだ。これじゃ、他のスキャニングチヤージも上手く当てれるか微妙だな……何か、いい方法は……？

そう考えていた俺の目に写ったのはライドベンダー。あれなら、俺の負担にならないいい方法が……

。 だつたら有言実行。

ワニヤミーが近づく前にライドベンダーの元に行く。手間だけど、ライドベンダーを自販機に戻してとあるカンドロイドを取り出す。そしてライドベンダーはもっかいバイクにする。その後、カンドロイドをライドベンダーに入れると、そのカンドロイドは大きくなり、前輪となる。

途端に猛獣のような雄叫びをあげるライドベンドー、いや、トライドベンドー。ラトラーターにしか制御できなくて、なおかつ、そのコンボの負担をなくすマシン。

さて、反撃開始だ。

「オラア！」

一方のバースは、ドリルアームで戦いを繰り広げていた。ドリルで突くだけでなく、振り回す等の荒々しい戦い方となっていた。バースの猛攻により、IGからはセルメダルが飛び散っていく。

「あれ、中々落とさねえな」

コアメダルを落とさないIGにそんなことを言いながらもバースは攻撃の手を緩めない。というか、緩めたらいけない。相手はクジヤクであり、飛べるはず。バースにもカッターウィングがあるが、伊達はマニュアルを読んでいないので、その制御方法を理解していないのだ……

「キシヤア！」

クジヤクIGはそのことに気づいたのか、突然飛び上がる。

「げ。お前、飛ぶなんてずるいだろ。後藤ちゃんならウィングの使い方ちゃんとわかってるんだろうな」

そんなことを考えてはいるが、伊達は今後もマニュアルを読むこ

とはないだろう。医者としてそれはどうなのだろうか……？

「だったらコレだな」

『クレーンアーム』

クレーンアームから放たれてワイヤーがクジャクIGの足に絡みつく。

「おりゃあああ！！」

バースはそれを力一杯振り下ろす。鈍い音をたてながら地面に激突するIG。だが、また飛ばれたら厄介だと、バースは追撃を開始する。

『シヨベルアーム』

左腕に装備されたそれで伊達は殴りかかる。バース最大の出力を持つシヨベルアームで殴られたIGは大量のセルメダルをばらまきながら、後ろに吹っ飛ぶ。

「さーて、コイツで決めるか」

セルメダルが多量に入ったセルバレットポッドをバースバスターのフラッシュヤーノズルに取り付ける。

『セルバースト』

「おりゃあああああ！！」

放たれた光弾はクジャクIGによける隙も与えなかった。光の奔流に飲まれたIGは断末魔をあげて、爆散する。バースは敵を倒したのを確認してクレーンアームを展開。そこら中に散らばるセルメダルを回収し、クジャクのコアメダルは手に取る。

「火野の方はつと、大丈夫だな」

視線の先にはヤミーが猛獣に振り回されている光景だった。

トライドベンダーは走るのではなく、駆けるように進んでいく。メダル型の光弾を撃ちながら、ヤミーに飛びかかる。俺の攻撃は大して効かなかったヤミーもトライドベンダーの突撃には吹き飛ばされる。

「火野英治……倒す。力を…強さを…あの人のように……」

執念のようなものでワニヤミーは立ち上がる。でも、その姿は見ていて苦しかった。俺のせいで生まれたとも言えるヤミー。だからこそ、俺がそれを間違っているって伝えるために倒さなきゃいけないんだ。

トライドベンダーによって大きなダメージを負ったにも関わらず、ヤミーはこっちに近づいてくる。

「本当の強さは、誰かを倒して証明するものでもないし、強い人の

真似でもないはずなんだ。大切なのは、自分でどうありたいのか、どうしたいのか。その想いを貫き通すことなんだ！」

叫んだ後、メダジャリバーにセルメダルを入れて、加速したトライドベンダーの上に立つ。

『トリプルスキヤニングチャージ!!』

「ガアアアアアアア!!」

「はあああああ、セイヤー……!!」

すれ違いざまにぶつかるヤミーの爪とメダジャリバー。だが、その拮抗は一瞬だけで、爪は砕け、メダジャリバーはヤミーを切り裂く。

「力を…力をおおおお」

ヤミーの叫びはただ純粹な願いであり、その断末魔は虚しく響いた。

「ふう、何とか、倒せたな……」

「ああ。お前は俺が戦うに値する存在だってことはわかったぜエ」

「!？」

後ろから聞こえた声に振り向いた瞬間、激しい痛みが体に走る。変身が解除され、地に倒れる。視界に写ったのは見たこともないグリードだった。

「俺の名はワースだア。今は挨拶代わりだア。これは貰っていくぜエ」

ワースと名乗ったグリードの手にはライオンとチーターのコアだった。

「だったら、こっちも挨拶させてもらうぜ」

ワースの後ろから聞こえる何かが回転する音。そして飛び散るメダル。声の主、バースはドリルアームをワースに突き立てていた。

「ぐっ、俺のコアが……まア、いい。またな、オーズ」

そう吐き捨ててワースは去っていった。今の状態じゃ勝てる気がしなかったから帰ってくれただけよかったのか……？

「火野、立てるか？」

「はい……な、何とか……」

そう言っ て来た伊達さんに渡されたのはクジャクのコアと見たこともないメダル。カメだな、これは。ということはあのグリードは爬虫類ってことなのか？

「英治、大丈夫？」

「そうだ。お前大丈夫なのかよ？」

「うん。大……丈……」

駆け寄ってくる一夏達に大丈夫、そう言おうとしたけど、俺の意識は途切れたのだった。

「おい、火野!？」

「英治、しっかりして!」

「英治、おい、英治!」

火野英治。アイツと比べたら私は……弱いだろうな。ラウラは保健室のベッドの上で考えていた。自分が求めていたものが彼女はわからなくなっていたのだった。

「大丈夫か？」

「……教官」

そんな彼女の元にやってきたのは彼女が敬愛する織斑千冬だった。

「ここでは、織斑先生と呼べ、そう言ってるだろう」

「……私が、望んだからこんなことになったのですね。あのグリードというやつに利用されて……私が、望んだから」

あなたになることを。口には出していなかったが、千冬はラウラが言いたいことがわかっていた。

「ラウラ・ボーデヴィツヒ！」

「は、はい！」

急に自分の名前を呼ばれ、驚きの声をあげる。

「お前は誰だ？」

私は…誰なんだ……？ 何が言えるのか、彼女にはわからなくて、沈黙が続いた。

「誰でもないのなら、ちょうどいい。お前はこれからラウラ・ボーデヴィツヒになるがいい。何、時間は山のようにあるぞ。なにせ3年間はこの学園に在籍しなければいけないからな。その後も、まあ死ぬまで時間はある。たっぷり悩めよ、小娘」

「あ……」

口を開けたままポカンと固まるラウラ。彼女は千冬に励まされるなど、予想外のことだったからだ。

「ああ、それからお前は私にはなれないぞ。アイツの姉も、コイツの教師も疲れるからな」

退室しようとした千冬は付け足すように言った。コイツ、隣のベッドで眠る英治を指しながらのことだった。

「ふっ、はははは」

憑き物が落ちたように笑う。ラウラ。自分で考えて行動する。ラウラ・ボーデヴィツヒはこれから始まるのだ。まずは英治が目覚ますのを待つ。彼と話してみたいことがあったからだ。

「ん、ここは……」

「気づいたようだな。火野英治」

「ボーデヴィツヒさん……？」

目を覚ましたらそこにいたのは予想外の人物だった。

「まずは、お前に謝る。私があんなことを望んだからお前は命の危険にあった。私のせいだ。すまなかった」

「自分が悪いって分かったのなら、俺には言うことはないさ」

そう言ったら予想外だ、そう言わんばかりの顔をされた。

「それで、火野英治。1つ聞いてもいいか？」

聞きたいこと？ 何だろ？

「お前は何かを貫き通す想いが強さだと言った。私にもやりたいことは見つかるのだろうか？」

聞きたいことは、そんなことなのか。

「見つかるさ。今すぐ、とは限らないけどね。まだまだ人生は長いからさ、ゆっくりと探していけばいいよ。それに俺がいる。困ったらいつだって手を貸すからさ」

「……そうか。なら、見つけてみせるさ。私自身も、やりたいことも」

そう言って立ち上がるボーデヴィッヒさん。そのまま彼女は保健室から出ていこうとする。

「ああ、お前のおかげで何かに気づけた。礼を言つ、英治」

「うん、どういたしまして、ラウラ」

乱戦と逆転と超マシン（後書き）

やっとでトーナメントが終了。長かった……

アンケートで参戦が決まった龍騎とカブトの出番が遠すぎて泣きそう。

話は変わりますが、この3連休で特撮のDVDを結構借りました。「レッツゴー仮面ライダー」や「ウルトラマンゼロ」だったり。後、よう〇べで「リユウケンドー」の序盤を見直したり。↑何やってんだ大学生！？ 教訓は夜中に特撮の映画を見るとテンション上がって寝付けなくなることでした。

それでは、要望、感想等お待ちしております。

大浴場とキスとマウストウマウス（前書き）

C o u n t t h e m e d a l s

オーズが使えるメダルは……

タカ

クジャク

クワガタ

カマキリ

バッタ

トラ

カメ

大浴場とキスとマウストウマウス

「うわぁあああぁん」

「チャンスが……」

トーナメントが中止になった、そういう連絡があつてから学園中が暗い雰囲気になっていた。今、シャルル、一夏と学食にいるんだけどここもそんな雰囲気だった。ところで、チャンス？ 何かあつたんだっけ？ アレ、何か忘れているような……

「……………」

学食中を見回すと呆然と立ち尽くす篠ノ之さんがいた。ん、篠ノ之さん？ あ、優勝した人が一夏と付き合えるってやつかな。すっかり忘れてた。

「英治、ちょっと行ってくる」

「ん、ああ」

篠ノ之さんのところに行く一夏。

「なあ、箒。この前の約束のことだけど……」

ピクッ

あ、反応した。

「付き合ってもいいぞ」

「……！ ほ、本当か！？」

「ああ。幼馴染の頼みだもんな、いくらだって付き合っただろ」

「そ、そうか」

ん、何か会話が成り立っていないような気がする……

「買い物くらい」

「……………」

再び固まる篠ノ之さん。あの、表情怖いんだけど。

「おい、箒。どうした？」

「……………」

「だから、箒、どうしたんだよ？」

篠ノ之さんから黒いオーラが出てるのは気のせいだよ。気のせいって言うてくれよ、誰か。シャルルに目をやるけど、黙ったまま首を横に振られた。

「そんなことだろうと思ったわ！！」

どげしっ！ そんな鈍い音をたてながら一夏の体は宙に浮く。思

いつきり蹴られたのだ、一夏は。

「僕、一夏ってわざとやってるんじゃないかなって思っただけど」

「うん、まあ、そうかもね」

苦笑いしながら答える。まあ、本人は唐変木だからね……

「な、何の話してるんだよ……くっそー、幕のやつ、思いつきりやがって。俺は約束を守ったはずなんだけども……」

「……………」

絶句する俺達。正直言ってなんて言ったらいいのかわからなかったから。

「あ、織斑君達、3人ともここにいましたか。さっきはお疲れ様でした」

「山田先生こそ。ずっと手記で疲れませんでしたか？」

「いえいえ、私は昔からあいつた地味な作業が得意なんです。心配には及びませんよ。なにせ先生ですから」

えへん、と胸を張る山田先生。もちろん揺れる。何がって言わないけど、男の子だからか、俺と一夏の視線はそこに行ってしまう。

「2人のスケベ」

「ちよっとちよっと、誤解だよ、シャルル」

「そうだ、それは誤解だ！」

機嫌が悪そうにぼそつと呟くシャルル。とりあえず誤解を解かなきゃ、って、目で追ってたのは事実だから……。いやいや、そうじやなくて……

「？　どうかしたのですか？」

「いやいや、何でもありません。それで先生、何か用事があったんじゃないんですか？」

「そうですか。それより朗報です！」

「「朗報？」」

朗報って何かあったわけ？　俺達が頭に「？」を浮かべてるのも気にしないで、山田先生は話を続ける。

「なんとですね！　今日から男子の大浴場使用が解禁です！」

へえ、大浴場が使えるようになったのか。そうか、そうか、それはよかったのか……。な。シャルルと目が合って絶句する。どうしよ？　そんな俺達のことを気にせず、一夏のテンションは上がっていく。

「ありがとうございます、山田先生！」

山田先生の手をガシッと握る一夏。その一夏のテンションに山田先生はついていけないっていうより、顔を赤くしているような……

「先生と生徒ですし……でも、織斑先生が義姉なのは魅力的ですけど……」

そんな呟きが聞こえたのは気のせいってことにしておこう。うん、それがいいはず。

結局、山田先生は大浴場で待つてるから着替えとか持って来て。そう言っただけで去っていた。

「さ、行こうぜ。英治、シャルル……あ」

やっとで大事なことを思い出す一夏。こういつのってどうすればいいんだろ？

「あ、来ましたね、一番風呂ですよ。それじゃあどうぞ」

「ごゆっくり」と言っただけでドアを閉める先生。結局、何も案が思い浮かばなくて3人で来てしまった。

「「「……………」」」

沈黙。それが何分か続いた後、一夏が口を開いた。

「シャルルは疲れてるだろ？俺と英治はここにいるから風呂入って来いよ。俺達は時間潰したら部屋に戻るからさ」

「え？ 2人はどうするの？」

「俺は部屋のシャワーで我慢するさ。男女が一緒に風呂に入るわけにもいかないからさ」

「俺もシャワーでいいよ。それに旅をしていたからさ、大抵はシャワーで済ませていたよ」

一夏も俺と同じく、こういう時は男子が譲る、そういう考えになってシャルルに風呂を勧める。せっかく使えるようにしてくれた山田先生には悪いけどね。

「い、いいよ。それに僕、あんまりお風呂って好きじゃないんだよね。だからさ、2人が入ってきなよ。一夏はお風呂好きなんじゃない？」

「好きだ！」

急に叫ぶ一夏にびっくりする。一夏の風呂に対する想いはわかったからさ、落ち着きなよ。

結局、シャルルに押し切られる形で一夏は大浴場に入っていたのだった。

「英治はいいの？」

「ん、まあね。女の子を置いて入るのも気が引けるし、そこまで風呂には執着してないからね」

「そ、そうなんだ……（女の子扱いしてくれてるんだ……エヘヘ）」

結局、雑談をして時間を潰してから部屋に戻ることに。山田先生には一夏が長風呂だって説明して。

で、どうしてこんなことになったんだ。シャワーを浴びて布団に入る。ここまではいいんだ。ただ、背中に柔らかくて暖かい感触が……

「って、シャシャシャシャル、ななな何してるんでございましてしょうか？」

落ち着け、自分にそう言い聞かせるけど、無意味。心臓の鼓動が大きくなっているのがよくわかる。

「その……大事な話があるんだ。英治に聞いて欲しい……」

「わ、わかった」

大事な話、そう言われて気持ちを切り替える。

「その……僕ね、英治が言ってくれたようにここにいようと思う。僕はやりたいことを見つけられてないし、それに……」

「それに？」

「……………」

少しの沈黙。次のシャルルの言葉を待っているうちに、シャルルは俺を後ろから抱きしめた。感じられるシャルルの鼓動。その鼓動は緊張なのか、早い気がした。

「英治がここにいるても大丈夫。僕に手を伸ばしてくれる。だから、ここにいれる、いや、いたいんだ」

「……………そうか」

シャルルが自分でやりたいことを決める手助けになったのなら、それは嬉しかった。俺の伸ばした手が誰かを助けられたのなら……

「それだけじゃないよ。もう一つ、やりたいことはあるんだ」

「？」

「ふふつ、まあ、英治はそんなに気にしなくていいよ。……………いや、でも、気にしてくれた方がいいのかな……………」

首をかしげると、シャルルは軽く笑った。その後はよく聞こえなかったけど。

「それとね、英治。お願いがあるんだ」

「お願い？」

「うん、シャルロット。それが僕の本当の、お母さんがつけてくれ

た名前。これからは2人きりのときだけでもいいから、その名前で呼んでくれる？」

「うん、わかったよ、シャルロット」

「うん」

嬉しそくに返事をするシャルロット。自分の大事な人につけてもらった名前だからかな。

「ところで、シャルロット。いつまでこの体勢なのかな？ このままだと、ちょっと……」

今の体勢、というか状況は夜、暗い部屋、同じベッドで密着。

「あ、ああっ、うんっ！ そ、そうだねっ！」

言われて今の状況を冷静に考えたのか、いそいそとベッドから出ていくシャルル。その声は恥ずかしそうだった。

「ね、ねえ、英治。最後にいい？」

「ん？」

チュッ

その瞬間、ほっぺに優しい感触がした。何が起きたのかを把握するまで、時間はかかった。

「シャ、シャルロット？」

「お、おやすみ、英治！」

「ああ、うん、おやすみ」

その夜は色々と考えてしまい、中々眠れなかった。後で聞いた話だけど、シャルロットも眠れなかったみたい。

同時刻。ラウラはISのプライベート・チャンネルを開いていた。相手はドイツのIS配備特殊部隊『シュヴァルツェア・ハーゼ』。通称『黒ウサギ隊』。

『受諾。クラリッサ・ハルフォーフ大尉です』

「ら、ラウラ・ボーデヴィツヒ少佐だ」

突然の自分の隊長からの通信に疑問を感じながら応えるクラリッサ。ラウラは自分の部下とは仲良くなかったため、通信が来たことは本当に謎だった。

『ラウラ・ボーデヴィツヒ隊長。どうかなさったのですか？』

「ああ、クラリッサ。お前に頼みたいことがあるのだが……」

『なんでしょうか？』

「その……言いにくいことだが、私には頼れる人がお前達しか思いつかなくてな……」

急に声が小さくなるラウラ。一体この人は何が言いたいんだろう？ クラリツサはそんなことを思いながら聞いていた。仲良くない人でも軍では上司の命令は絶対だから。

だが、その思いは大きく裏切られることとなった。

「す、好きな人ができたんだが、どうすればいい……？」

『は！？』

想定していた問題の斜め上に行く答え。それにクラリツサは固まった。今、自分の隊長はなんて言った？ 好きな人ができた、だと。

『隊長、それは織斑教官ではなくて？』

「ああ、教官は憧れだが、それとは違うんだ。その、アイツは……
／／／」

恥ずかしくなったのか、声が小さくなるラウラ。その光景を想像してクラリツサは鼻血がでそうな衝撃を受けた。元々ラウラの容姿はかわいいに分類されるタイプである。ただ、性格や眼帯がそれを打ち消しているのであって。クラリツサが想像したのは、小動物をイメージさせる雰囲気で、頬を赤くしてモジモジしているラウラ。

そんなのを想像した途端、冷水とまで呼ばれたラウラのイメージはどっかに消えてしまった。そして、クラリツサは思う。どうしてこんな可愛い生き物ともっと仲良くしておかなかったのだろうか、

と。

『お任せ下さい、隊長。このクラリツサ、伊達や酔狂で日本の少女漫画を愛読しているではありません。必ず隊長のお役にたつてみせます』

「おお」

期待に満ちた声をあげるラウラ。そんなラウラにクラリツサは自分の持てる知識を教えていく。

英治達とは違うが、こっちも眠れない夜だった。

翌日。シャルロットの姿は朝のHRには無かった。朝食を取った後、シャルロットが「先に行つてて」つて言つたから教室に来たんだけど、山田先生が来たときにまで、彼女は姿を見せなかったのだつた。

「み、みなさん。おはようございます」

なんだか疲れた様子の山田先生。何かあつたのかな？

「今日は、ですね。皆さんに転校生を紹介します。転校生といいますか、すでに紹介は済んでいるっていうか、はあ……」

歯切れの悪い言い方の山田先生。本当に何があったんですか！？
そんな山田先生とは逆に転校生って言葉に反応するクラスメイト。

「では、入って、来てください」

「失礼します」

その声を聞いた途端、クラス中が固まった。教室に入ってきたのはスカート、つまり女子用の制服を着たシャルロットだったから。

「シャルロット・デュノアです。皆さん、改めてよろしく願います」

ペコリと礼をするシャルロット。山田先生は「部屋割りが……」とかブツブツ言い始め、クラス中は「デュノア君って女子だったの！？」とか、「昨日、男子が大浴場使ったよね」。そういう話となった。あれ、嫌な予感が……

バシーンッ！

ドアが壊れそうな勢いで開かれた。そこにいたのは甲龍を纏った鈴。彼女は方で息をしていた。

「一夏っ！ 死ねっ！……！」

ここで話は変わっちゃうけど、座席の説明をしよう。俺と一夏は現在隣同士だよ。そんな時に衝撃砲を撃ったら……って、ちよつとちよつと、落ち着いて、鈴！ そんな中、放たれた衝撃砲。

あ、これ死んだな。そう思って目を閉じた。想い浮かぶのは今までの人生。

だが、いつまでたっても、衝撃は来なかった。おそろおそろ目を開けると、そこにはシュヴァルツェア・レーゲンを展開したラウラがいた。

「助かったよ、ラウラ」

そう言った途端、胸ぐらを掴まれてラウラに引き寄せられた。

「ラ、ラウ……むぐっ!？」

重なる俺とラウラの唇。え？ どういうこと？

「お、お前は嫁にする！ 決定事項だ！ 異論は認めん！」

そんなことを言ってるが、俺の耳には届かなかった。えゝと、何がどうなってるの、本当に？

「初めてだったのに……」

轟音や爆音響きわたる教室で、俺はただ1人固まっていた。

大浴場とキスとマウスとウマウス（後書き）

MOVIE大戦に影響されて……

「花火大会？」

「うん。その街のタワーで写真を取るといいことがあるんだって」

夏休み、とある街に遊びに行く英治達。だが、そこは……

「もっと、僕を楽しませてよ」

『ULTIMATE』

「あれは、ドーパント？」

現れたのは10体の怪人。そいつらは最強とも呼べる力を持っていた

「うわぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ」

「英治ーーーーー!!」

倒れるオーズ

「さぁ、お前の罪を数えろ!!」

だが、現れたのは……

「後悔だけはしない。俺はそう決めたんだ。だから、戦うよ」

「いくぜ、相棒」

「ああ」

「」「変身！」「」

立ち上がるのは2人の仮面ライダー。この戦いはどうなるのか……

仮面ライダー×仮面ライダーNOVEL大戦エクストリーム
その内やるかも……？

予告？

「ここが、新たな世界か」

突如現れた謎の男。記憶のない彼は……

「やつは破壊者だ。絶対に倒さなければいけない」

「貴方は一体？」

英治の前には預言者を名乗る男も

「こいつはなんだ？ ヤミーでもグリードでもないらしいな」

「変身！」

『KAMEN RIDE ……』

「ちよつとくすぐつたいぞ」

「え!？」

仮面ライダー×仮面ライダーNOVEL大戦DESTROY
コレ、本当にやるの？

ごめんなさい、調子乗りました。

それでは、意見、要望、感想等お待ちしております。

妄想と追跡とバースバスター（前書き）

C o u n t t h e m e d a l s

オーズが使えるメダルは……

タカ

クジャク

クワガタ

カマキリ

バッタ

トラ

ゴリラ

カメ

妄想と追跡とバースバスター

「ゴメンね、手伝ってもらっちゃって」

「気にしないで。困ったときはお互い様だしね」

放課後の廊下、夕日が差し込む中を英治とシャルロットは歩いていた。2人の手には、大量のプリントがあつた。学校行事である臨海学校について書かれたプリントが。

「でも、よかつたの？ 英治、臨海学校の買い物に行くんじゃないかな？」

「別にいいよ・大体、シャルロットがいないんじゃないかな？」

「えっ？」

シャルロットはその声に驚きをあげた。英治の顔はわずかに赤く染まっている。

「ま、まあ、プリントの手伝いでも好きな娘と一緒にの方がいいってことだよ」

「英治、それって……」

「うん、シャルロット……」

「英治……」

見つめ合う2人。徐々にその影は重なっていき……

「——あれ？」

そこでシャルロットは目を覚ました。ベッドから起き上がり辺りを見回すけど、そこは寮の自室で、朝。先程の光景とはかなり違うものであった。

「夢か……」

ハア〜と深いため息を吐く。どうせ夢ならもつと……

「……………」

さっきの続きをイメージする。重なるのは2人の唇。そして……

「な、何を考えてんだろうね。僕は……」

赤くなつた顔を横に振り、冷静さを取り戻そうとするけど、さっきの夢が頭から離れなかった。

「はあ、アレ？」

ふと、隣のベッドを見ると、そこは黒いオーラが溢れていた。ラウラ・ボーデヴィツヒ。それがシャルロットの同居人だ。先日のトーナメントでは敵対していたのだが、シャルロットの人当たりがいとおかげか、すぐに仲良くなれたのだ。

「えっと、ラウラ、どうしたの？」

「ああ、嫁のどこに行っただが、いなかったのだ。全く夫を放って勝手にどこかにいくとは……」

「アハハハ……英治はラウラの嫁じゃないと思うけど……」

苦笑いしながら「ラウラの」を強調して訂正するシャルロット。しかし、訂正するところが微妙に違うのは気のせいだろうか。先程の夢のせいで、シャルロットは頭が回らなかったのかもしれない。ラウラのせいで目は完全に覚めてしまったため、2度寝をするわけにもいかなくて、シャルロットはとりあえず頭を冷やそうとシャワーを浴びることにするのだった。

一方、ラウラの嫁と称される英治は……

「くっ、待てー！ー！！」

ライドベンダーを走らせていた。目の前には鳥のIG。つまりコンドルのIGであった。飛んで逃げるIGを英治は朝っぱらから追い掛け回していたのだった。

なぜこうなってるのかというと、話は結構前まで遡る。

p r r r r r r

「はい、火野です」

「お、火野か。朝早くに悪いな」

朝早くに伊達さんからの電話。どうしたんだろ？

「え」と、何かあったんですか？」

話を聞くと、伊達さんのゴリラカンがヤミーかIGの出現を捉えたみたい。それでどうするかの話になって、俺が倒すことになった。コアメダルが関係するIGだった場合、オーズの方がいいからね。そういうわけで、織斑先生に連絡を入れてから出発。タカカンの誘導について行ったんだ。

「この辺りか……」

タカカンに連れられて来た場所は周囲には何も無い、広い一本道だった。敵はどこだ、と周りを見回したけど、怪しい影は見つからなかった。

ビュンッ！

「ッ！ おおっと！」

頭の上から聞こえてくる何かが近づいてくる音。反射的にその場から転がる。片腕を切ったみたいで、血が流れるけど、気にしない。まずは相手を確認する。

赤い翼に、両腕の爪。外見から見ると、鳥の怪人。つまり、コンドルのIGだろう。とりあえず、ここで倒さなきゃ。

「変身！」

『タカ！ トラ！ バッタ！ タ・ト・バ タトバ タ・ト・バ！
！』

「ハッ！」

構えるとともに、トラクローを展開。駆け出してコンドルIGに切り掛かる。

先制を上手くとれたのか、火花とセルメダルをまき散らしながら、IGは転がる。倒れたIGに追撃にと、トラクローを振りかざすが、その前に胸を蹴られてよろめいてしまう。

「ガアアアア！」

IGは赤い翼を開き、飛び立つ。そのまま、一閃、二閃とすれ違いざまにこつちを切る。

「うわあああああ」

こつちが転がると同時に、また上昇するIG。結構痛い。アイツは……飛んでばかりで厄介だな。ここは……。

相手がもう一度、こっちに突撃をしてくるのを見て、カウンターを狙うために足に力をこめる。

「セイヤーーーー！」

バツレグから繰り出す飛び蹴りと、向こうの爪がぶつかる。俺のキックは相手の腕を弾き、胴体に当たる。

ふう。着地と同時に相手を見るとよろめきながらも、飛び立とうとしていた……って、ちよつと！

逃げ出すIGの背中を見ながら、ライドベンダーにまたがる。

これが上の話に繋がるんだ。

この後もしばらく追跡は続いたんだけど、トンネルとか、森とかを通られて、結局見失っちゃった。これ以上はどうしようもないから学園に戻るかな。

バンッ、バンッ！

早朝のアリーナに響く銃声。そこにいたのは男と少年の2人。少年は手にした銃―バースバスターを構え、次々とターゲットを狙っていく。だが、その結果が芳しいものではなく、何とかあたっていいって感じだった。

「あゝ、一夏ちゃん。もちつと腰を低くしねえと。さっきから反動

に負けちまってるぞ」

男―伊達明は少年―織斑一夏に指導する。2人がやってるのは見
ての通り特訓である。一夏の皆を守りたい願い。それと、一夏自身
が狙われていることを考えると、彼は強くなる必要があった。それに
この世界では必ずしもISが最強ではないのだ。ガイアメモリを使
い変化する異形のドーパント。欲望によって生まれるヤミー。それ
を作り出すグリッド。本来は生まれるはずのないIG。それらに立
ち向かえる力も彼は手にしなければいけないのだ。

そんなこんなで始まったこの特訓も今日で何回目だろうか、そう
思えるほどに続いていたのだ。

「そう言われても……コレ、結構反動が大きいですよ」

「ああ。ま、そんなくらいなきやヤミーとかは倒せないからな。それ
に始めたばかりのところよりは十分よくなったじゃねえか」

最初の頃は一発撃つたびに、一夏は派手に後ろに吹っ飛んでいた
のだ。そこから自分の力量を分からせ、体を鍛えさせた。反動には
簡単に負けないようになったが、今度は的に当たらない。まあ、I
Sの方である程度はわかってたようなので、簡単なレクチャーで数
発は当てれるようになった。

（あの頃の後藤ちゃんと比べると、熱意は変わらないが、腕がな。
まあ、ライドベンダー隊の隊長と比べるとはアレか……）

伊達が考えている間も一夏は引き金を引き続ける。的のだ真ん中
ってわけではないし、全弾当たってもいないが、確実に一夏は腕を
上げていった。

「よし、一夏ちゃん。今日はここまでだ。学生の本分は勉強だから」

「え、はい。もうこんな時間ですか。伊達さん、今日もありがとうございます」

「おう、頑張れよ」

自室に戻る一夏を見て、伊達はセルメダルの補充を考えていた。一定の期間で紅渡は送ってくれるけど、この消費じゃ待つてられない、と。

「ま、ヤミーもいるみたいだから、何とかなるか。さうて、俺もお仕事をしなないと」

伊達はセルメダルの入ったミルク缶を背負い、保健室に向かった。

「なあ、シャルロット。英治はどうしたんだ？」

「わからないよ。朝、ラウラもいないって言ってたけど、どこにいったんだろ？」

1限が終わった休み時間。一夏は英治がないのをずっと気にしていたが、千冬は特に何も言わなかったので、わからなかったのだ。

シャルロットにも聞いてみたところ、彼女もわからないって言う。首をかしげながら一夏は自分の席に戻ろうとする。

「一夏、火野だったらでは怪人退治に行ったのではないか？」

「ああ、そっちな」

箒に言われて合点がついたように手を叩く一夏。英治の行方がわかったのはいいのだが、この教室に男子1人つてのはいつまでたっても慣れないんだな。そう思いながら、一夏は英治に早く帰って来て欲しいと思っていた。

一方の英治は……

「ところで、『どう？』」

IGを追うことに夢中になってしまい、道がわからなくなっていた。彼は無事IS学園に帰れるのだろうか？

妄想と追跡とバースバスター（後書き）

進展のない話。かなりg d g dだと我ながら思った。だが私は謝らない（キリッ

ちなみに爬虫類メダルの亜種問題については進展無し。ただ説得力のある意見がありましたので、反対意見がこれ以上出ないようでしたら本小説では亜種可能の方向で行きたいと思います。まあ、さつさとブラカワニになれば悩むこともなかったんですが……

それでは、意見、要望、感想等お待ちしております。

買い物と水着と終わる追跡戦（前書き）

C o u n t t h e m e d a l s

オースが使えるメダルは……

タカ

クジャク

クワガタ

カマキリ

バッタ

トラ

ゴリラ

カメ

買い物と水着と終わる追跡戦

とある日曜日。シャルロットとラウラは臨海学校に向けた買い物に来ていた。本当は英治と来たかったのだが、彼は先日からずっとIGの搜索に力を入れていて、それどころではなかったのだ。2人とも、英治がオーズとしての戦いがあることを理解していたため、ここは素直に諦めることにしたのだ。

「ねえ、ラウラ。アレって……？」

「ん、一夏とセシリアと鈴か。何してるのだ？」

駅前のショッピングモールに着いた2人はよく見知った顔を見つけた。いつもならあのメンツの中に冨もいるのだろうが、なぜあの3人だけなのだろうか？ シャルロット達はそれを疑問に思いながらも、自分達には関係ないか、と自分達の買い物に専念することにした。

ちなみに、一夏が鈴、セシリアと来ている理由は、学年別トーナメントまで遡る。シャルロットと組むことになった一夏は、鈴達の誘いを断るときに後で何でも言うことを聞く。そうやってしまったのだ。勿論、セシリアと鈴はコレを使ってデートをしようとしたのだ。そこで、臨海学校の買い物という名目で一夏を誘った。ここまではいい。だが、誘った日時は2人とも同じ。女心、つまり2人きりがいいってことがわかれば、どちらかの誘いをずらす、または断ることができたのだろうが、さすが我らの唐変木。一夏は2人の誘いをただの買い物だと思っていて、鈴ともセシリアとも来ることにしたのだ。

ラウラ達からはよく見えなかったのだが、セシリア、鈴はとても

不機嫌そうな顔をしていたそうだ。

「それじゃ、まずは水着を買いに行こうか」

「む、買わないといけないのか？ 学校指定ので十分なのだが……」

「ダゝメ。せつかなんだから可愛いのにしなきゃ。ほら、いくよ」

抵抗虚しく、ラウラはシャルロットに引きずられる形で水着売り場へ。ラウラは興味なさそうだったが……

「うゝん、こつちがいいかな。あ、でもこつちも……」

「シャルロット。いつまで私の水着を選ぶのだ？ 私はいいって言ってるだろう」

かれこれ数十分。シャルロットは自分の水着よりも、ラウラのものばかり選んでいた。水着はいらないと一点張りでも「ダゝメ」や「それは拒否されました」と返され、相手にされない。ラウラにとっては学校指定の水着、つまりスク水は機能性に優れているため、それで十分だと思っているし、たかが泳ぐための服にこだわる理由はわからなかった。

「シャルロットも自分のを選んだらどうだ？」

「えゝだってラウラほつとくと水着選ばなそうだから……」

この後、何とかシャルロットを説き伏せ、1人になれたラウラは

周囲を見回した。そこでとある会話が彼女の耳に入ってきた。

「ねえ、水着どれにする？」

「うーん。選ぶのって大変よね。料理とかがOKでも水着が駄目だと嫌われちゃうもんね」

「なっ……！？」

その瞬間、ラウラに電流が走った。水着が駄目だと男に嫌われる。その瞬間、彼女の脳内にはある光景が浮かび上がった。水着の選択を誤ったために英治に嫌われる光景が。

『ラウラ、ゴメンね。俺、水着のセンスがない娘とは付き合えないんだ』

『あの時、僕のアドバイスに従わなかったからだよ。じゃあ英治は僕がもらっから』

『……残念ね。貴方は、英治と付き合えない……』

『待つのだ！ 嫁よ待ってくれえー！』

英治にフラれ、シャルロットには見下され、名前の知らない眼鏡をかけた、水色の髪の娘からは冷やかかな視線を送られる。そして3人は立ち去っていく。

その光景がよほど堪えたのだろうか、ラウラは力を失ったように膝をつく。

だが、彼女はここで諦めるわけにはいかなかった。震える指でISのプライベートチャンネルを開いた。通信先は自身の部下、つま

り黒ウサギ隊のところである。

『受諾。こちら、クラリッサ・ハルフォーフ大尉です』

「わ、私だ……」

何かに怯えるように震えた声のラウラ。本来、軍の通信は名前、階級を言わなければいけないのだが、震えるラウラを想像したクラリッサは鼻血を吹き出しそうな衝撃を受けたのだった。

『ど、どうかしたのですか、ラウラ・ボーデヴィツヒ隊長？』

落ち着いた声で話そうとするクラリッサ。隊長に萌えていましたなど、死んでも言えないからだろう。

「あ、ああ。とても重大な問題が発生している……」

ラウラのその様子から判断したクラリッサはハンドサインで部下達を集める。どんな事態にでも対応できるようにするためだ。

『部隊を派遣しますか？』

「い、いや、その必要はない。ただ……」

『ただ？』

「その……水着についてだが……」

水着？ クラリッサの頭上には大量の「？」が浮かぶ。一体水着がなんだというのだろうか？

詳しく話を聞くとこうだ。元々学校指定のスク水で臨海学校に臨もうとしたラウラ。だが、周囲に声に耳を傾ければそれではマズイ。自分の想いは報われることがなくなるかもしれない、と。

『隊長、その英治って方の性癖は存じ上げませんが、スク水って選択は危険です。一部の者には受けが いい のですが、そうとは限りません。彼がその一部ではなかった場合は……』

「そ、そうなのか……」

『加えて、申しにくいのですが、隊長の体型は男性を悩殺できるものではありません。下手な選択はできません』

「なら、一体どうすればいいのだ？」

不安気に応えるラウラ。クラリツサはそんな隊長が可愛いと思い、全力でその恋を応援することを決めた。

『隊長、ご安心を。我ら黒ウサギ隊は隊長と共にあります。必ずや隊長の力になってみせます』

「おお。頼むぞ」

「えっと、コレって話かけていいのかな……？」

ラウラが話し込んでる間に自分の水着を買い終えたシャルロットは悩んでいたのだった。

「……アレは、織斑君？ でも、アレは……？」

アニ○イトに向かう簪は女子2人に引きずられている一夏見て戸惑う。そして、あんまり関わりたくない決めて、スルーすることにした。それに簪と一夏は仲がいいわけもなかった。元々、彼女の本来のISとなるはずだった『打鉄式』は一夏の白式の制作の犠牲となり、後回しにされた。それで、彼女は一夏を恨んでいた。だが、今は彼女のIS『BIRTH』があるからその確執もなくなっていた。でも、簪から見たら一夏はあくまで『英治の友達』であって、自分の友達かって聞かれたら首を縦に振るかは微妙である。

結局、簪は一夏達のことを気にも留めず、自分の目的を果たそうと足を進めるのであった。

「さてと、買い物も終わったから帰ろうか？」

「そうだな」

臨海学校のための買い物を終えたシャルロット達は学園に戻ろう

としていた。だが、向こうが騒がしいことに気づいたのだった。
その騒がしさが歓声ならば、大して気に留めなかっただろうが、
それとは違い、聞こえてきたのは悲鳴だった。

2人は無言で頷き合い、現場に向かう。自分達に何かできることがあるかもしれないから。

そんな彼女達がたどり着いたときに見た光景は、暴れ回る怪人でもなく、たくさんの怪我人がうめく光景でもなく、怪人がバイクにはねとばされる光景だった。

「「英治！」」

「あれ。ラウラにシャルロット？ どうしてここに？」

バイクに乗ってた人物、英治の元に駆け寄る2人。そんな2人とは違い、英治はこの場に2人がいたことに驚き、目を丸くしていた。

「うん。ちょっと、買い物にね……って、英治、アッチはいいの？」

「おっと、そうだったな。さあて、もう逃がさないぞ」

慣れた手つきでオーズドライバーを装着し3枚のコアメダルを入れる。オースキャナーでメダルを読み取り、一言。

「変身！ー！」

『タカ！ トラ！ バッタ！ タ・ト・バ タトバ タ・ト・バ！
！』

「はぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ」

メダジャリバーを構え、駆け出す。英治は何度もあと少しとところでコンドルIGに逃げられているため、いい加減に決着をつけたかったのだ。そのため、メダジャリバーで容赦なく切りつけた。

切られる度に苦痛の声を上げ、セルメダルを落とすIG。反撃とばかりに突き出した爪も、メダジャリバーに止められ、トラクローでの手痛い反撃を食らう。IGは転がり、力なく倒れ込む。

「こつちに変えてみるか」

『タカ！ クジャク！ バッタ！』

トラコアを先日入手したクジャクコアに変える。左腕に攻防どちらにも使えるタジャスピナーが装備された亜種形態、タジャバとなつたのだ。

「悪いけど、これで決めるから」

ドライバーに入っていた3枚のコアメダルを取り出し、タジャスピナーに入れる。そして、オースキャナーで読み取る。

『タカ！ クジャク！ バッタ！ ギン！ ギン！ ギン！ ギガ
スキャン！！』

「はああああああああ、セイヤーーーーーー！！」

軽く引いた左腕を突き出す。刹那、赤2つ、緑1つ、銀3つのメダル型の光が円を描きながら進んでいく。何とか立ち上がったIGにはかわす余裕などあるはずもなく、光の輪に当たった瞬間、その

体は爆炎に飲まれた。

「よっと」

降ってくるコンドルコアをキャッチした英治は変身を解く。これで天空を舞う不死鳥の如きコンボが使えるようになった。ワースといったグリードが現れた以上、対抗するためにはコンボの力が必要なのだ。

「ふう。疲れた……」

「お疲れ様、英治」

シャルロットが渡してくれたスポーツドリンクを飲みながら一息つく。そういえばシャルロットには聞きたいことがあったんだよね。

「今更だけどさ、どうしてシャルロットは自分が女子だったって皆にばらしたの？」

「そ、それは……なんというか、英治にちゃんと女の子って見て欲しかったからっていうか……」

「前にも言ったけどさ、シャルロットは可愛い女の子だって。そこは気にしないでいいよ」

「……そういう意味じゃないのに」

なぜか不満そうなシャルロット。何か俺、マズイことでも言った？

「まあ、せっかく教えてくれた名前も皆が呼ぶことになっちゃったから、何か新しい呼び名でも考えようか？」

「え、ホント！」

そう言つと、目を輝かせるシャルロット。うゝん、何がいいのかな？

「じゃあさ、シャルロットから“シャル”ってどう？」

「シャル。うん！ いいよ！ すごくいいよ！」

嬉しそつに微笑むシャルロット。そんな彼女とは逆の方向からは黒いオーラが流れてきた。

「嫁よ。私というものがありながら他の女とイチャつくとはな……」

いやいや、ラウラの嫁じゃないから。普通は女の子がお嫁さんだから。

そんなこんなでラウラをなだめることに成功して、せっかくだから少し遊んで帰ることになった。もうすぐ臨海学校か。あれ、何か忘れているような……？ まあ、いいか。

買い物と水着と終わる追跡戦（後書き）

次回から臨海学校に。もうすぐ作者のやりたかったことの1つができるぜ。まあ、それが何かは最近の展開から予測はつくと思えますけどね。もうすぐ、奇跡の力が降r（ry

ちなみに作者、最近入手できたファイズとカイザのフィギュア1ツの影響で「555」にはまっています。1話から見直したいんだけど、時間が……

それでは、意見、要望、感想等お待ちしております。

海とポロリとタコの足（前書き）

C o u n t t h e m e d a l s
オーズが使えるメダルは……

タカ
クジャク
コンドル
クワガタ
カマキリ
バッタ
トラ
ゴリラ
カメ

海とポロリとタコの足

「海っ！ 見えたあっ！」

トンネルを抜けた先の光景を見て、1人の女子が声を上げる。

臨海学校初日。俺達は目的地までバスで移動していた。澄んだ青空。静かに揺れる草木からのんびりと過ごすにはよさそうな天気だと思った。

初日である今日は1日中自由時間で、皆好きなように遊ぶみたい。でも、俺は……

「英治、今日は思いっきり遊ぼうぜ」

「あ、うん……そうだね」

海が見えて一夏だけでなくクラス中の皆はテンションが上がっている。こんな状況じゃ、とても言う気になれないよ。水着買うの忘れてた……って。だってさ、IGの追跡で買いに行く時間がなかったんだ。

「そろそろ目的地に着く。全員ちゃんと席に座れ」

数分後、織斑先生が言うと、皆サツと席に着いた。相変わらず凄い統率力だなあ。

言葉通りにバスはすぐに旅館に着いた。綺麗な場所だな。

「ここが3日間お世話になる花月荘だ。全員、従業員の仕事を増やさないように注意しろ」

「「「「よろしくおねがいしまーす」「」「」

「はい、こちらこそ。今年の１年生も元気があってよろしいですね」
丁寧にお辞儀する女将さん。今年もつてことは毎年ここで実習をやってるってことだね。

「あら、こちらが噂の……？」

女将さんの視線は俺と一夏の方に向く。まあ、それはそうか。毎年IS学園が利用してても、男子がIS学園生徒として来るのは初めてだからね。

「ええ、まあ。今年は男子がいるせいで浴場分けが難しくなって申し訳ありません」

「いえいえ、そんな。それにいい男の子達ですよ。しっかりしてそんな感じがしますよ」

「それは片方だけです。お前達も挨拶しろ」

「あ、はい。火野英治です。お世話になります」

「お、織斑一夏です。よろしくお願いします」

一夏は織斑先生に頭を押されていた。そんな光景にも軽く微笑み、女将さんは気品のあるお辞儀をする。

その後、女将さんから施設の案内があつて、解散。ここから今日は食事以外は全部自由時間だ。

「ね、ね、ね、おりむー、ひのひの。部屋どこ？ 遊びに行くから教えて〜？」

この声はのほほんさんか。そういや俺と一夏の部屋ってどこだ？
一覽にも書いてなかったし……

「いや、俺も知らない。廊下にも寝るんじゃないか？」

いや、廊下はさすがにないと思うよ……

「わー、それはいいね。私もそうしようかなー。あー、床冷たいって〜」

「いやいや、それはよくないでしょ？ 俺達の部屋ってどこなんだろうな？」

女子と同じ部屋にするわけにもいかないから、俺達には部屋が用意されているって山田先生は言ってたけど、どこかは言ってたかったしな。

「織斑、火野。お前達の部屋はこっちだ。ついてこい」

織斑先生に呼ばれて、ついていくと、そこは……

「「教員用？」」

教員用って書かれた紙が貼ってある部屋だった。ちなみに隣は織斑先生の部屋。何でも女子が夜に遊びに来るのを防ぐため、だそうで。まあ、織斑先生の部屋が隣で騒げる勇気のある人はいないだろうしね。安全かな……？

そんなこんなで部屋の豪華さに驚きつつも、先生からの指示を聞き、自由時間となったのだった。

「英治、さっそく海に行こうぜ」

「いきなりだね。いいけど、俺、水着買ってないんだ。だから泳げないけどね」

男だけならともかく、女の子の前でパンツ一枚ってわけにはいかないからね。

更衣室に向かった一夏と別れた俺は、少し時間を潰してからビーチに行くことにした。旅館の周りを歩いてみたんだけど、謎のんじんがあつたのは何でだ？ 飾り物？ だったらにんじんである必要はないしな。

思ったよりも散策に時間をかけちゃったみたいで、海に着くと、一夏の上に鈴が乗っかっているのが見えた。

「お、英治。思ったよりも遅かったな」

「あはは、まあね。こちら辺るってしてきたからね」

「ねえ、何で英治は水着じゃないのよ？」

鈴の問いに水着を買いに行くの忘れていたって言うと、笑われた。仕方ないでしょ、どっちにしろ時間もなかったしね。

「あ、織斑君の上に鳳さんが！」

「あゝ、いいなあ」

「きつと早いもの勝ちよ」

男子2人、しかも片方肩車してるってなると、目立つのは当然なわけで、次々と女子が集まってくる。一夏は誤解が広まるって言って、鈴に降りるように言っていた。それを聞いた鈴は仕方なさそうに飛び降りる。ひらり、と手について一回転して立ち上がる。何ていうか、猫っぽかったな。

「い、一夏さん。約束通りサンオイルを……」

「ん、ああ。わかった」

一体どういう経緯でそんな約束をしたのかは知らないけど、一夏はセシリアが立てたビーチパラソルの方に向かった。さてと、俺はどうするかな。

「あ、英治。ここにいたんだ」

「ん？ あ、シャル。どうし……た……の？」

後ろからの声に振り向くと、シャルと……バスタオルをぐるぐるに巻いた謎の物体がいた。えーと、ミイラか何かかな？

「ほら、大丈夫だから出てきなよ」

「だ、大丈夫かどうかは私が決める……」

「その声、ひよつとしてラウラ？」

俺の声に頷くシャル。一体何があったんだろ？

「ほーら、せつかくだから英治に見てもらわないと」

「ま、待て。わ、私にも心の準備ってものがあつてな……」

説得するのだが、ラウラが首を縦に振る気配はなくて、ため息を吐くシャル。

「だったら、僕と英治で遊びに行こ。ラウラは出てこないみたいだしね」

そう言つて俺の手を引くシャル。一瞬、黒い笑みだったのは気のせいだよ……？

「ま、待て！ め、脱げばいいんだろ！ 脱げば！」

バツとバスタオルを振り払うラウラ。現れたのはレースをふんだんに使った大人っぽい水着。

「わ、笑いたければ笑うがいい……」

そう言うラウラはモジモジしていて、そういう仕草と相まってかスゴイ可愛かった。

「いや、そんなことないって。可愛いよ」

「なっ……！ 社交辞令などいらん……」

「そんなことないって。似合ってると思うよ」

そう言つと顔を赤くして黙り込むラウラ。煙が出ているのは気のせいだよ……

「そうだよ。僕も可愛いって言ったんだけどね信じてくれないんだよ」

「へえ、そうなんだ。遅くなっちゃったけど、シャルも似合ってるよ」

「え、そ、そう……ありがとう」

褒められたからか、シャルは照れくさそうに髪をいじった。その後もおしゃべりをしていたとき、事件は起こった。

「キャアーーーーー！！」

「み、水着があー！！」

そんな悲鳴が聞こえてきたと思ったら、何故かたくさんの水着が宙を舞っていた。

「えーと、これどういう状況？」

「え、英治。見ちゃダメだからね」

釘を刺すように言うシャル。男子としては目で追ってしまう光景が繰り広げられているから……

「い、一夏さん！」

「一夏あー！ー！」

「え、2人とも、落ち着け。これは事故だって」

「「問答無用（ですわ）！」」

「グハアッ！」

そんな声が聞こえてくるけど、あんまり気にしないようにしよう。一体何が起こってるんだ？

「キヤ、英治！」

「シャル！ 大丈夫？」

急に叫びをあげたシャルの方を向くと、彼女に巻き付くものがあった。見た感じタコの足だけ……。って、タコ！？ もしかしてって思ってた方向にはタコの怪人が……

変身しようと思ってオーズドライバーを出した俺のところに舞い降りてくるものがあった。それはオレンジの水着。コレって、まさか……？

「え、えいじい……」

声の方を向くと、胸を腕で隠した涙目のシャルがいた。睨んでいるんだけど、涙目のせいであんまり迫力はない。

「ご、ゴメン」

いつまでも水着を手に持つてゐるわけにはいから、シャルに返して気を取り直す。今度こそ。

「変身！」

『タカ！　トラ！　バツタ！　タ・ト・バ　タトバ　タ・ト・バ！
』

変身した俺をいきなり触手が襲いかかってくる。捕まるわけにはいかないから、1本、2本とメダジャリバーで切り裂いていく。

「3……4……」

後ろ、右、上、と触手を切り落とす。タコの足は8本だから、もう少しだな。

「これで、最後っ！」

剣を振り下ろし、最後の1本を切り落とす。これで、足は全部切ったから後は本体を。

「うわぁ！」

そう思ってタコI Gに向かって走り出したら、何かに殴り飛ばさ

れた。

「イタタタ。今度は何だ？」

見ると、触手は再生していて、次々と攻撃を仕掛けてくる。こっちもメダジャリバーで反撃するけど、さっきまでと再生スピードが段違いのため、切っても切ってもキリがない。

シュル、パシッ

「しまった！」

今の衝撃でメダジャリバーを落としてしまう。そこで立ち止まってしまったのが悪かったみたいで、すぐにグルグル巻きにされてしまう。足は動かせるけど、バッターレッグじゃ切るのはできないし、腕が動かせないから、トラクロー、カマキリソードもダメかもな。だったら……

そう思っ取っ出したのは苦勞の末手に入れた赤いコアメダル。これなら。

『タカ！　トラ！　コンドル！』

「はぁぁぁぁ！」

コンドルレッグのラプタードエッジから繰り出す真空波で絡みつく触手を切り払う。今度はトラクローも展開して、両腕、両足の爪で触手を切り裂きながらIGに近づく。巻きついてきたのは、自由なところで切り裂き、すぐに脱出する。そのまま走ると、目の前にはIG本体が。

「セイヤッ！」

すかさず叩き込んだのは回し蹴り。ラプタードエッジの斬撃も加わり、相手は大きくよろめく。

「ハッ、セイツ」

そのまま連撃を繰り出す。赤と黄色の旋風を纏いながら繰り出す攻撃は大ダメージを与えるには十分で、相手はすぐにダウンした。そろそろ決めるよ。

『スキヤニングチャージ!!』

「はあああああああああ」

トラクローでX字に相手を切り裂き、その勢いを殺さないで、相手を踏み台にして、飛び上がる。

「セイヤーーーー!!」

そのままかかと落としの要領でラプタードエッジを突き立てる。

「ガアアアアアア」

火花とセルメダルをまき散らしながらIGは爆発する。煙が晴れた先には青いコアメダルが落ちていた。

「やったあ」

「火野君、お疲れ」

次々と声がかけられる。変身を解いてそっちの方を向く。

「あ」

「「「「「え?」「」「」

少しの硬直。考えてみて。水着が取られている状態ではしゃぐとどうなるのか。

「「「「「キャアーーーー」「」「」

「「めんなさーーーーい」

「つまり日中の自由時間は過ぎていったのだった。

海とポロリとタコの足（後書き）

自分でも何がしたかったのかよくわからなかった今回の話。まあ、ガタキリバからシャウタまでのメダルを集めないと今後の展開に繋がれなかったから、無理矢理出したって感じですね↑オイ

それでは、意見、要望、感想等お待ちしております。

夕食と聞き耳と恋バナ（前書き）

前話と前々話のサブタイがかぶってたので修正しました。

C o u n t t h e m e d a l s

オーズが使えるメダルは……

タカ

クジャク

コンドル

クワガタ

カマキリ

バッタ

トラ

ゴリラ

カメ

夕食と聞き耳と恋バナ

日が沈み、時刻は既に午後7時半。かなり広い部屋で夕食を取っていた。それにしても昼も夜も刺身が出るなんてスゴイ豪華だなあ。

「あー、うまい。しかもこのわさび本わさじゃないか。すげえな、おい。高校生の飯じゃねえぞ」

一夏、そんなことよくわかるね。もしかして本わさを結構な頻度で食べてるのかな？

「ねえ、英治。本わさって？」

隣に座るシャルが聞く。簡単に本物のわさびだって説明すると、シャルはわさびの山を箸にとって……え？

「つ~~~~~~~~」

「だ、大丈夫？」

涙目で鼻を押さえてるシャル。彼女は「らいじょうぶ」とか「風味があつて、おいしいね」って言うけど、無理しなくていいから。

「水でも飲んで落ち着いて」

「う、うん／＼／」

近くにあったコップの水を渡す。もう誰が誰のかわからなかったからね。シャルの顔が赤い気がするの、わさびのせいかな？

「なっ！ シャルロット。それは嫁のコップだぞ」

「え、そうだったの？ ゴメン、シャル」

「え、べ、別に気にしなくていいよ。その……間接キスだし……」

後半は何を言ってたのか聞こえなかったけど、気にしなくていいって言ってるからあんまり気にしない方がいいかな。

「むう。英治、水だ、飲め」

口を尖らせたラウラは俺にコップを渡してくる。コップをテーブルに置いて、箸を持つと、ラウラはまた不機嫌そうな顔になった。俺、何かした？

「あゝ！ 織斑君が！」

「セシリアに」

「あゝんしてる！」

女子達が騒ぐ方向を見ると、そのまんまな光景だった。周りからずるいとか、羨ましいって言われてるし……

「お前達は静かに食事を取ることができんのか」

その騒ぎに我慢の限界だった織斑先生が割って入る。女子達はしぶしぶといった感じで自分の席に戻り、あゝんしてもらったことが終わってしまったセシリアは残念そうな顔をする。その後も一夏の周

りはにぎやかっけ言うか、うるさい感じだったけど、俺はあんまり気にしないで箸を進めていた。あ、これ、美味しい。

いきなりだけど、臨海学校や修学旅行の夜って何をする？ 旅していたから俺はまともに中学校行ってないんだよね……。まあ、あの程度の学力はつけてもらってただけだね。

話を戻そう。枕投げ、恋バナ、怪談。人それぞれやることは違うんだろうな。でも、ここIES学園は女子がほとんど。大抵は恋バナに収束するみたい。

何でわかるかって？ それは温泉に行く、もしくは部屋に戻るとき、女子の部屋の近くを通るから。それで話している内容から、そうわかったんだ。

まあ、何でこんな話をしているかって言うと、目の前の光景が光景だからから、かな。女子3人が織斑先生の部屋に聞き耳を立てている状況のせいだな。

「で、篠ノ之さんにセシリアに鈴は何をしてるの？」

「……しっ！ 静かに」

息の合った行動に驚いたけど、ドアの向こうから聞こえた声にもっと驚くことが……

『千冬姉、久しぶりだからちょっと緊張してる？』

『そんなわけあるか、馬鹿者。……んっ！　す、少しは加減しろ……』

『はいはい。じゃあ、ここは……と』

『くあっ！　そ、そこは……やめっ……っうー！』

そんな声が聞こえてきたのだった。まさか、2人は禁断の関係だったのか……

そんなことを考えながら篠ノ之さん達の方を向くと、目が死んでいた。詳しく言つと、目から光がなくなつて、口元は吊り上がっている。

「あはは、馬に蹴られたくはないから、部屋に戻るよ。そ、それじゃあ、ごゆっくり」

こつ言つて部屋に戻る。べ、別に3人が怖かつたわけじゃないからね。

「……へぶっ！」「……、そんな女子が言わないような声をバツクに俺は自室に戻つた。そう言えば、ここ明かりがあるわけじゃないから、星がよく見えるんだよな。そう思つた俺は夜風に当たりに行くことにしたのだった。

「「「「「.....「「「「」

ここは千冬の部屋。この部屋にいるのは6人もなのだが、その空気はお通夜のように暗く、重くなっていたのだった。ちなみにメンバーは千冬、箒、セシリア、鈴、シャルロット、ラウラ。一夏はというと、千冬、セシリアに連続でマッサージをしたため、汗をかき、再度温泉に。

「おいおい。ここは葬式か通夜か？　いつもの馬鹿騒ぎはどうした？」

「い、いえ.....」

「お、織斑先生とこうして話すのは、ええと.....」

「は、はじめてですし.....」

「まったく、しょうがないな。私が飲み物を奢ってやろう。篠ノ之、何がいい？」

いきなり呼ばれたことに驚き、声が出ない箒。箒だけに言えたことではないのだが、千冬は一夏が好きな娘にとっては越えなければいけない最大の壁なのだ。

「全く。ほれ、好きなのを取れ」

千冬が冷蔵庫から出したのはラムネ、オレンジジュース、スポーツドリンク、コーヒー、紅茶。箒、シャルロット、鈴、ラウラ、セシリアの順で受け取って、ぎこちないが、蓋を開け、口をつける。

「飲んだな？」

「は、はい」

「そ、そりゃ、飲みましたけど……」

「一体、何か入っていましたの!？」

その問いに不審な顔をしながらも、各々頷く。あまりにもぎこちない5人を鼻で笑いながら、千冬はある缶を出す。

「あ」

誰が声をあげたのだろうか。千冬が取り出したのは缶ビール。本来ならば教師がこのタイミングで飲むべきものではないのだが……全員が声を失う中、千冬はゴクゴクと喉を鳴らしながらビールを口にする。

「どうした？ 私だって人間さ。ビールぐらいは飲むぞ。それとも私が作業オイルを飲む人間に見えるのか？」

「い、いえ。そんなわけでは……」

「ないですけど……」

「でもその、今は……」

「仕事中なんじゃ……?」

「……ポカーン……」

放心状態であるラウラ以外は千冬がビールを飲むことに突っ込んだ。と言っても、勝てるはずもなくて……

「硬いことを言うな。それに口止め料はもう払ったぞ」

そう言っただけに渡した飲み物に目をやる。5人はそれに関心を持って「あっ」とだけ、言う。完全にやられたのだった。

「さて、前座はこのくらいでいいか。そろそろ本題の話をするか」

「本題?」、そんなことを思う5人娘をよそに千冬は早くも2本目のビールを開ける。ビールを開けた景気のいい音だけがこの場に響く。

「お前ら、あいつのどこがいいんだ?」

まずは箒、セシリア、鈴を見て言う。この3人に共通するあいつて言ったら1人、つまり織斑一夏しか存在しなかった。

「わ、私はあいつが以前より弱くなってるのが腹立たしいだけで……」

「あたしは、腐れ縁なだけだし……」

「わ、わたくしはクラス代表としてしっかりしてほしいだけです」

「ふむ、ではそう伝えておこう」

「」「」言わなくていいです!」「」「」

しれつと言う千冬。もごもごだったり、きつぱりといった違いはあるが、素直になれなかった3人は千冬に詰め寄った。こんなことを言われてはただでさえ鈍感な一夏が自分の思いに気づくことは未来永劫になくなるから。

「で、お前達はどうなんだ？」

次はシャルロット、ラウラに目を向ける。彼女達の意中の彼は一夏ではないからだ。

「えっと、僕。いや、私は優しいところっていうか、何ていうか…」

自分でも上手く表現できないのだが、真摯な態度のシャルロットを第3人は羨ましそうに見ていた。

「ボーデヴィツヒ、お前はどうか？」

「わ、私は自分の意思を貫ける強いところでしょうか」

「ふむ。確かに火野は心が強いな。まあ、ISの方はまだまだ、だが」

英治との関わりは数ヶ月といった所だが、その人となりは千冬にもよくわかった。一言で言うと、いい奴である。だが、ただいい奴でないこともわかっていた。

「ま、火野はともかく、あいつと付き合える奴は得だぞ。家事、料理、マッサージとか上手いからな。どうだ、欲しいか？」

「く、くれるんですか？」

期待の眼差しを向ける3人。

「やるか、バカ」

すぐにがつくりとなる3人。そんな光景をシャルロットは苦笑いしていた。そして、英治にも、こんな立場の人がいるのかな、そう思い始めていた。

「女なら奪うくらいの気持ちで行かなくてどうする。自分を磨けよ、ガキども」

愉快そうに言う千冬の声はガツクリとうなだれている3人には届かなかったのだった。

夕食と聞き耳と恋バナ（後書き）

次回から3巻の本番（？）に入って行きたいと思います。頭数が2つ、原作より多いので敵の性能を上げようかな。そう思っても、今度はあつちが予定より強くなってしまうジレンマ。まあ、こんなことを今考えてる時点でストックがヤバいんですけどね。現実が忙しくなりだして……

それでは、意見、要望、感想等お待ちしております。

天才とウサ耳と舞い降りる紅（前書き）

予約の設定だけで、投降を押してなかった……orz
申し訳ありませんでした。

C o u n t t h e m e d a l s

オーズが使えるメダルは……

タカ

クジャク

コンドル

クワガタ

カマキリ

バッタ

トラ

ゴリラ

タコ

カメ

天才とウサ耳と舞い降りる紅

臨海学校2日目。この日は丸1日、データ取りや、武器の試験運用等で忙しい日となっている。特に、専用機持ちは国や企業から送られてきたもので大忙しつてところかな。でも、そういうのに属していない俺、自力で組み上げたため試験するものが少ない簪はある程度の余裕はあるみたいだった。

ラウラが遅刻するというハプニングはあったけど、コア・ネットワークを説明するということで見逃してもらっていた。

「さて、それでは各班ごとに振り分けられたISの装備試験を行うように。専用機持ちは専用パーツのテストだ。各自、迅速に行え」

織斑先生の号令で各々行動を開始する。ここには1年生が皆いたから、スゴイ人数が一度に動き出す。専用機持ちは織斑先生の元に向かう指示だったので、この場に残ることに。

「ああ、篠ノ之。お前はちょっとこっちに来い」

「はい」

「お前には今日から……」

ん？ 何で篠ノ之さんが呼ばれているんだ？

そんな俺の疑問は突然聞こえてきた声にかき消されたのだった。

「ちーちゃ~~~~~~~~ん!!」

ドタドタと砂煙を上げながらこっちに走ってくる影が1つ。人間離れたスピードで突っ込んで来るのにもびっくりだけど、何より驚くのはその人の格好だった。不思議の国のアリスみたいな格好に、ウサ耳。一体どういうセンスの持ち主なんだろう？

「……束」

ため息をつくように呟く織斑先生。そういや、束ってどこかで聞いたことのある名前の気がするなあ。どこで聞いたんだっけ？

「やあやあ！ 会いたかったよ、ちーちゃん！ さあ、ハグハグしよう！ 愛を確かめよう……ぶへっ」

人間離れたスピードで織斑先生に抱きかかろうとした束って呼ばれた女の人を片手で掴み、投げる。

え、何でそのスピードに反応できたんですか？ しかも、その腕力。織斑先生、貴方本当に人間ですか？ 紫のグリードの生まれ変わりとかじゃないですよね……？

「ぐぬぬぬ。相変わらず容赦がないねっ」

何事もなかったように起き上がる束さん。投げられた時結構鈍い音がしたんだけど……

「やあ！」

「どうも」

今度は篠ノ之さんと向き合う。篠ノ之さんの淡白な反応からすると、そこまで親しくないのかな。

「えへへ、久しぶりだね。こうして会うのは何年ぶりかなあ。大きくなったね、篝ちゃん。特におっぱいが」

が
ん
っ
！

本日2回目の鈍い音。えっと、何でソレ持ってるの？

「殴りますよ」

「な、殴ってから言ったあ……。し、しかも日本刀の鞘で叩いたあ。痛いよ箒ちゃん」

東さんが言ったように篠ノ之さんの手には日本刀が。まあ、IS 学園は各国の法律の影響されなみたいだけど、銃刀法違反くらいは適用してください。まあ、メダジャリバーがある俺も俺だけけどね

「え、えっと、この合宿には関係者以外立ち入り禁止なんですけど……」

「んん？ 珍妙奇天烈なことを言うね。ISの関係者というのなら、一番はこの私をおいて他にいないよ」

「えっ、あつ、はい、そうですね……」

説得にかかった山田先生もあつけなく論破されて黙り込む。それよりも、この人は自分が一番のISの関係者って言ったよね。束…… IS…… あ、ISの開発者、篠ノ之束か。…… って、えええええええええええ！ 何でそんな人がここにいるの！？

「おい束。自己紹介くらいしろ。ウチの生徒が困っている」

そうは言ってもこの場にいるのは専用機持ち軍団だけ。まあ、皆戸惑っているけど。そういう俺もだし。

「えー、めんどくさいなあ。私が天才の束さんだよ、はろー。終わり」

その言葉を聞いて啞然とする人や騒がしくなる人。皆違う反応をするんだけど、束さんは全く興味がなさそうだった。

「それで、頼んでいたものはどうした？」

そんな中、篠ノ之さんも周りの反応を気にしないで束さんに話しかける。どうして姉妹なのに他人行儀なんだ？

「うつつふつつ。それはすでに準備済みだよ。さあ、大空をご覧あれ！」

束さんが、ビシッって指した方向には何にも見えなかった。一体何だ？

ひゅーん、ズドンッ！！

「うわっ！」

激しい衝撃と共に何かが落下してきた。その場には銀色の金属の塊が。

「これは一体？」

警戒する俺の前で、それは開いた。そこにあったのは真紅。その表現が相応しいISだった。

「じゃじゃーん！ これぞ篝ちゃん専用機こと『紅椿』！ 全スペックが現行ISを上回る束さんお手製のISだよ！」

とんでもないことをサラリと言った束さんは篠ノ之さんのフィッティングとパーソナライズを開始する。何枚もの画面を見ながら、宙に浮かぶキーボードを叩いていく。あんなこと、絶対できないだろうなあ。

俺がそんなことを考えてる間に作業は終わっていた。早すぎですよ。篠ノ之さんの方はあらかた終わったのか、今度は一夏の白式に興味を示す。俺にはもうわからなくなったので、近くにいた簪に話しかけることに。

「簪はさ、あのISどう思う？」

「え、わ、私はただスゴイと思った……」

複雑そうな顔の簪。彼女も姉との仲があんまりいいわけじゃなかったんだっただよな。悪いこと言っちゃったな……

「そうか。ところでさ、簪は今日はどのくらいやることあるの？」

「……うん、CLAWSのチェックと、フル装備の試運転……」

簪はやることがあるのか。ラウラやシャルロットも自分の国から送られてきた装備があるみたいだし、俺はどうしょ。結構メダルも

増えたし、使いやすい組み合わせでも探しているか？ それにこのオレンジのコアメダルの能力も知りたいし。

「ねえねえ、君がメダルの仮面ライダーなんでしょ？ 束さんはそれにも興味があるのだ。変身して見せてよ」

「え、いや、そんな人に見せていいもんじゃないんですけど……」

「えゝ、ひどいよ。いいでしょ、いいでしょ。コレあげるからさ」

そう言っただ束さんは俺に何かを手渡してくる。コ、コレは……

「おい、束。あんまり人に迷惑を……」

「いや、いいですよ、織斑先生。それにコレ、貰っちゃいましたし」

そう言っただ織斑先生に見せたのは青いシャチが描かれたコアメダル。

「じゃあ、いきますよ。変身！」

『タカ！ トラ！ バッタ！ タ・ト・バ タトバ タ・ト・バ！
』

「おおゝ。仮面ライダーを生で見れて束さんは感激なのだゝ。さっきのメダルも使ってみせてよ」

言われるままにメダルを変えることに。本当はあんまり気は乗らないんだけど、コアメダルをくれたしな。

『シャチ！　トラ！　バッタ！』

「あれ？　今度は歌はしないんだ。ねえねえ、他の歌は？」

「え、歌はコンボじゃないと」

今度はコンボについてじっくり聞かれて実演させられそうになったけど、何とか説得してこの場は引いてもらうことができた。ある程度のことを見れたから満足したのか、篠ノ之さんの方に戻っていく束さん。紅椿の試運転をしてるみたい。そっちも気になったんだけど、せっかく変身してるし、コレも試してみるか。

『シャチ！　カメ！　バッタ！』

オレンジの腕に取り付けられた盾。どうやら、防御型のメダルだな。どうやら、一番堅いみたい。コレを使ったコンボってどんなのだろ？　やっぱり防御型。

「たっ、た、大変です！　お、おお、織斑先生っ！」

変身を解くと、慌てた山田先生が走って来た。山田先生はいつも慌ててるけど、今回はいつもの非じゃなかった。嫌な予感しかないな……

「どうした？」

「こ、これをつ！」

山田先生から渡された書類を見て表情が曇る織斑先生。そのまま山田先生と小声で話し始める。何か大事なことなんだな。

「全員、注目！」

山田先生が走り去った後、織斑先生が手を叩き、声をかける。

「現時刻よりIS学園教員は特殊任務行動へと移る。今日の稼働テストは中止。専用機持ちは集合しろ。織斑、火野、オルコット、デユノア、ボーデヴィツヒ、鳳、更識。！……それに篠ノ之も来い」

「はい！」

気合の入った返事の篠ノ之さん。そんな篠ノ之さんを見て不安そうな顔の一夏。何が何なのかよくわからないけど、嵐が来る。それだけははっきり言えるんだ。

天才とウサ耳と舞い降りる紅（後書き）

度重なるこちらの不手際、申し訳ありませんでした。

いきなりですが、爬虫類メダルは他のコアメダルと亜種可能な方向に進めて行くことにしました。そうしないと爬虫類メダルの出番がしばらくないし、活躍の機会もなさそうだったので。

それでは、意見、要望、感想等お待ちしております。

展開装甲と第4世代と作戦開始（前書き）

C o u n t t h e m e d a l s

オーズが使えるメダルは……

タカ

クジャク

コンドル

クワガタ

カマキリ

バッタ

トラ

ゴリラ

シャチ

タコ

カメ

展開装甲と第4世代と作戦開始

「では、現状を説明する」

旅館の奥の部屋に設けられた臨時の作戦室。ここには、専用機持ちと教師陣が集まっていた。薄暗い部屋に浮かび上がるディスプレイには情報が記されている。

「2時間前、ハワイ沖で試験稼働であった、アメリカ・イスラエル共同開発の第3世代型の軍用IS『シルバリオ・ゴスベル銀の福音が制御下から離れて暴走。監視空域より離脱したとの連絡があった』」

スポーツのためのISではなく、戦争のためのIS。兵器それが暴走するとうなるのかは嫌でも想像はできたんだ。悲しみしかないってことが。

「その後、衛星による追跡の結果、福音はここから2キロ先の地点を通過することがわかった。時間にして50分後。学園上層部の通達により、我々がこの事態に対処することになった」

淡々と告げる織斑先生。こういう事態は力がある者が対処するべき、ISに対抗できるのはISだけ。だからISが多くあるココに頼んだ、いや、命令したんだろうな。

「教員は学園の訓練機を使用して空域及び海域の封鎖を行う。よって、本作戦の要は専用機持ちに担当してもらう」

軍用のISを俺達で止めろってわけか。代表候補生とかそういう

肩書きを持っていたとしても普通は学生にやらせるべきことではないんだろうけど、俺達がやらなくちゃ、被害がでるかもしれない。それが1番、俺は嫌だから。そう思って自分の拳に視線を落とす。作戦会議は始まっている。

「目標ISの詳細なスペックデータを要求します」

「わかった。ただし、これらは二ヶ国の最重要軍事機密だ。けして口外するな。情報が漏洩した場合、諸君には査問委員会による裁判と最低でも2年間の監視がつけられる」

「了解しました」

セシリアの質問によって、モニターに目標のスペックが映し出される。

「広域殲滅を目的とした特殊射撃型。……わたくしのISと同じく、オールレンジ攻撃を行ええるようですね」

「攻撃と機動、両方に特化した機体ね。厄介だわ。しかも、スペックはあたしの甲龍を上回るから、向こうの方が有利……」

「この特殊武装が曲者って感じはするね。ちょうど本国からリヴァイヴ用の防御パッケージが届いているけど、連続しての防御は難しい気がするよ」

「しかも、向こうの格闘戦のデータが未知数だ。持っているスキルもわからん。偵察は行えないのですか？」

「……多分、無理、時間がない……。一撃必殺じゃないと、厳しい

……」

上から、セシリア、鈴、シャル、ラウラ、簪。代表候補生である彼女達は真剣に話し合っている。それ相応の訓練を受けていないから戸惑う一夏。戦いの経験はあっても、こういう軍事的な作戦会議なんかしたことがない俺は戸惑っていた。一夏と俺とは違い、篠ノ之さんはただ黙っているみたいだった。

「更識の言うとおりだ。この機体は今も音速飛行を続けている。アプローチは1回が限界だろう」

「やっぱり、一撃必殺……？」

簪がそう呟くと、全員が一夏の方を向く。勿論、俺も。一夏の白式の零落百夜。ISのシールドバリア無効のそれがこのメンバーの中でISに有効だから。

「え……？」

「だから、あんたの零落百夜で落とすしかないのよ」

疑問の声をあげる一夏に、鈴が告げた。他のメンバーも口々に一夏が適任である、だが、問題点もあるって。問題点は移動手段、どうやって相手についていくか、だった。

「ちょっと待てよ！ お、俺が行くのか？」

「……当然」……」

5人の代表候補生の声が重なる。ホント、こういう時は連携はい

いもんな。

「織斑、これは訓練でない。実戦だ。もし覚悟が無いなら、無理強いはいはしない」

「……………」

わずかの沈黙。頭を切り替えるために目を閉じる一夏。その目が開いたとき、その目はさっきまでの戸惑いの色はなくなっていた。

「やります。俺がやってみせます」

力強い声で一夏は言ったのだった。

「よし。それでは作戦の具体的な内容に入る。現在、この専用機持ちの中で最高のスピードが出せるのは誰だの機体だ？」

その問いにいち早く答えたのは、セシリアだった。チーターコアがあつたら、俺もスピードは出せるんだけど、生憎、それは俺の手元には無いから。

「それなら、わたくしのブルー・ティアーズが。ちょうどイギリスから強襲用高機動パッケージ『ストライク・ガンナー』が届いていますわ」

「オルコット、超音速下での戦闘訓練時間は？」

「20時間です」

「ふむ、それなら適任……………」

その声を遮るように、明るい声が響いた。

「待った待った。その作戦はちよつと待ったなんだよ〜！」

声の方を見ると、束さんが天井から顔を出していた。

「……山田先生、室外への強制退去を」

「えっ！？ あ、はいっ。あの、篠ノ之博士、とりあえず降りてきてください……」

「とうっ」

くるりんっ。空中で一回転して着地。どうしてそんな格好でそんな動きが出来るんだろ？

「ちーちゃん、ちーちゃん。もつといい作戦が私の頭の中にナウ・プリンティング」

「……出て行け」

頭を押さえる織斑先生。束さんを連れ出そうと山田先生は頑張るんだけど、その腕は宙を切るだけだった。

「聞いて聞いて！ ここは断・然！ 紅椿の出番なんだよっ！」

「何！」

「紅椿のデータを見てみて。ほら、パッケージなんかなくても超高

速戦闘ができるんだよ！」

東さんが言うなり、織斑先生の周囲にモニターが浮かぶ。俺の場所からじゃその画面は見えないけど、織斑先生の表情から、そのスベックはとんでもないものなんじゃないのか、そう思い始めたんだ。

「紅椿の展開装甲を調整して、ほいほいほいっと。ホラ！これでスピードバッチリ！」

展開装甲……？ そんなの聞いたことないなあ。そう思って周りを見回したけど、誰一人、展開装甲って言葉は知らないみたいだった。

展開装甲、紅椿の全身、白式の雪片式型に搭載されていて、状況に応じた切り替えが可能って言う、万能型。ちにみに、第4世代型ISの装備。現在、世界中が力を入れて開発してるのは第3世代型。第4世代はパッケージの換装を必要としないで、どこでも、どんな状況でも戦える万能型を目指したもの。勿論、第3世代型とはスペックの差は大きい。

そんなものを個人が作った、そう聞けばスゴイことだと思う。でも、シャル達代表候補生の顔は暗い。それもそのはず。世界中の技術者達は第3世代を作るのに必死になっている。だけど、たった1人がいともたやすくその上を行くものを作った。それは、世界の努力を無駄って言ってるようだった。

「東、言ったはずだぞ。やりすぎるな、と」

「そうだったけ？ えへへ、つつい熱中しちゃったんだよ」

織斑先生に言われて、東さんは皆が黙り込んでる理由がわかった

みたい。その空気に何を思ったのか知らないけど、東さんは言った。
「紅椿は完全じゃないよ。だけど、スペックを引き出せばこの事件の解決なんで夕飯前だよ」って。

「……東、紅椿の調整にはどのくらいかかる？」

「お、織斑先生！？」

声を荒らげたのはセシリアだった。高速戦闘用パッケージを持っていたのは自分だけだったから、作戦に参加できると思ってたみたい。

でも、セシリアの意見は高速戦闘用パッケージをまだインストールしてないこと、それと紅椿の調整が7分で終わることから却下されたのだった。

「よし。では、本作戦では織斑、篠ノ之の両名による目標の追跡及び撃墜を目標とする。作戦開始は30分後。各員、ただちに準備にかかれ」

パン、と手を叩いて織斑先生は言う。それを合図に教員達は自分の作業に取りかかるのだった。セシリア達も手伝いに回ったのを見て、俺も自分にできることをやることにした。唯一の男だから機材を運ぶとかそういう仕事があるだろうし。

30分後。砂浜に並び立つのは紅と白。自身のISを展開した一夏と篠ノ之さんは作戦開始の合図を待っていた。俺達残った専用機持ち組は織斑先生と一緒に作戦室で待機していた。

「一夏さん……」

「大丈夫よ、きっと……」

不安そうに呟くセシリアと鈴。その理由は相手が軍用のISであること。そして、一夏と篠ノ之さんは実戦の訓練を受けていないからだ。代表候補生であるセシリア、鈴、シャル、ラウラ、簪は代表候補生として訓練を受けていたし、俺もオーズとして戦ってきた経験はある。でも、普通の学生だった2人はそのためのものは何もないはず。そんな2人が軍用、つまり戦争のための兵器と戦えるのかは、すごく不安だ。チーターレグが使えれば……、今、必要な力がないことに後悔して、拳を強く握る。後悔したくないから俺は強くなろうと決めたはずなのに。

「英治、大丈夫？」

俺の顔を覗いた、シャルが話しかけてくる。何でもない、そう言いたかったけど、気が付けば俺の口は動いていたんだ。

「大丈夫じゃない、っていうより、悔しいかな。高速戦闘についていく手段はあっても使うことはできない。しかも使えない理由が俺のせいだから、ね」

自嘲気味にこぼした俺は本当に何もできなかったのか考えた。いや、わかっていたんだ。チーターがない以上、作戦に必要なスピードは出せないってこと。無理矢理着いて行っても足手纏いにしかな

らないってことも。

「……英治。大丈夫だよ。一夏達を信じよ」

「……ああ、うん」

すっかり忘れていたよ、信じることも大事だって。自分で言っていて忘れてたなんて、かつこ悪いなあ。

「よし、作戦開始だ」

織斑先生が告げると、モニターは、白式が紅椿の上に乗って飛び立つ光景を映し出していた。白式のエネルギーの節約のため、足の速い紅椿が白式を輸送するっていう作戦なんだ。後は篠ノ之さんのサポートの元、一夏が零落百夜で銀の福音を堕とす。

一夏達との通信が終わってもパツとしない表情の織斑先生。何かあったのか？

「織斑先生、何かあったんですか？」

「ああ、篠ノ之のやつ、浮かれている」

その状態では、何かをし損じる。そう織斑先生は続ける。一夏も警告はしたらしいんだけど、篠ノ之さんは聞き耳持たずってとこだったらしい。手にした力に溺れる、か。何のための力かちゃんと考えるのが大事だよな。それに、言い換えればどんな力も自分の強さにできるってこと。そのことを俺は自分の身をもってわかったから。

しばらくして緊迫した作戦室に入ってきた情報は、作戦失敗。そして一夏が重症を負ったってことだった。

展開装甲と第4世代と作戦開始（後書き）

やっとで始まった3巻の山場。果たして紅椿の、白式の活躍はあるのか？

このままだとそう思う展開でした。別の紅が活躍する予定になってしまうので。

そしてチーターが奪われたのはこのためだけだったっていう。ライオンは完璧な巻き添え。まあ、早いうちに取り返せばいいなあって思ってるけど……

そう言えばMOVIE大戦MEGAMAXって翔太郎にフィリップ。おまけに財団Xも出るんですね。見に行かないと。Wにオーズにフォーゼの構図か……。フォーゼ以外はこの小説には出ますからね。代わりにディケイドでも突っ込むか。あ、そうするとIS要素が……。この際、「欲望の王と世界の破壊者」もしくは「欲望の王と疾風の切り札」でも作ってそっちでバカスカやるか？

それでは、意見、要望、感想等お待ちしております。

傷跡と激昂と反撃（前書き）

C o u n t t h e m e d a l s

オーズが使えるメダルは……

タカ

クジャク

コンドル

クワガタ

カマキリ

バッタ

トラ

ゴリラ

シャチ

タコ

カメ

傷跡と激昂と反撃

「……………」

旅館の1室。壁の時計が示す時刻は作戦失敗となつてから数時間も経過している。

一夏は何時間も目覚めないままだった。あちこちに巻かれた包帯がその結果の無残さを表している。

箒はずっと一夏の側にいて、彼が目覚めるのを待っていた。ただ、このまま目覚めないのではないのか、と不安に押しつぶされそうになる。

（わ、私のせいで……）

作戦開始後、2人は無事予定通りに福音と接触。そのまま戦闘が始まった。福音の高機動、連射可能でなおかつ1発1発の威力が高い砲。そして翼に取り付けられた多くの銃。それらに苦戦しながらも確実に福音を追い詰めていった。そして生まれたチャンス。そこで零落百夜を決めれば作戦成功だった。だが、一夏の目に映ったのは密猟戦。IS学園教員が海域を封鎖したはずなのに、それは一夏達が戦う場の近くに來てしまったのだ。

そして、福音の砲口はその船に向けられる。一夏はそれに気づき、残ったエネルギーでそれを相殺する。命を守った。だが、そのことでチャンスを逃してしまった一夏を箒は何故犯罪者を庇ったのだ、と罵倒する。普段の彼女なら言わない言葉を。それを納得できる一夏ではなく、彼女を説得しようとしたとき、悲劇は起きた。福音は足を止めた箒を狙う。一夏はそれに気づき、反応のできなかった箒を庇うが、途中でエネルギー切れ。激しい痛みにも身を焼かれ、一夏

は意識を離した。

それを思い出す度に箒の胸は絞め上げられる。一夏がこうなったのは自分のせいなのだから。

一夏がこうなったにもかかわらず、誰も箒を責めないことが更に辛かった。

何のための剣道だったのだろうか？ 何のために自分を鍛えてきたのか？ 何のために自分の紅椿ちからを願ったのだろうか？

（私は、もう…… ISには……）

箒が決心をしようとしたとき、ドアが勢いよく開けられた。

バンッ！ その音に驚くが、入ってきた者の顔を見る気にはならなかった。

「あー、あー。わかりやすいわねえ」

遠慮なく入ってくるのは鈴。彼女はこの部屋だけでなく、箒の心にも遠慮なく入ってきたのだ。

「……………」

「あのさあ」

鈴に対して無言を貫く箒。答えないのではない、答えられないのだ。

「一夏がこうなってるのって、あんたのせいなんですよ？」

ISの絶対防御。それが操縦者を守るために強制的に昏睡状態にさせるのだが、一夏の現状を見ると、目を覚ますのかどうかさえ、怪しかった。

「……………」

「で、何？ 落ち込んでますってポーズ？ つぎじゃないわよ！！」

胸ぐらを掴まれ、無理矢理立たされる筈。抵抗する気はなく、ただなされるがままだった。

「やるべきことがあるでしょうが！ 今、やらなくてどうすんのよ！！」

「わ、私は……もう、ISには乗らない……」

バシッ！！

頬をぶたれ、筈は力なく倒れる。だが、鈴の気持ちはそれで晴れるわけではなく、もう一度胸ぐらを掴む。鈴が怒ってるのは一夏がやられた原因である筈ではない。一夏がやられたにも関わらず、こんなメソメソした態度の筈にだ。同じ一夏が好きなのなのに、一夏がやられたのに、こんな風にいられるのが気に食わなかったから。

「甘ったれてんじゃないわよ……専用機持ちつてのは、そんなワガママが許されるような立場じゃないのよ。それとも、アンタは……」

怒りの色で滲ませた瞳はまっすぐ筈を見ていた。

「戦うべき時に戦えない、臆病者か」

「……ど……」

漏れた言葉はか弱かったが、急に火がついたのか、その勢いは大きくなくていく。

「どうしろと言った！ もう敵の居所もわからない！ 戦えるのなら、私だって戦う！」

その言葉と共に、鈴の腕を払い、箒は自信の力で、意思で立ち上がった。その目は先程とは違い闘志が宿っていた。

「ふう、何とかなつたみたいだね」

一夏の様子を身に来たつもりだったんだけど、聞こえてきたのは鈴の叫び。女の子の会話を盗み聞きする趣味があるわけじゃないけど、聞こえてきた内容には興味があった。それに、鈴の様子、いつまでもうなだれたままの篠ノ之さんから、自分が割って入ることも考えたんだけど、その必要は無かったみたいだし。

篠ノ之さんの闘志に火は点いた。ラウラからの情報で福音の居場所もわかってる。シャル達も準備済み。反撃の準備はできた。

これからやることは命令違反の上、ISの無断使用。罰は重いだろうけど、俺は後悔しない生き方を選ぶ。だから……

「行こうか、反撃に」

「……ああ、私もやらねばなしは消に合わんからな」

「ふーん、やっとらしくなったじゃない」

「僕達も準備OKだよ」

「いつでもいけますわ」

「目標はここから30キロ先の沖合にいる。衛星で確認した」

「私も、いける……」

その後、7機のISが飛び立ったのを見て、1人の先生がため息をついたのだった。だが、その顔はため息に反して困ったような顔をしていなかった。どちらかと言えば、やっとか、そういう感じだった。

「見えたぞ。まずは私が先制をしかける。それから作戦通りに」

膝を抱え込むように佇む福音。それをギリギリの範囲で捉えたラウラは、両肩のレールガンで狙いをつける。

ドンッ。放たれた砲弾は福音に当たって、煙を上げる。

「初弾命中。続けて砲撃を行う」

ラウラは砲撃を続けるが、福音はそれをかわしながら、驚く程のスピードでラウラとの距離を縮めていく。さっきまでは4キロあったのも、すぐに3、2キロとその距離は縮まっていく。

シュヴァルツェア・レーゲンが装備している砲戦パッケージ『パソニア・カノーニア』は火力や反動を抑えるための機能とかで、機動性は低い。つまり高速で近づいてくる福音の攻撃をかわすことはできないのだ。

だけど、ラウラにとってはそれも想定内の出来事で、彼女は口元を歪めた。

「セシリア！！」

高速戦闘パッケージ、『ストライクガンナー』を装備したブルー・ティアーズは福音に牽制の射撃をして、ラウラから遠ざける。

ストライクガンナーはブルー・ティアーズの特徴であったビットをブースターにすることによって爆発的な加速を得るもの。スピードを緩めることもなく、セシリアは射撃を続けていく。

だが、福音もやすやすと当たることはなく、銃撃をかわしていく。そんな福音に後ろから迫る影があった。

「遅いよ」

シャルはショットガン2丁による射撃を福音に浴びせていく。福音は体勢を崩すも、すぐに立て直して、銀の鐘と呼ばれる翼に組み込まれた大量の砲口から光の雨を放つ。

「おっと。悪いけど、この『ガーデン・カーテン』はそのくらいじゃ落ちないよ」

シャルが装備した防御型パッケージ、ガーデン・カーテンは実体とエネルギーの2重のシールドで敵の攻撃を防ぐつてものだ。

攻撃が止むとシャルはアサルトカノンを展開。セシリア、ラウラと一緒に攻撃を続ける。

「チャージは、60%……。持ちこたえて……」

戦闘が繰り広げられている遙か上空。そこで俺と簪は待機していた。現状で一番有効なのは簪のプレストキャノンのフルチャージだった。それを当てるためにシャル達で時間を稼ぎ、隙を作る。この中で次に防御力を持っていたのは俺だったから、俺が簪の防衛をすることになったんだ。ちなみにガタカメドルという組み合わせだ。これなら射程もそれなりにあるし、防御、近接とできるからね。

一方、シャル達3人に追い詰められて、逃げることを選んだ福音だけど、その方向には……

「させるかぁ!!」

海面を突き抜けて現れたのは、鈴と箒。加速のために、甲龍が紅椿の上に乗っているんだ。

「離脱する前にたたき落とす!」

紅椿が福音にぶつかると同時に、甲龍が飛び立つ。甲龍の攻撃型パッケージ『崩山』を機動させ、攻撃をしかける。崩山によって増え、4つとなった衝撃砲が火を吹いた。ゼロ距離で放たれたそれは

福音にかわすこともさせず、その体を弾き飛ばした。

『!?!』

「チャンスは今だ!」

バランスを崩した福音が体勢を立て直そうとしたときに俺がコンドルレッグで蹴りかかる。その一撃は大したダメージにはなっていないんだけど、俺の目的は簪が照準をあわせる時間を作ることだから。

「簪!」

「うん、ブレストキャノン、シュート!」

俺が福音から離れた瞬間、大きな光が福音を飲み込んだ。

「やりましたの!?!」

攻撃を受け落下していく福音を見て、セシリアが呟いた。相手が海に落ちたのが確認できたから、俺達は警戒を解き、顔を見合わせた。これで終わった。そう思った瞬間のことだった。海が青白く輝いたのは。

「これは……!?! 一体、何が起きているんだ……?」

「!?! まずい、これは『セカンド・シフト第2形態移行』だ!」

皆がISからの警告に反応した瞬間はもう遅かった。

「何っ!？」

消えたと思ったら、一番遠くにいたはずのラウラを掴む福音。その速さに皆が目を疑う。

「ラウラを離せえ！」

シャルはショットガンを展開して、福音の背後を取る。けれど、福音の全身から現れたエネルギー翼はそのまま全方位に対する光弾の雨になった。掴まれているラウラはともかく、ガーデン・カーテンで守りきることは叶わずシャルも吹き飛ばされて、海に落ちていった。

「シャル! ラウラ! くっ!」

両腕のシールドで直撃をもらうのだけは何とかかわしている状態なんだけど、このままじゃこっちが負けるのは目に見えていた。俺の後ろに行った簪を除いた面々も直撃はしていないけど、じわじわとダメージを与えられていたんだ。

「くっ! 不覚ですわ……」

次にやられたのはセシリア。彼女の銃は巨大であるために接近戦には向かない。だから猛スピードで近づいてきた福音から逃れることはできなくて海に落ちていった。

「セシリアまで……。何とかする方法は……」

そう考えても、防戦一方の今を打開する方法は思いつかなかった。ライドオーズのラトラーターなら福音以上のスピードなんだけど、

今は使えない。だったらガタキリバで？ それも全方位のビームに撃ち落とされて終わりだ。

「私の仲間をよくも！」

俺が考えてる内に筈が接近戦をしかける。紅と銀、2つの閃光がぶつかりあう。斬撃を、スラスターを。局所局所を加速させながら戦う。展開装甲を持つ紅椿でこそ、できる接近戦なんだ。でも、それがいつまでも続けられるわけじゃなかったんだ。

「な、エネルギーが……」

トドメの一撃を入れようとしたときのエネルギー切れ。福音がその隙を見逃すわけもなく、篠ノ之さんは首を掴まれる。そのまま福音の砲口は光り出した。

（すまない、一夏……）

今の紅椿のエネルギー残量ならその攻撃を耐え切れはしないかもしれない。輝きを増す翼に、篠ノ之さんは祈るように目を閉じる。

だけど、いつまでもたつても光は放たれることはなくて、逆に福音は篠ノ之さんから遠ざかったのだった。

「あ……」

篠ノ之さんの声が漏れる。その声は喜びの色だった。彼女と福音の間に降り立った白い騎士。

「一夏……なのだな……」

「俺の仲間は、誰1人やらせねえ！」

姿を変えた白式を纏い、一夏はこの戦いに舞い降りてきた。

「一夏っ、体は、傷は！」

「おう、待たせたな」

一夏の側による篠ノ之さんに笑って応える一夏。こんな状況で話し込むのはアレだけど、今くらいはいいかな。

「はっ、セイヤッ！」

シャル達を簪と鈴に頼み、俺は福音に接近戦を仕掛ける。せめてあの2人が話終えるまで、時間を取らなくちゃな。

放たれる光弾を両腕の盾で防ぎ、コンドルの爪で蹴る。だが、福音はそれを後ろに下がることでかわして、光弾の雨を放ってくる。

「ぐっ……」

さすがに両腕のシールドだけではそれを防ぎきることはできなくて、シールドエネルギーはどんどん減っていく。

「英治、大丈夫か？」

篠ノ之さんとの話を終えた一夏が福音に切りかかる。福音は俺達と離れるようにして、それをかわす。

「うん、なんとかね。エネルギーから考えると俺と一夏だけだよ。アイツと戦えそうなの」

「ああ、俺は再戦といくか」

「じゃあ、俺はこっちに」

『タカ！　トラ！　バツタ！　タ・ト・バ　タトバ　タ・ト・バ！
』！

ライドオーズ、白式、福音。3機のISは高速で交わり合う。爪が、剣が、光弾が入り乱れる。

「はっ！」

トラクローを突き立てるが、上に飛んでかわされる。でも……

「一夏！」

「おう！」

一夏は右手だけで持った雪片式型を振り下ろす。その一撃もよけられる。以前までの白式だったら剣を返さないと、次の手は打てない。でも、第2形態移行をした白式の左腕は新たな武器がある。

雪羅、場合により変化されることのできるソレの指先から出たエネルギー状のクローで斬る。

福音は白式を危険な存在と認識して、距離を取り、翼の砲門を一斉に開く。俺と一夏は放たれた光弾の中をくぐり抜けながら近づいていく。でも、光弾の数は増えていく一方で、よけ続けるのも難しくなってきた。このまま時間が経てば。こっちのシールドエネルギー

ーがゼロになってどうしようもなくなる……。だったら。

「英治、何をするんだよ！」

白式の盾になる。俺の思う通りだったら、白式は燃費が悪いままのはず。いくら零落百夜で相殺できるからってそれを何回もやらせるわけにはいかないからね……

「くっ、今は福音を……」

エネルギーが尽きる。ここまでかな……

「英治……！」

水飛沫を上げて海に落ちる。後は一夏がなんとかしてくれるかな？ ……でも、このままっていうのも悔しいかな……。うん、そうだよな。まだ手はあるんだし。

その瞬間だった、福音が進化したとき青白く輝いた海が、真紅に輝いたのは。

傷跡と激昂と反撃（後書き）

やっとでここまで来た……。次回は皆大好きあのコンボが。

MOVIE大戦MEGAMAXに新しいオーズのコンボが出るらしいことと、オーズの最終回付近のディレクターズカット版が出るのを聞いてテンション上がり中。

それでは、意見、要望、感想等お待ちしております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3977v/>

欲望の王と無限の空

2011年11月4日09時15分発行